ウィズ・ザ・ビートルズ

松村雄策

小学館

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

はじめに　9
1　プリーズ・プリーズ・ミー　……… 13
2　ウィズ・ザ・ビートルズ　……… 23
誰もビートルズを知らなかった　32
3　ア・ハード・デイズ・ナイト　……… 39
4　ビートルズ・フォー・セール　……… 49
ビートルズが走って来た　58
5　ヘルプ！　……… 69
6　ラバー・ソウル　……… 79
まだビートルズではなかった　90
7　リヴォルヴァー　……… 97
8　オールディーズ　……… 109
ビートルズを見た――一九六六年七月一日・日本武道館　119

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

9 サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド ……… 131
10 マジカル・ミステリー・ツアー ……… 143
ジョンとポールがいた 154
11 ザ・ビートルズ［ホワイト・アルバム］ ……… 161
12 イエロー・サブマリン ……… 173
いつもビートルズがいっしょにいた 184
13 アビイ・ロード ……… 191
14 レット・イット・ビー ……… 203
そしてビートルズは北極星になった 216
おわりに 228
文庫版のあとがき 231
解説 235

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

はじめに

ビートルズのデビュー・シングル・レコード「ラヴ・ミー・ドゥー／P・S・アイ・ラヴ・ユー」が発表されたのは、一九六二年十月五日である。つまり、今年（二〇一二年）はちょうど五〇周年ということになるのだ。なんてったってビートルズなのだから、本来ならばそれを記念するなんらかの動きがあってもいいはずだ。しかし、ポールは何もしないと発言した。

他の人がやることはビートルズはやらないという、ビートルズ一流の考え方だろう。逆にいうと、ビートルズは他の人がやらないことをやるということだ。今年レコード・デビュー五〇周年のバンドはもうひとつあって、ビーチ・ボーイズがオリジナル・メンバーで再結成して、ニュー・アルバムをレコーディングして、ワールド・ツアーを行なっている。同じようなことは、やりたくないということだろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

たとえば、CDが発売されるようになったのは一九八二年あたりからで、すぐにみんながかつてのレコードをCD化した。しかし、ビートルズがCD化したのは、それが一段落した一九八七年だった。普通だったら、最初のCDから、リマスター盤、リミックス盤、ペイパー・ジャケット盤、デラックス・エディション盤と、一枚のアルバムが数種類にもなってもおかしくはない。ところが、ビートルズのリマスター盤がリリースされたのは二〇〇九年で、二十二年後のことだった。

今ではロック・クラシックと思われているビートルズの作品も、当時は誰もやらなかった実験の結果だったということは理解されている。だけど、六〇年代からのファンとしては、そこまでにならなくてもいいではないかとも思ってしまう。日本でビートルズのレコードが初めて発売されたのは一九六四年で、そのとき小学校六年生だった僕達の世代がおそらくファンの中では最年少だったと思う。それが、現在六十一歳である。当時二十歳だったら、七十歳である。六〇周年で大々的にやるといわれても、七十一歳であり八十歳である。

それを考えたとき、ビートルズの全オリジナル・アルバムについて記してみようと思った。文中にも書いているとおりに、リアル・タイムでビートルズを聴いていた人は現在のファンの数分の一である。それがもう、老人といわれてもおかしくはない年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

齢になっている。六〇周年までは待てないし、書いておかなければならなかったことになってしまうようなこともある。

しばらく前まで、僕はビートルズは音楽の世界遺産だと言っていた。今では、音楽の北極星だと思っている。他の星は動いても、北極星は四百光年の彼方で光っている。五十光年の彼方から輝いているビートルズがいたから、僕は生きてこられた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

1

プリーズ・プリーズ・ミー

PLEASE PLEASE ME

1963年3月22日

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

1
プリーズ・プリーズ・ミー
PLEASE PLEASE ME

1963年3月22日

① アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア
I Saw Her Standing There
② ミズリー　Misery
③ アンナ　Anna (Go To Him)
④ チェインズ　Chains
⑤ ボーイズ　Boys
⑥ アスク・ミー・ホワイ　Ask Me Why
⑦ プリーズ・プリーズ・ミー　Please Please Me
⑧ ラヴ・ミー・ドゥー　Love Me Do
⑨ P.S.アイ・ラヴ・ユー　P.S. I Love You
⑩ ベイビー・イッツ・ユー　Baby It's You
⑪ ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット
Do You Want To Know A Secret
⑫ 蜜の味　A Taste Of Honey
⑬ ゼアズ・ア・プレイス　There's A Place
⑭ ツイスト・アンド・シャウト　Twist And Shout

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ビートルズが誕生したのは、いつだったのだろうか。ジョン・レノンとポール・マッカートニーが、セント・ピーターズ・チャーチで初めて逢ったときだろうか。そこに、ポールの下級生のジョージ・ハリソンが加わったときだろうか。ブライアン・エプスタインがキャヴァーン・クラブのライヴを見て、マネージャーになったときだろうか。ジョージ・マーティンがオーディション・テープを聴いて、プロデューサーになったときだろうか。リンゴ・スターがピート・ベストに代わって、ドラム・セットに座ったときだろうか。

それは誰にも分からない。しかし、たった一日でレコーディングされたデビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』が、発表から約半世紀の時間が経過した現在でも、当たり前のようにCDショップに並んでいて、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」や「ツイスト・アンド・シャウト」などの収録曲が、なんの違和感も

なく町に流れていることは、誰もが知っている。

ビートルズのデビュー・シングル「ラヴ・ミー・ドゥー／P・S・アイ・ラヴ・ユー」は、今から五十年前の一九六二年九月十一日に録音されて、十月五日に発表ということになって、ヒット・チャートの十七位にまで上るスマッシュ・ヒットになった。そして、セカンド・シングルの「プリーズ・プリーズ・ミー／アスク・ミー・ホワイ」は、十一月二十六日のレコーディング、一九六三年一月十一日の発表で、三月には第一位というビッグ・ヒットになった。

それにともなって作られたのが、このデビュー・アルバムである。『プリーズ・プリーズ・ミー・ウィズ・ラヴ・ミー・ドゥー・アンド・12アザー・ソングス』という正式タイトルが、当時の雰囲気を漂わせている。二曲のヒット・ソングを強調しているところに、まだ五〇年代の匂いが残っている。新人バンドの、デビュー・アルバムらしい。二〜三年経ったら、ビートルズはこんなタイトルは拒否しただろう。まだ、スタート地点にいたのだ。

当初、ジョージ・マーティンはビートルズのホーム・グラウンドであるリヴァプールのキャヴァーン・クラブでのライヴ・レコーディングを考えていたという。彼等の

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

演奏の臨場感を生かしたかったようだ。しかし、結局、通常どおりに、アビイ・ロード・スタジオで録音することになった。とはいっても、全十四曲中既発表シングル四曲以外の十曲を、一九六三年二月十一日に一日でレコーディングしている。

どちらにしても、一日である。新人バンドのデビュー・アルバムに、制作費をかけたくなかったのだろう。当時のレコード会社の思惑は、バンドの人気など二〜三年のものだから、その間に出来るだけたくさんのレコードを作って、売ってしまおうというものだったのだろう。そういうモンキー・ビジネス的なものも、二〜三年のうちにビートルズは引っ繰り返してしまう。二月十一日というと、「プリーズ・プリーズ・ミー」はトップ・テンに入ったぐらいである。ということは、このアルバムの企画は、「プリーズ・プリーズ・ミー」の発売あたりに、すでにあったのだろう。さすが、ジョージ・マーティンである。さすが、ブライアン・エプスタインである。

音の感覚は、明らかにビート・バンドである。それで、全十四曲中、オリジナルが八曲カヴァーが六曲というのが、興味深い。つまり、ジョンとポールには基本的にオリジナル中心でやっていくという、強い意志があったのだろう。八曲対六曲なら、二曲勝ち越している。

当時のバンドでオリジナル中心というのは、まずいなかった。あの頃の他のバンド

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のデビュー・アルバムを、見てみよう。ローリング・ストーンズは全十二曲で、オリジナルは三曲である。後にレノン＝マッカートニーと比較されるジャガー＝リチャーズは、「テル・ミー」一曲だけである。アニマルズは全十二曲で、オリジナルは「ストーリー・オブ・ボー・ディドリー」一曲だけである。これも、ボー・ディッドリーのジャングル・ビートに乗せている。そんな状況でオリジナルが過半数を占めているというのは、やはりビートルズは異例のバンドだったのである。つまり、作詞作曲をして歌って演奏していう、現在のロック・バンドの基本を作ったバンドなのだ、ビートルズは。

このアルバムでもっとも注目したいのは、オープニング曲のポールが歌う「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」と、エンディング曲のジョンが歌う「ツイスト・アンド・シャウト」である。ロックンロールである。ブラック・ミュージックである。ここにも、ビートルズの強い意志がうかがわれる。いうまでもなく、この二曲[illegible]

[illegible]

[illegible]

年二月十一日から、永遠のものになったのである。

リード・ヴォーカルは、ジョンが「アンナ」、「アスク・ミー・ホワイ」、「プリーズ・プリーズ・ミー」、「ベイビー・イッツ・ユー」、「ゼアズ・ア・プレイス」、「ツイスト・アンド・シャウト」と六曲。ポールが「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」、「ラヴ・ミー・ドゥー」、「P・S・アイ・ラヴ・ユー」、「蜜の味」と四曲。ジョージが「チェインズ」、「ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」の二曲、リンゴが「ボーイズ」一曲。そして、ジョンとポールで「ミズリー」。

ロックンロールのビート・バンドだというのに、後のビートルズにつながるヴァラエティーに富んだところにも気がつく。ミュージカル・ナンバーの「蜜の味」や、ディズニー映画のテーマ・ソングをイメージしたという「ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」である。「蜜の味」では、リンゴはブラシを使っているようだ。「ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」をジョージが歌っているのは、作者のジョンが歌うのは恥ずかしかったからではないだろうか。

そういうところを強引に戻してしまうのが、ジョンのヴォーカルである。特に、「アンナ」や「ベイビー・イッツ・ユー」は、もはやソウル・バラッドといってもい

いのではないだろうか。これはビートルズの大きな特長のひとつでもあって、アメリカの黒人ガール・グループのポップ・ソングをソウルフルにしてしまう。このヴォーカルは、とても二十二歳の若者の声とは思えない。もう人生の裏表を見てしまったかのようにさえ、聴こえる。「ゼアズ・ア・プレイス」にも、のちのジョンが確実にいる。つまり、私小説ならぬ、私ロックである。「マザー」が聴こえる。

ジャケット写真も、面白い。ビートルズの全アルバム中、唯一、四人がにっこりと笑っている。やはり、新人バンドのデビュー・アルバムである。この撮影をしたのは、当時のEMI本社のビルである。僕も一九八二年に仕事の打ち合わせで行ったことがあるのだけど、そのときは忘れていた。日本に帰って来てから気がついて、そういえば入ってすぐのロビーはああいうふうに吹き抜けになっていた。

リンゴのヘア・スタイルがリーゼントだというのも、面白い。というのは、ビートルズ加入直後にマッシュルーム・カットで演奏している写真が、いくらもあるからだ。ということは、まだマッシュルーム・カットに違和感があって、リーゼントにしたりしていたのだろうか。それとも、これは加入したばかりの頃の写真なのだろうか。

この『プリーズ・プリーズ・ミー』は一九六三年三月二十二日に発表されて、ヒッ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ト・チャートでは四月六日に十位で初登場して五月四日に第一位になっている（メロディー・メイカー）。そして、そのまま十一月二十三日まで、三十週間第一位という、モンスター・ヒット・レコードになっている。

このモンスター・レコードを落として、十一月三十日に第一位になったのは、ビートルズのセカンド・アルバム『ウィズ・ザ・ビートルズ』である、なんと。そのまま、第一位『ウィズ・ザ・ビートルズ』第二位『プリーズ・プリーズ・ミー』という状況は、二十週間続いた。

結局、『プリーズ・プリーズ・ミー』は一九六三年四月六日から一九六四年六月二十七日まで、六十四週間トップ・テンにいることになった。つまり、一年三か月、ベスト・テンにいたことになる。

とんでもないことが、始まったのだ。それを知っていたのは、イギリスとヨーロッパの一部だけだった。アメリカでは『イントロデューシング・ザ・ビートルズ』というタイトルで、全十二曲で発売されたのだけど、マイナー・レーベルからの発表だったために、まったくヒットしなかった。日本ではレコードも発売されていなくて、その存在さえ知らなかった。

このアルバムから、現在のロックンロールは始まったのだ。これがなかったら、何

もなかったのだ。

ジョン・レノン二十二歳、ポール・マッカートニー二十歳、ジョージ・ハリソン二十歳、リンゴ・スター二十二歳。長い旅が始まった。

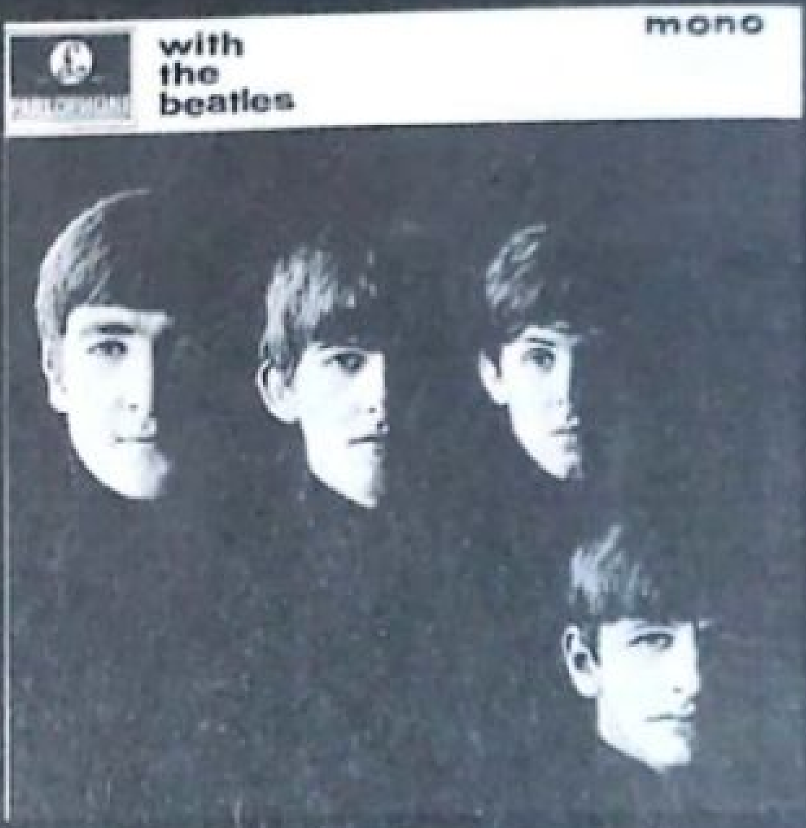
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

2 ウィズ・ザ・ビートルズ

WITH THE BEATLES

1963年11月22日



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

2

ウィズ・ザ・ビートルズ
WITH THE BEATLES

1963年11月22日

1. イット・ウォント・ビー・ロング　It Won't Be Long
2. オール・アイヴ・ゴット・トゥー・ドゥー
   All I've Got To Do
3. オール・マイ・ラヴィング　All My Loving
4. ドント・バザー・ミー　Don't Bother Me
5. リトル・チャイルド　Little Child
6. ティル・ゼア・ウォズ・ユー　Till There Was You
7. プリーズ・ミスター・ポストマン
   Please Mister Postman
8. ロール・オーヴァー・ベートーヴェン
   Roll Over Beethoven
9. ホールド・ミー・タイト　Hold Me Tight
10. ユー・リアリー・ゴット・ア・ホールド・オン・ミー
    You Really Got A Hold On Me
11. アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン
    I Wanna Be Your Man
12. デヴィル・イン・ハー・ハート　Devil In Her Heart
13. ノット・ア・セカンド・タイム　Not A Second Time
14. マネー　Money

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

まず、ジャケット写真である。黒いタートル・ネックのセーターを着た、ハーフ・シャドウのビートルズ。このモノクロームの一枚が、レコード・ジャケットをアートにした。初期の彼等のイメージを決定した、クールなジャケットである。

元ビートルズのスチュワート・サトクリフの恋人のアストリッド・キルヒヘアが、デビュー前のハンブルクで、彼等のこういう写真を撮っていたというのは、今では明らかになっている。ということは、この写真は彼等の希望だったということになる。にっこり笑った『プリーズ・プリーズ・ミー』のジャケット写真はほんの半年前なのだけど、もう何年も時間が経ってしまったかのようにさえ思える。撮影スタジオに行く時間がなくて、コンサート会場のドレッシング・ルームの前の廊下で写したというのだから驚いてしまう。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

『ウィズ・ザ・ビートルズ』のレコーディングは、七月に二日間と九月に二日間行なわれているという。こういうふうに変則的になったのは、『プリーズ・プリーズ・ミー』のヒットが続いていたからだろう。『プリーズ・プリーズ・ミー』は二月に録音されて、三月に発売されている。となると、『ウィズ・ザ・ビートルズ』も七月に録音して、八月に発売するつもりだったのではないだろうか。

ところが、五月四日にヒット・チャートの第一位になった『プリーズ・プリーズ・ミー』は、その位置から落ちる気配さえない。前作が大ヒットし続けているというのに新作を発表したりしたら、両方の売れ行きに影響を与えることになる。そういうことで、一度始めたレコーディングを中止したのではないだろうか。しかし、八月になっても、『プリーズ・プリーズ・ミー』は第一位である。それでも、時間が空き過ぎるのもおかしいので、九月に録音を再開したのだろう。終わったら十月に発売することは出来るのだけど、まだ『プリーズ・プリーズ・ミー』は第一位である。

つまり、もうモンキー・ビジネス的なやり方は通用しないということを、ビートルズはレコード会社に示したのである。時間をかけずに絶え間なくレコードを作って、売っていこうなどということはしなくても、素晴らしい作品を作れば、ロング・アンド・ベスト・セラーになるということを分からせたのである。ロック・バンドはアー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ティストでもあるということを、デビュー・アルバムで証明したといってもいい。以後、ビートルズの立場は、少しずつ変わって行く。

『プリーズ・プリーズ・ミー』はいつまでたっても第一位である。それでも、しょうがないので、十一月二十二日に『ウィズ・ザ・ビートルズ』を発売する。そして、十一月三十日には、初登場で第一位になる。第二位は先週まで第一位だった『プリーズ・プリーズ・ミー』で、第一位『ウィズ・ザ・ビートルズ』第二位『プリーズ・プリーズ・ミー』というのが二十週間続くことになるというのは前に書いた。

『ウィズ・ザ・ビートルズ』はそのまま一九六四年四月二十五日まで、二十二週間第一位ということになる。その後、十一週間第二位になって、第三位になった七月十日に第一位になったのは、もはやいうまでもないだろう『ア・ハード・デイズ・ナイト』である。

結局、イギリスのアルバム・チャートの第一位は、一九六三年五月四日から一九六四年四月二十五日までのぴったり一年間、ビートルズだったのである。ちなみに、一九六四年の一年間だけに限ってみれば、ビートルズが第一位だったのは四十一週間になる。

現在だったら、アルバムが何十週間も第一位になったら、すぐに次の作品を発表しようなどとは思わないだろう。三年に一作でも、おかしくはないのだから。ところが、この当時は、一年に二枚が普通だったのだ。ボブ・ディランもビーチ・ボーイズもローリング・ストーンズも、みんなそうだった。場合によっては、三枚などということもあった。もちろん、粗製濫造は避けなければならない。

しかし、三年というのは、長過ぎないだろうか。たしかに、作品は完全なものになる。三十曲レコーディングして、そのうち十五曲をCDに収録したなどということをよく聞く。だから、たとえばオアシスのCDは、いつも良く出来たオアシスのアルバムである。つまり、ディープなファン以外には、彼等の変化や進歩は分かり難くなる。いつも、出来上がっている。

六〇年代のビートルズやボブ・ディランは、一年に二枚だったから変化や進歩がはっきりと分かった。まだ未消化でも、まず作ってしまう。延長線上に行き、そこから変化進歩する。それが明白なのが、ビートルズの嬉しいところである。

たとえば、前作の「ツイスト・アンド・シャウト」は、今作では「マネー」になっている。「蜜の味」は「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」になっている。「ベイビー・イッツ・ユー」は「オール・アイヴ・ゴット・トゥー・ドゥー」になっている。「ボー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

イズ」は「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」になっている。「ゼアズ・ア・プレイス」は「ノット・ア・セカンド・タイム」になっている。『プリーズ・プリーズ・ミー』と『ウィズ・ザ・ビートルズ』が、双子のレコードといわれる所以である。

たとえば、「ディス・ボーイ」が「イエス・イット・イズ」になり、「ロング・トール・サリー」が「アイム・ダウン」になることなどは、すぐに分かるだろう。「イエスタデイ」は「エリナー・リグビー」になって、「シーズ・リーヴィング・ホーム」になった。「トゥモロー・ネヴァー・ノウズ」は「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」になって、「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」になった。そういうことである。

ミュージシャンが質を重要視するのは、理解出来る。それでも、変化や進歩も見たい。だって、三年に一枚だったら、ビートルズは『プリーズ・プリーズ・ミー』、『リヴォルヴァー』、『アビイ・ロード』で終わりじゃないか。『ア・ハード・デイズ・ナイト』も、『ラバー・ソウル』も、『サージェント・ペッパーズ』も、『ホワイト・アルバム』もなくなっちゃうんだぜ。

たった半年でも、ビートルズには大きな変化があらわれた。つまり、ロックンロー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ルでありながら、洗練されてポップであるということである。これがビートルズの特長であるということは、いうまでもない。そして、オリジナル曲の完成度が、極まった。一年前のシングル曲が「ラヴ・ミー・ドゥー」だったということが、信じられないぐらいだ。それだけ、充実している。

前作と同じように、今作もオリジナル八曲カヴァー六曲の勝ち越し。リード・ヴォーカルは、ジョンが「イット・ウォント・ビー・ロング」、「オール・アイヴ・ゴット・トゥー・ドゥー」、「プリーズ・ミスター・ポストマン」、「ユー・リアリー・ゴット・ア・ホールド・オン・ミー」、「ノット・ア・セカンド・タイム」、「マネー」の六曲。

ポールが「オール・マイ・ラヴィング」、「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」、「ホールド・ミー・タイト」の三曲。ジョージが「ドント・バザー・ミー」、「ロール・オーヴァー・ベートーヴェン」、「デヴィル・イン・ハー・ハート」の三曲。リンゴが「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」。ジョンとポールで「リトル・チャイルド」。

オリジナル曲では「オール・マイ・ラヴィング」がまず挙げられる。"コージョライズ……"と始まった瞬間に涙が出そうになる、ポールの最高傑作の一曲である。

「オール・アイヴ・ゴット・トゥー・ドゥー」や「ノット・ア・セカンド・タイム」

も、僕達が知っているもうひとりのジョンだ。ジョージが「ドント・バザー・ミー」で作曲を始めたのにも、注目したい。全二十四曲のビートルズのカヴァー曲の中でも、「プリーズ・ミスター・ポストマン」は三本の指に入るだろう。あと二曲は、僕は「ツイスト・アンド・シャウト」と「ロング・トール・サリー」だ。

また、「フロム・ミー・トゥー・ユー」や「シー・ラヴズ・ユー」といった、何週間も第一位になったスーパー・ヒット・ソングを収録しなかったというのも、『ウィズ・ザ・ビートルズ』の姿勢があらわれている。それどころか、ほぼ同時期にレコーディングされた、あの「抱きしめたい」も収録されていないのだ。

「抱きしめたい」は『ウィズ・ザ・ビートルズ』の発売一週間後の十一月二十九日に発売されて、いつものようにイギリスではナンバー・ワン・ヒットになった。しかし、今回はそれだけでは終わらなかった。アメリカでも、キャピトル・レコードが発売することになったのだ。そして、一九六四年一月十三日にアメリカで発売された「抱きしめたい」は、二月一日にヒット・チャートの第一位になった。

一九六三年、イギリスのトップに立ったビートルズは、一九六四年、アメリカのトップに立つことになる。つまり、それは世界のトップに立つということである。

ついに、世界を動かすマジカル・ミステリー・ツアーが始まったのである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

誰もビートルズを知らなかった

ビートルズのレコードが初めて日本で発売されたのは、一九六四年だった。最初は「プリーズ・プリーズ・ミー」のシングルの予定だったのだけど、アメリカで「抱きしめたい」がビッグ・ヒットになったので、急遽、日本でもそうすることにしたという。だから、「抱きしめたい」が二月五日発売で、「プリーズ・プリーズ・ミー」が三月五日発売ということになっている。しかし、初めの予定は違っていたから、「抱きしめたい」のレコード番号はOR－一〇四一で、「プリーズ・プリーズ・ミー」はOR－一〇二四である。

どちらにしろ、一九六三年の日本では、ビートルズの名前など誰も知らなかった。しかし、僕には、新聞の囲みの海外ミニ・ニュースのようなところで、「紳士の国もびっくり。イギリスでビートルズというおかっぱ頭の四人組が大人気」というような

記事を読んだ記憶がある。それが一九六三年だったのか一九六四年だったのかは、覚えていないけれど。一九六四年だったらレコードが発売されていたから、やはり一九六三年だろうな。

ビートルズのレコードが発売される前から、僕は自分でレコードを買って聴いていた。ポータブル電蓄を買ってもらったのは、小学校三年生のときだった。たしか、三千円だったと思う。ひと昔ふた昔前の渋谷系などというのが流行していたときには、お洒落なグッズとしてあつかわれていたのだけど、今考えると、ポータブル電蓄というのは侘しいものだった。

だいたい、四〇センチかける二〇センチかける五センチぐらいの代物で、もちろんモノラルだけである。カートリッジは三十三回転と四十五回転と七十八回転まであって、回して変えていた。ターン・テーブルにLPをセットするともういっぱいで、カヴァーはしまらなくなってしまう。七十八回転のSPレコードもかけた覚えがあるけれど、なんだったのかは分からない。

カセット・テープは、まだなかった。オープン・リールのテープ・レコーダーしかなかった。当然テレビやラジオとは接続出来なくて、どうしても録音したいときには、

スピーカーの前にマイクをセットして、息をつめていなければならなかった。一九六八年のエリック・バードンとアニマルズの日本公演のテレビ放送を、僕はそうやって録音した。あとでそれをカセット・テープにダビングしたのだけど、まあひどい音だった。

もちろん、ビデオもなかった。後年、大人になってからビデオ・デッキを買ったときには、いっしょに買ってきた『マジカル・ミステリー・ツアー』を見ながら、家でビートルズの映画が見られるなんて夢のようだと思った。

当時は、ロックとはいわなかったと思う。ポップスだったのではないだろうか。ジャズといっていた人もいたと思う。つまり、アメリカ人がやる音楽は、すべてジャズだと思っていたのだろう。だいたい、外国人といえばみんなアメリカ人だったのだから。近所のおじさん達は、アメちゃんといっていたような気がする。当時、東京に何店かあったライヴ・ハウスも、ジャズ喫茶といっていた。ジャズのレコードを聴きながらコーヒーを飲む店ではなくて、ライヴでポップ・ミュージックを見る店である。

その頃の日本の主流は、六〇年代アメリカン・ポップスを日本語でカヴァーしたものだった。スターといったら坂本九で、僕が最初に買ったレコードは「上を向いて歩

こう」だった。他には、元祖ジャニーズのようなスリー・ファンキーズとか、中尾ミエ伊東ゆかり園まりの三人娘とか、アイドル達が人気者だった。そういう人達のレコードも持っていたけれど、やはりバンドには興味があった。

代表的なのは、寺内タケシとブルー・ジーンズ、ジャッキー吉川とブルー・コメッツだろうか。当時の日本のバンドの面白いところは、このように必ずリーダーの名前がついているところだ。そして、各バンドに数人歌手が所属しているところだ。ブルー・ジーンズには内田裕也やはりまさゆき、ブルー・コメッツには鹿内タカシや尾藤イサヲだった。つまり、エルヴィス・プレスリー系のロックンローラーである。坂本九も同じことで、ダニー飯田とパラダイス・キングにいた。

日劇のウエスタン・カーニヴァルにも、小学生の僕は行っていた。このウエスタン・カーニヴァルというタイトルが、分からなかった。何故、ポップス・カーニヴァルでも、ロックンロール・カーニヴァルでもなかったのだろうか。これは何十年も経ってから、分かった。日本ではまずウエスタン・ミュージックのブームがあって、ロカビリーはそこから派生したものだと考えられていたのだ。ロックンロールも同じものだと思われたのだろう。だから、後年タイガースやテンプターズのグループ・サウンズの時代になっても、ウエスタン・カーニヴァルといっていたのか。なんだかなあ。

CamScannerでスキャン

今では信じられないのだけど、当時は毎晩必ずどこかのラジオ局で洋楽のヒット・パレード番組が放送されていた。基本的にはアメリカン・ポップスで、そこにフランスのシャンソンやイタリアのカンツォーネも入ってきていた。よく分からないことのひとつに、映画音楽がやたらと人気があったことが挙げられる。いつ聴いても、「エデンの東」や「鉄道員」がベスト・テンに入っていたような気もする。

つまり、ライヴやレコードやテレビでは日本語のカヴァーを聴いていて、ラジオでは洋楽を聴いていたのである。このゆがみ具合が、六〇年代初めらしい。

不思議なのは、そのビートルズ以前の日本で、僕はスリー・ファンキーズが日本語で歌う「マイ・ボニー」を買っていることだ。日本題は、「恋人は海の彼方に」である。いうまでもなく、「マイ・ボニー」はトニー・シェリダンのバックにビートルズがついた曲で、一九六一年五月にドイツでレコーディングされて、十月に発売されている。イギリスでは一九六二年一月発売で、アメリカでは一九六二年四月発売である。

日本ではトニー・シェリダンと彼のビート・ブラザーズ名義で「マイ・ボニー・ツイスト」として、一九六二年五月に発売されている。はっきりいって、これがイギリスやアメリカでヒットしたという記録はない。おそらくドイツでもそうだろうし、日

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

本でもヒットしなかった。では、何故スリー・ファンキーズはカヴァーして、一九六三年三月に発売したのだろうか。

もちろん、「マイ・ボニー」はトラディショナルだから知られていたのだろうけれど。スリー・ファンキーズのアレンジはトニー・シェリダンのスタイルである。当時の日本のレコード会社のディレクターは、他人が目をつけないような曲を探してきて、ヒットさせるのが、有能だと考えられていたようだ。ヒット・パレードにフランスやイタリアの曲が入っているのだから、ドイツの知られざる名曲としてカヴァーしたのかも知れない。

だから、僕はビートルズの名前さえ知らないときに、ビートルズが演奏した曲の日本語カヴァー・ヴァージョンを聴いていたことになる。

CamScannerでスキャン

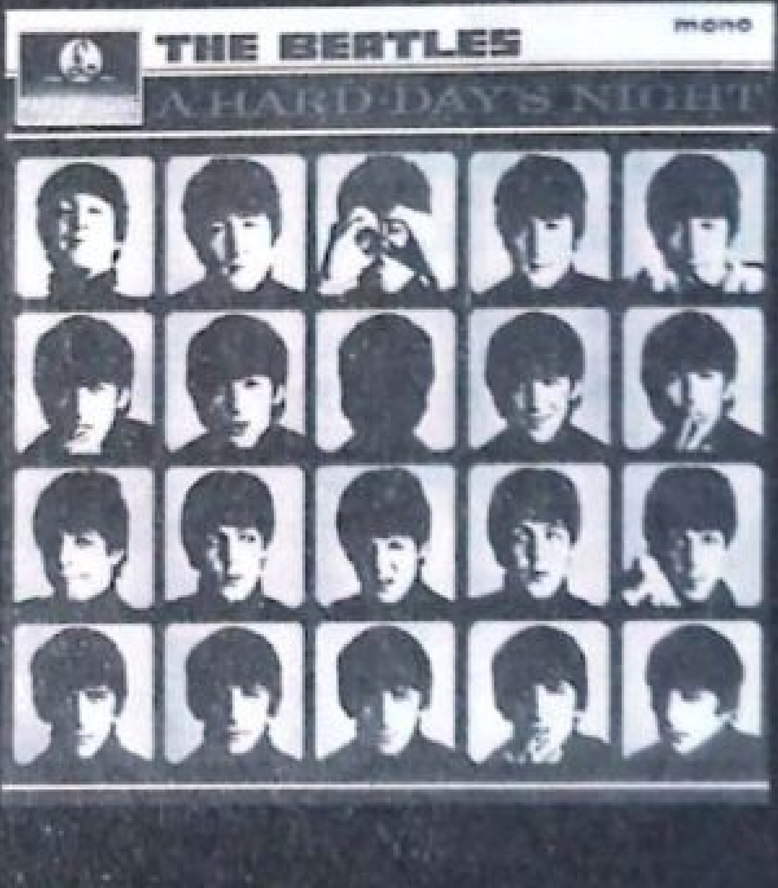
CamScannerでスキャン

3

ア・ハード・デイズ・ナイト

A HARD DAY'S NIGHT

1964年7月10日



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

3

ア・ハード・デイズ・ナイト
A HARD DAY'S NIGHT

1964年7月10日

① ア・ハード・デイズ・ナイト　A Hard Day's Night
② 恋する二人　I Should Have Known Better
③ 恋におちたら　If I Fell
④ すてきなダンス　I'm Happy Just To Dance With You
⑤ アンド・アイ・ラヴ・ハー　And I Love Her
⑥ テル・ミー・ホワイ　Tell Me Why
⑦ キャント・バイ・ミー・ラヴ　Can't Buy Me Love
⑧ エニイ・タイム・アット・オール　Any Time At All
⑨ ぼくが泣く　I'll Cry Instead
⑩ 今日の誓い　Things We Said Today
⑪ 家に帰れば　When I Get Home
⑫ ユー・キャント・ドゥー・ザット　You Can't Do That
⑬ アイル・ビー・バック　I'll Be Back

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一九六四年一月十三日に、アメリカで「抱きしめたい」が発売された。これはキャピトル・レコードという初めてのメジャーなレコード会社からの発売だったために、プロモーションもしっかりと出来て二月一日にはヒット・チャートの第一位になった。そして、二月七日から二十一日までの初めてのビートルズのアメリカ・ツアーは、とてつもないことになった。ワシントンとニュー・ヨークでの二回のコンサートはフルハウスになって、「エド・サリヴァン・ショー」の三週続けての出演は驚異的な視聴率になった。

そして、レコードが売れた。つまり、一九六三年にマイナー・レーベルから発売して、まったく売れなかったレコードも、「抱きしめたい」の大ヒットで、みんな売れ始めたのである。一番有名なのは四月四日のビルボードである。第一位「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、第二位「ツイスト・アンド・シャウト」、第三位「シー・ラヴ

ズ・ユー」、第四位「抱きしめたい」、第五位「プリーズ・プリーズ・ミー」。第一位から第五位まで、ビートルズが独占である。前代未聞だろう。

実をいうと、これだけではなかった。三十一位「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」、四十一位「フロム・ミー・トゥー・ユー」、四十六位「ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」、五十八位「オール・マイ・ラヴィング」、六十五位「ユー・キャント・ドゥー・ザット」、六十八位「ロール・オーヴァー・ベートーヴェン」、七十九位「サンキュー・ガール」。トップ・ワン・ハンドレッドに、十二曲も入っていたのである。曲数からいったら、四月十一日には十四曲になっている。

曲目を見れば分かるとおりに、イギリスでのシングル曲以外にも、LP収録曲がどんどんとシングル・カットされて、とんでもないことになっている。当時は各国が勝手にシングル発売出来たので、売れるとなったらこういうことになる。結局、一九六四年のアメリカのチャートには、ビートルズの曲が二十九曲も入ることになった。そのうち、第一位になったのは六曲である。アメリカがそうなったということは、世界がそうなったということである。ちなみに、日本では一九六四年には、東芝から十七枚、ポリドールから三枚、シングルが発売されている。

LPについても、前年発売された『イントロデューシング・ザ・ビートルズ』の他に、『ミート・ザ・ビートルズ』、『ザ・ビートルズ・セカンド・アルバム』『ア・ハード・デイズ・ナイト』（ユナイテッド・アーティストの完全サウンドトラック）、『サムシング・ニュー』と四枚も発売されている。結局、この年のアルバム・チャートも、第一位は三十週ビートルズになっている。

LPも各国が選曲を変えても、かまわなかった。イギリス盤は十四曲収録であるのに、アメリカ盤は十一曲であって、イギリスではLPに収録しなかったシングル曲も、アメリカでは入れていたから何枚も作ることが出来た。短期間に多数のヒット・ソングが生まれ、いつでもベスト・セラー・LPがあったことが、ビートルズの人気を大きくしたというのは、否めない事実である。しかし、オリジナルをまったく無視した水増しのような発売方法に、ビートルズは納得していなかったようだ。

『ア・ハード・デイズ・ナイト』は初めてのビートルズの主演映画の、サウンドトラック・レコードである。初公開時の日本題は、『ビートルズがやって来る　ヤァ！ヤァ！ヤァ！』という素晴らしいものだった。動くビートルズは、「エド・サリヴァン・ショー」しか見ていない日本のファンにとっては、正に血沸き肉躍るものだった。

この映画は何回か公開されていて、最新のものは「ア」を取って、『ハード・ディズ・ナイト』という陳腐な題名になっているのが、哀しい。

一説によると、『ビートルズがやって来る』は同時期に公開された短篇ドキュメンタリー・フィルム『The Beatles come to town』と間違えてつけたというのだけど、そんなことはどうでもいい。『ヤァ!ヤァ!ヤァ!』は『Yeah! Yeah! Yeah!』を日本語読みしてしまったのではないかとうるさいことを言う人もいるけれど(僕だ)、そんなことはどうでもいい。僕達は『ヤァ!ヤァ!ヤァ!』と言っていた。原っぱを走りまわるのには、ぴったりだった。

レコーディングはアメリカから帰国した直後の二月二十五日から六月三日までの間に、八日間で行なわれている。『プリーズ・プリーズ・ミー』の一日や『ウィズ・ザ・ビートルズ』の四日に比べると、時間はずっと増えたのだけど、このセッションではEPの「ロング・トール・サリー」、「アイ・コール・ユア・ネーム」、「スロー・ダウン」、「マッチボックス」も録音しているので、全十七曲ということになる。二月から六月までかかったのは、三月四月は映画の撮影をしていたからだ。レコーディングが終わった次の日には、ワールド・ツアーでデンマークに向かっている。

『ア・ハード・ディズ・ナイト』は一九六四年七月十日に発表されて、七月十八日に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

初登場第一位になっている。そして、そのまま十二月五日まで、つまり夏から冬まで、二十一週間第一位を保持している。十二月十二日に第二位になったときの第一位は、いうまでもなく四枚目の『ビートルズ・フォー・セール』だった。同名のシングル・レコードは同日に発表されて、やはり同日の七月十八日に第一位になっている。

今作は全十三曲で、ついに全曲オリジナルになっている。基本的にリード・ヴォーカルをとっている者が、メインの作曲者という、レノン＝マーカートニーの公式からすると、このうち十曲がジョンの作曲ということになる。つまり、ポールの「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、「アンド・アイ・ラヴ・ハー」、「今日の誓い」以外の、すべてである。ジョージが歌っている「すてきなダンス」は、明らかにジョンの作品である。

ジョンの才能があふれてきた一枚といっても、いいだろう。レコード・デビューから約一年半で、完成してしまったのだ。もはや、ビート・バンドの面影は消え去って、ほとんど全曲ロックのスタンダードといってもかまわないだろう。これがビートルズであって、現在でもまったく古くはない。

まず、最初のジャーンのコード名が不明という「ア・ハード・デイズ・ナイト」か

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ら始まる。いろいろなギタリストに訊ねたのだけど、このコードははっきりとしない。最近では、複数のコードを重ねているという説もある。間奏がジョージのギターとジョージ・マーティンのピアノを重ねたものだから、このイントロもそういうものなのかも知れない。

この曲で興味深いのは、ヴァースをジョンが歌っていてミドルをポールが歌っているところである。今迄はどちらかがメイン・メロディーを歌って、どちらかがそれにハーモニーをつけるというものだったのだけど、ジョンとポールが一曲の中でヴォーカルを分け合うというのは、これが初めてである。こういった曲は「デイ・トリッパー」や「オール・トゥゲザー・ナウ」など、数曲しかない。最後は、『レット・イット・ビー』の「アイヴ・ガット・ア・フィーリング」だ。

「恋する二人」はポップでブルージーで、切なくなってくる。当時、日本ではシングル・カットされて、「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」よりも人気があったような気もする。「恋におちたら」はジョンとポールのハーモニーが、圧倒的である。どちらがメイン・メロディーか分からなくて、上下が交錯して聴こえるようなところさえある。これを重ねていくと、どうなるのか。『アビイ・ロード』の「ビコーズ」になるのではないだろうか。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「すてきなダンス」はジョージにぴったりの曲で、ジョンとポールのバック・コーラスも独創的である。ジョンのリズム・ギターも実に歯切れがいい。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」はやはり名曲で、ジョージのアコースティック・ギターが美しい。ポールはこれを作るために「蜜の味」や「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」をやっていたと考えると、腑におちる。

「エニイ・タイム・アット・オール」は、初期ビートルズの最高傑作のひとつだろう。ビートルズの特長のひとつに、イントロなしの曲が多いということがある。このアルバムでも、「ア・ハード・デイズ・ナイト」も入れれば、「恋におちたら」、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、「エニイ・タイム・アット・オール」「家に帰れば」と五曲もある。その衝撃は、果てしない。三回「エニイ・タイム・アット・オール」と叫ぶうちの、二回目だけポールである。世界一の二分十秒である。

「今日の誓い」は、ポールの新しい試みだろう。ここまで余計なものをすべて取り去って、ここまで迫って来る曲というのも少ない。「家に帰れば」と「ユー・キャント・ドゥー・ザット」は、明らかにビートルズのブラック・ミュージックである。ここに、「アイ・コール・ユア・ネーム」も入れると、ビートルズのブラック・ミュージックがはっきりと見えてくる。「アイル・ビー・バック」は、「エニイ・タイム・ア

ット・オール」と向き合っている曲かも知れない。なんといっても、ミドルのメロディーが違うというのが、凄い。

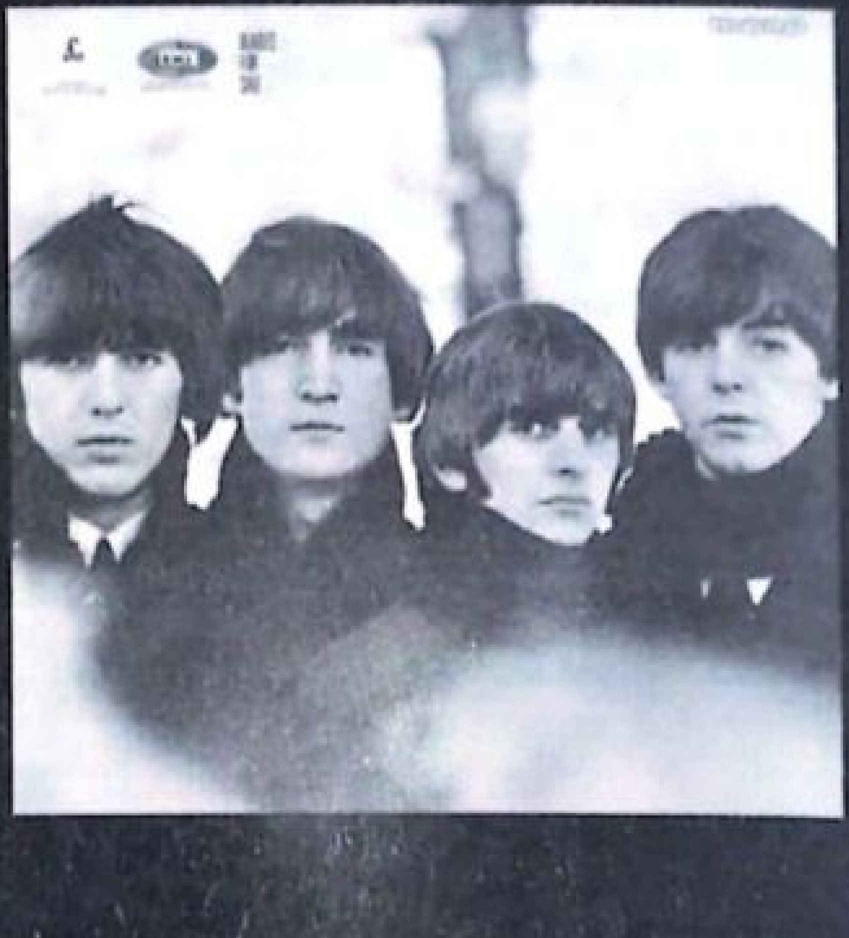
『ア・ハード・デイズ・ナイト』は、間違いなく初期ビートルズの代表作である。もはやロックでもポップでもなくて、ビートルズになっている。考えてみれば、すべてラヴ・ソング〟で、『ラバー・ソウル』よりも約一年半も前に、同じことをやっていたのだ。このジョンの才能をポールが追いかけるというのが、以後のビートルズになる。

ちなみに、僕が最初に買ったLPが、『ア・ハード・デイズ・ナイト』だった。もちろん、東芝のオデオンで、ディスクは赤いエヴァーグリーンだ。ジャケットは、「すてきなダンス」のやつだ。四十八年経っても、まだ持っている。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

4・ビートルズ・フォー・セール
BEATLES FOR SALE

1964年12月4日



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

4

ビートルズ・フォー・セール
BEATLES FOR SALE

1964年12月4日

① ノー・リプライ　No Reply

② アイム・ア・ルーザー　I'm A Loser

③ ベイビーズ・イン・ブラック　Baby's In Black

④ ロックンロール・ミュージック　Rock And Roll Music

⑤ アイル・フォロー・ザ・サン　I'll Follow The Sun

⑥ ミスター・ムーンライト　Mr Moonlight

⑦ a. カンサス・シティー ～ b. ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ
a. Kansas City ～ b. Hey, Hey, Hey, Hey

⑧ エイト・デイズ・ア・ウィーク　Eight Days A Week

⑨ ワーズ・オブ・ラヴ　Words Of Love

⑩ ハニー・ドント　Honey Don't

⑪ エヴリー・リトル・シング　Every Little Thing

⑫ パーティーはそのままに
I Don't Want To Spoil The Party

⑬ ホワット・ユーアー・ドゥーイング　What You're Doing

⑭ みんないい娘　Everybody's Trying To Be My Baby

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一九六六年七月一日、僕は日本武道館で午後六時半からのビートルズのコンサートを見た。今、考えると、前座が約一時間で、ビートルズが約三十分といったところだったのだろう。終わってすぐ家に向かった。午後九時から、テレビでこの日の午後三時からのマチネー公演が放送されることになっていたからだ。

終わったのは、おそらく午後八時ぐらいだろう。しかし、放送開始時間までには、家には帰れなかった。武道館周辺は混乱していたから、それはしょうがない。それでも、画面は前座の演奏だったので、そのあとのビートルズのライヴはすべて見ることが出来た。つまり、この日、僕はライヴとテレビでビートルズを見たのだ。贅沢だったともいえるし、逆にもったいなかったともいえる。

翌日、中学校へ行って、ビートルズを見てきたぞと自慢しようとしたのだけど、みんなテレビで見ているので、反応は薄い。それどころか、一曲目が「ミスター・ムー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ンライト」だという。何を言ってるんだ、一曲目は「ロックンロール・ミュージック」だよ。僕は武道館でちゃんと見たんだ。しかし、全員が「ミスター・ムーンライト」だと言って、相手にしてくれない。不思議だというしかない。

この謎が解けたのは、それから十年後ぐらいだっただろうか。その番組が、再放送されたのだ。この番組を最初から見るのは、これが初めてということになる。早朝、羽田空港に着いたビートルズは、キャデラックのリムジンに乗って、首都高をホテルに向かう。そのとき、流れたのだ、「ミスター・ムーンライト」が。そうか、そういうことだったのか、コンサートではなくて、番組の一曲目が「ミスター・ムーンライト」だったのか。

たしかに、この場面に「ミスター・ムーンライト」は合っている。選曲した人は、ちょっとしたものだ。しかし、のちに、その選曲した人が「ミスター・ムーンライト」は唯一のイントロなしの曲だったからと言っているのを読んで、首をひねった。イントロなしの曲が多いのは、ビートルズの特長のひとつである。来日前の『ラバー・ソウル』にも、何曲か収録されている。そこで、一九六四年の「ミスター・ムーンライト」というのは、どういうことなのだろうか。

「ミスター・ムーンライト」の効果は素晴らしかったけれど、また新しい謎が出来て

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

しまった。

ジャケット写真が、『ビートルズ・フォー・セール』の四人の意思をあらわしている。不機嫌なのである。『プリーズ・プリーズ・ミー』のようににっこりと笑わなくても、『ウィズ・ザ・ビートルズ』や『ア・ハード・デイズ・ナイト』のように普通の顔をすればいい。しかし、これはあからさまに不機嫌である。おそらく、撮影はレコーディングの終了直後だから、十一月だろう。十一月のロンドンは、もう寒い。北風が吹いて、枯れ葉が舞っている。ビートルズはオーヴァーコートを着てマフラーを巻いて、不機嫌そうに立っている。

一九六四年はビートルズがアメリカでブレイクし、世界のトップに立った年である。初めてのアメリカ・ツアー、映画『ア・ハード・デイズ・ナイト』の撮影、同名アルバムのレコーディング、五か国のワールド・ツアー、一か月以上の本格的なアメリカ・ツアー、同じく一か月以上のイギリス・ツアー、そしてその間を縫っての『ビートルズ・フォー・セール』のレコーディングだった。

レコーディングは八月から始まって、十一月に終了した。しかし、その四か月間でスタジオに入れたのは、八日だけだったという。この仕事とこの仕事の間に一日ある

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

から、スタジオに行こうというようなものだったのだろう。レコーディングの時間がそういうものだったら、当時作曲の時間もなかっただろう。

それで、アルバム十四曲とシングル二曲（「アイ・フィール・ファイン」と「シーズ・ア・ウーマン」）、全十六曲を完成させたのだ。その直後の、不機嫌な顔である。

『ビートルズ・フォー・セール』は一九六四年十二月四日に発表されて、ヒット・チャートでは十二月十二日に初登場で第一位になっている。その前週まで第一位だったのが『ア・ハード・デイズ・ナイト』だったというのは、前項でも書いた。そのまま一九六五年二月六日まで九週間第一位で、二月十三日に第二位になった。面白いのは、第二位を十週間続けた後、四月二十四日にまた第一位になって、五月二十九日まで六週間第一位になったことだ。

同時期にレコーディングしたシングル「アイ・フィール・ファイン」は十一月二十三日に発表されて、十二月五日から六週間第一位になっている。

アメリカでは選曲をいじられて、オリジナル・アルバム収録曲八曲、それ以外の曲三曲の全十一曲で、『ビートルズ'65』というタイトルで一九六四年十二月十五日に発売されて、一九六五年一月九日から九週間第一位になっている。残された六曲はその

他の五曲といっしょにされて、『ビートルズ VI』というタイトルで、一九六五年六月十四日に発売されて、七月十日から六週間第一位になっている。

「アイ・フィール・ファイン」は十二月二十六日から、三週間第一位。シングル・カットした「エイト・デイズ・ア・ウィーク」は三月十三日から、二週間第一位。

前作の『ア・ハード・デイズ・ナイト』が全曲オリジナルだったのに、『ビートルズ・フォー・セール』はまたオリジナル八曲カヴァー六曲になってしまった。前作があれだけ素晴らしかったのだから、やろうと思えばやれただろう。しかし、あまりにも忙しくて、時間がなかった。作曲をする時間もなかったのだろう。

ポールの「アイル・フォロー・ザ・サン」などは、十代の頃に作った曲だという。作曲をする時間はなかったのだけど、「蜜の味」や「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」や「アンド・アイ・ラヴ・ハー」のような美しいバラッドの流れは中断させたくなかったのだろう。

当然、ジョージやリンゴのために曲を書くということも出来なかった。それどころか、ジョージの「みんないい娘」もリンゴの「ハニー・ドント」も、ビートルズらしいアレンジをほどこすことも出来なかった。ほとんど、オリジナルのままなのだろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

どちらもコーラスさえないというのは、考えてしまう。

それでも、「アイル・フォロー・ザ・サン」のように、流れを絶やさないような試みはしている。ブルージーなワルツの「ベイビーズ・イン・ブラック」は、曲調はまったく異なるけれど「恋におちたら」のような複雑なコーラスをジョンとポールでやっている。「ワーズ・オブ・ラヴ」はジョンとポールとジョージの三人のコーラスで、これもずっと流れている。ここらへんは、しっかりしている。

特筆すべきは、やはりジョンだろう。ジャケットとともに、『ビートルズ・フォー・セール』のイメージを作ってしまったのが一曲目の「ノー・リプライ」だった。ここからは、凄まじいまでの寂寥感が漂ってくる。冬の風の前で、立ちすくんでいる。「アイム・ア・ルーザー」や「パーティーはそのままに」のような、自己否定の曲もある。ジョンの私ロックが始まったといっても、かまわないだろう。

つまり、レコードを発表したい、それをヒットさせたい、有名になりたい、金持ちになりたい……とやってきて、実際にそうなったら、それは望んでいたようなものではなかったということだろう。セレブなんて、くだらないものだったのだろう。しかし、音楽的才能はあふれてくる。ここからのジョンは、そういう失望感と音楽的才能との闘いになっていく。それが「ヘルプ!」になるのだ。それが「ストロベリー・フ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

イールズ・フォーエヴァー」になるのである。

オリジナルが作れなかったために、録音することになったカヴァーはどれも秀逸である。ジョンの大好きなチャック・ベリーの「ロックンロール・ミュージック」は、ワン・テイクだったという。日本ではシングル・カットされて、活動期のビートルズのシングルでは一番のヒットになって八十五万枚のセールスだったようだ。それを知ったビートルズの一九六六年のコンサートは、一曲目は「ロックンロール・ミュージック」になった。

ポールの大好きなリトル・リチャードの「カンサス・シティー／ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ」も、ジョージの大好きなカール・パーキンスの「みんないい娘」もワン・テイクだったそうだ。

『ビートルズ・フォー・セール』は、ビートルズがスーパースターになったために、まともな時間がとれなくなった、不幸なレコードだったのかも知れない。ビートルズのカントリー・アンド・ウエスタン・アルバムと呼ばれることもあるけれど、そうせざるをえなかったのだろう。ビートルズのマジックを使えなかったのだから。しかし、内向的にはなってしまうけれど、ジョンは変わり始めたのである。

ビートルズが走って来た

ロンドンの中心部から少し北西に行ったところに、メリルボーンという駅がある。映画『ア・ハード・デイズ・ナイト』で、ビートルズがファンに追いかけまわされて、なんとか列車に乗り込むという、最初の部分の舞台になる場所である。もちろん、内部は当時とは変わっている。ミルクの自動販売機もないし、三分間写真のボックスもない。

その駅の右側に一本の道があって、ボストン・プレイスという。つまり、ギターがジャーンと鳴って、ビートルズが走って来る道である。建物を直しても外装はそれまでと変えてはいけないという法律が、イギリスにはあるそうだ。だから、ボストン・プレイスも一九六四年のままに、そこにある。ビートルズが走って来る道が、目の前にある。僕は思考能力がなくなって、ただ立ちすくんでいた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一九六四年に、中学校一年生で、ビートルズがこの道を走って来るのを見なかったら、これほどまでにビートルズに夢中になることはなかっただろう。毎日、ビートルズのレコードを聴くことはなかっただろう。学校の帰りに、原っぱで「キャント・バイ・ミー・ラヴ」を歌いながら、走りまわることもなかっただろう。髪が長いといって、高校の体育教師に殴られることもなかっただろう。

一九六九年の十月に、高校を退学になることもなかっただろう。ギターを覚えて、バンドを組むこともなかっただろう。音楽雑誌を作って、編集することもなかったはずだ。レコードを作って、ステージで歌うことだってなかったはずだ。こうして、文章を書くこともなかったに決まっている。つまり、まったく違う人生だったのかも知れないのである。

ボストン・プレイスの一本の道を走って来るビートルズを見て、僕と同じように人生が決定した人は世界中に数え切れないぐらいにいるだろう。百万人だろうか、二百万人だろうか。三百万人だろうか、四百万人だろうか。だって、ロンドンから遠く離れた東京の、大森の中学一年生でもそうなったのだから。

ギターがジャーンと鳴って、ビートルズはボストン・プレイスの一本の道を走って来た。それから一時間半、ビートルズは走り続けて、また走り続けて、そして走り続

けた。最後には、ヘリコプターに乗って、空を飛んで行った。あのとき、世界は変わったのである。

映画『ア・ハード・デイズ・ナイト』を、僕は映画館だけで二百回は見ているだろう。一九六四年の初公開時には数回だったのだけど、一九六五年に『ヘルプ！』が公開されると、その数年後にはこの二本立てで、二番館三番館で上映されることになった。『イエロー・サブマリン』や『レット・イット・ビー』も公開されると、この四本がいろいろと組み合わされて、二本立てや三本立てで、上映されるようになった。しかし、一本はだいたい『ア・ハード・デイズ・ナイト』だった。

それを追いかけて、僕は東京中の二番館三番館に行った。まだ「ぴあ」のような情報誌などなかったから、同じように上映館で顔を合わす人と情報を交換したりもした。だから、日曜日などは一日中映画館の中にいて、パンと牛乳で繰り返し見ることもあった。そして、テレビ・ディレクターがポールのおじいさんに向かうときには、みんなで「ゲット・ヒア・アウト！」と言った。

当然、ビデオが登場してからはビデオで、ＤＶＤが登場してからはＤＶＤで、これまで三百回にはなっているだろう。今でも、一年に一度や二度は見る。一時期には、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

台詞など全部覚えてしまって、字幕がうるさいので、アメリカへ行ったときにビデオを買ってきた。現在発売されているDVDは、音が好きではないので、アメリカで買ってきたビデオを、DVDにして見ている。

おそらく、ビデオは三回発売されていると思われる。少しずつ、音が違うような気もする。ジョージが寄りかかって、アンプが落ちそうになるとき、ガタッと音がするものと、無音のままのものがある。僕が見ているのは三回目で、どうもジョージ・マーティンが音楽のミックスをし直しているようだ。

それまで、僕達は動くビートルズを見ることは出来なかった。レコード・ジャケットと「ミュージック・ライフ」のグラビアだけだった。「エド・サリヴァン・ショー」もあったけれど、数曲であっという間に終わってしまった。現在はDVDが発売されていて、見てもあのときどの曲が演奏されたのかは分からない。覚えているのは、風邪で寝ていたことで、親に叱られないかとびくびくしながら、テレビの前に行った。あっ、ビートルズが動いている……それだけだった。

その動くビートルズを一時間半たっぷりと見ることが出来たのだ、『ア・ハード・デイズ・ナイト』は。演奏シーンで一番驚いたのは、ステージのビートルズの立ち位置のかっこ良さだった。スタンド・マイクが二本あって、右にはジョンががに股気味

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

でしっかりと立っている。左にはそれを中心にして、ポールとジョージが立っている。ジョンのリッケンバッカーのネックは、右に行っている。ポールのヘフナーのネックは、左利きだから左に行っている。後方には、リンゴがいる。かっこいいっちゃ、ありゃしない。

僕の初期のビートルズのイメージは、モノクロームである。ブラック・アンド・ホワイトの印象が強い。それは『ウィズ・ザ・ビートルズ』のジャケット写真の影響もあったのだろうけれど、なんといっても『ア・ハード・デイズ・ナイト』である。あれだけ繰り返し見れば、そういうことにもなる。

だから、最初のうちは、『ヘルプ!』には違和感があった。しかし、あれはもう初期ではなかったのだ。それに気づくのは、当然何年も時間が経ってからだけど。モノクロームのビートルズが走りまわる、『ビートルズがやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!』。

この映画を見たある日本の映画監督が、「この映画は、僕が助監督時代に、やってはいけないと教えられた手法だけで、作られている」と言っていた。つまり、それまでの映画の文法を、ぶち壊していたらしい。どうして、リチャード・レスター監督は、そんなことが出来たのだろうか。この映画のプロデューサーのウォルター・シェンソ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ンが、映画会社のユナイテッド・アーティストに出した企画書には、「サウンドトラック・レコードを発売する権利を得るためだけの映画である」と、書いてあったという。

一九六四年のビートルズである。レコードはすべて大ヒットしていた。ユナイテッド・アーティストはレコードも発売していた。レコードさえ売れれば、映画の内容などどうでも良かったのだろう。その目論見どおりに、アメリカではイギリス盤とは異なるサウンドトラック・レコードが、ユナイテッド・アーティストから発売されて、大ヒットする。映画で流れた八曲（「ぼくが泣く」も含む）とジョージ・マーティンの四曲である。

一九六四年七月二十五日から十月二十四日まで、十四週間第一位になっている。十一位になったのは一九六五年二月六日だから、二十九週間ベスト・テンにいたことになる。百位になったのは六月十九日だから、四十九週間トップ・ワン・ハンドレッドにいたことになる。ビジネスは大成功である。

そのユナイテッド・アーティストよりもうまく動いたのが、ウォルター・シェンソンである。どうやら、彼はこの映画の初公開から十年経ったら、権利は自分のものになるという契約をしたようだ。つまり、ビデオやＤＶＤの収益は、すべてウォルタ

ー・シェンソンのものになったのだ。モンキー・ビジネスの中での、モンキー・ビジネスである。

映画の内容は、コンサート・ツアー中のビートルズの一日半の物語である。ファンに追いかけられて列車に乗って、またファンに追いかけられてホテルに着く。マネージャーの目を盗んで、ディスコに行ったりカジノに行ったりする。翌日は記者会見に出席したり、テレビ局でリハーサルをやったりする。抜け出したリンゴが警察に捕まって、三人が助けに行く。そして、コンサートを行なう。

こう書くとどうということはないようだけど、リチャード・レスターは今迄に見たことがないような奇妙奇天烈なものにしてしまう。たとえば、ビートルズが乗っている列車のコンパートメントに、いかにもイギリスふうビジネスマンの男が入って来る。そこで言い合いになって、からかい飽きたビートルズは出て行く。男がほっとしていると、「おじさん、ボール取ってよ」という声が聞こえる。窓の外を見ると、ビートルズが列車と並走しながら騒いでいる。こんなの、見たことがない。

たとえば、リンゴが警察に捕まって、三人が助けに行く。そして、逃げ出す。カメラは警察署の前にフィックスしてあって、まずビートルズが走って出て来る。それを

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

何人もの警官が走って、追って行く。何故か、最後にリンゴが出て来る。もう一度戻って来て、もう一度逃げ出す。今度は、最初に逃げたはずのジョンが、警官達の後ろからヘラヘラ笑いながら走って行く。こんなの、見たことない。

おそらく、これがイギリスのセンスなのかも知れない。アメリカ映画には、ないだろう。のちに、『モンティー・パイソン』を見ても、すぐにおかしかったのは、これを見ていたからだろう。『ミスター・ビーン』も、同じ種類である。

この映画を初めて見たときのことは、今でも覚えている。松竹セントラルで、父に連れて行ってもらった。映画館に着くと、父は受付の女性に「支配人を呼んでくれ」と言った。支配人が出て来ると、「ちょっと、見せてもらうよ」と言った。支配人は「どうぞ、ごゆっくり」と言って、入れてくれた。これがおかしいことだとは、思っていなかった。きっと、父と支配人は知り合いなのだろうと、思っていた。たしかに、支配人は父のことを知っていたのだろう。

基本的に、いろいろな有楽町の映画館から、毎月何枚かずつ招待券が送られてきていた。招待券がなくても、こうやって父と行けばどこでも入場出来た。だから、小学校の頃から、僕は一月に一度や二度は有楽町で映画を見ていた。ぼんやりと、父は興

行関係の仕事をしていると思っていた。それは正しかったのか、そうではなかったのか。僕が十八歳のときに、父は五十歳で亡くなってしまった。なんとなく訊ね辛かった母も、亡くなってもう十年になる。それでも、こちらが歳を取ってきたためだろう、伯母や叔父に少しずつ話を聞けるようになってきた。

父は明治大学を中退して、高島屋の和服売場で働いていたのだという。伯母によると、その頃、友達に「高島屋にかっこいい人がいるから、見に行こう」と誘われて、行ってみたら父だったそうだ。「あれは私の弟よ」と言ったら、友達はびっくりしていたらしい。たしかに、目立つ人ではあった。

そこではかなりの成果を出して、応援してくれる人もいて、日本橋あたりで、自分の店を持ったという。ところが、戦争が始まってしまった。満州に行ったという話は、聞いたことがあった。戦後、帰って来たら、店は焼けてなくなっていて、応援してくれた人は行方不明になっていたようだ。その後、やはり高島屋に勤めていた母と結婚するのだから、父は高島屋に戻ったのだろうか。そこらへんは、分からない。

返還前の沖縄に父が行くことがあって、パスポートを見せてもらったことがあった。当時のパスポートには、本人の特長を記す欄があった。そこには「ミギホホニナナメニキズアリ」と書いてあって、そのとおりのものがあった。よく「コレモンがさあ」と言

って、指を動かすときのあれである。某大物右翼の用心棒をしていたという。父が亡くなったとき、その人からかなりの額の香典が送られてきたと、誰かが言っていたのを、覚えている。

頬を斬られたのは銀座で、父はすぐにタクシーに乗ったらしい。向かったのは病院ではなくて、大森の家だった。そこで拳銃を持って、待たしてあったタクシーで銀座へ戻ったそうだ。持っていったのだから、家に拳銃があったのだろう。その後、どうなったのかは知らない。某大物右翼に関係することなのかも知れない。

今では、友達と酒を飲みながら、そういう話をすると、「そういうことをやっていたというのに、貧乏だったというのが納得出来ないいんだよな」と笑うことにしている。貧乏だった。昭和三〇年代なんて日本中が貧乏だったといわれれば、それまではある。家庭も学校も、楽しくはなかった。しかし、いつのまにか、少年時代は甘酸っぱい思い出がいっぱいあるような気分になっていた。一種の防衛本能だったのかもしれない。

僕の少年時代は、楽しくなかったはずだ。父はいつも酔っぱらっていた。ビールの一本か二本で酔っぱらっていたようだったから、酒は強くなかったのだろう。それでも、飲まずにいられないことがあったのだろう。父の死因は糖尿病昏睡というもので、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

直接の原因は風邪だった。糖尿病で糖を摂らないようにしていて、弱っていたところに風邪をひいたのだ。

ジョージ・マーティンにインタヴューしたとき、僕は「僕の父はギャング・スターで、僕もそうなっていたかも知れません。だけど、ビートルズを聴いて、拳銃を撃つよりもギターを弾くほうが素晴らしいということを知りました。ありがとうございました」と言った。ビッグ・ジョージは複雑そうな顔をしながらも、「いや、レコードを作っていた僕達自身も、楽しかったんだよ。そういうふうに言ってもらえると、嬉しいよ」と言ってくれた。

三百回見ている『ア・ハード・デイズ・ナイト』を、最初に見たのは父といっしょだった。これは、忘れることは出来ない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

5

ヘルプ!

HELP !

1965年8月6日

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

5

ヘルプ!
HELP!

1965年8月6日

① ヘルプ! Help!
② ザ・ナイト・ビフォア The Night Before
③ 悲しみはぶっとばせ
You've Got To Hide Your Love Away
④ アイ・ニード・ユー I Need You
⑤ アナザー・ガール Another Girl
⑥ 恋のアドバイス You're Going To Lose That Girl
⑦ 涙の乗車券 Ticket To Ride
⑧ アクト・ナチュラリー Act Naturally
⑨ イッツ・オンリー・ラヴ It's Only Love
⑩ ユー・ライク・ミー・トゥー・マッチ
You Like Me Too Much
⑪ テル・ミー・ホワット・ユー・シー
Tell Me What You See
⑫ 夢の人 I've Just Seen A Face
⑬ イエスタデイ Yesterday
⑭ ディジー・ミス・リジー Dizzy Miss Lizzy

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

『ヘルプ！』はビートルズ主演映画第二作の、サウンドトラック・レコードである。この映画は僕は大好きなのだけど、一般的にはそれほど評価は高くないようだ。たしかに、『ア・ハード・デイズ・ナイト』のような爆発力はなくて、ジェームズ・ボンドのようなアクション映画のパロディーのようなところがある。しかし、喜劇映画として見たら、素晴らしい作品なのではないだろうか。ビートルズ映画として見るから、前作と比べてしまうのではないか。少なくとも僕は百回は見ているはずで、いつ見ても面白い。

『ア・ハード・デイズ・ナイト』がそうだったように、後の『モンティー・パイソン』や『ミスター・ビーン』と同じ世界である。ということは、フランスのジャック・タチの『ぼくの伯父さん』や『プレイタイム』とも、近いということになる。サイレント映画時代の喜劇のようなところもあって、スラップスティックであったり、

ナンセンスであったり、シュールであったりもする。ドタバタ喜劇というのは、本当に面白いのである。

カイリ教というカルト集団があって、その生贄がつける赤い大きな指輪が、何故かリンゴに送られてきて、はめたら外れなくなってしまう。それは生贄の証しだから、カイリ教の集団がリンゴの生命を狙ってくる。そこにそれを欲しがるマッド・サイエンティストも加わって、世界中で追っかけっこをする。ストーリーはこういうもので、それよりも細部がいちいち面白い。

たとえば、カイリ教が使う車であって、ハロッズの運搬車であったり、ソフト・クリームのミスター・ウインピーの車であったりする。グッド・イヤーズの飛行船を使ったりもする。ビートルズがトイレに行くと、手を乾かす風が出る器具が逆に吸い込むようになって、ポールのスーツの袖だけが吸い込まれ、ジョージはワイシャツだけが吸い込まれてしまう。それを見て、ジョンがハハハと無表情に笑う。

ビートルズの住む家には自動販売機が完備されているし、軍の演習場でレコーディングはするし、ポールは注射されて五センチぐらいに小さくなってしまうし、書き始めたらきりがない。初めて見るのだったら、一分間に一回は笑うのではないだろうか。

リンゴとポールは演技をしているのだけど、あまり表情を変えないジョンやジョージ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のほうがおかしい。無表情のほうが、シュールである。

『ア・ハード・デイズ・ナイト』では、ポールのお祖父さんが迫り上がりで出て来てしまうというのが二回あった。さすがにリチャード・レスターであって、こちらにもある。アルプスの湖でカーリングをしていると、氷が割れて穴から海水パンツをはいた男が顔を出し「ドーヴァーはどこ？」と訊ねる。これは有名なドーヴァー海峡横断のスイマーだろう。もう一度は最後のところで、バハマの海岸で警察とカイリ教集団が暴れているところに、海から泳いで来る。ナンセンスで、おかしいったらありゃしない。

このスイマーはマルカム・エヴァンスといって、リヴァプール時代からのビートルズのロード・マネージャーである。アルプスでは、死ぬかと思ったと言っている。映画『レット・イット・ビー』では、冒頭で楽器を運んでいる。『マジカル・ミステリー・ツアー』にも、映っていた。

パブの地下の虎のシーンのベートーヴェンを始めとして、クラシックの名曲がやたらと出て来るのもおかしい。インド料理店の場面にあったシタールにジョージが興味を持ったというのは、よく知られている。この映画に出演しているエリナー・ブロンとジョンが特別な関係になって、「ノルウェーの森」になったという説もある。とも

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かく、『ヘルプ!』は何度見ても面白い。

前作『ビートルズ・フォー・セール』のレコーディングは満足のいく時間が用意されず、ジャケット写真も不機嫌になってしまった。今回はそれも考慮されて、スタジオに入る前の準備の時間もあったらしい。まず、二月に五日間スタジオに入っている。これは映画に使用される曲で、まだタイトルは決まっていなかったので「ヘルプ!」は別にして、「涙の乗車券」のシングルのB面の「イエス・イット・イズ」も含めて、七曲録音されている。

あとは、撮影が終わってから、四月から六月までに、五日間行なっている。レコードのB面の七曲と、「ヘルプ!」とそのシングルのB面の「アイム・ダウン」と、「バッド・ボーイ」の、十曲である。興味深いのは、「アクト・ナチュラリー」、「ディジー・ミス・リジー」、「バッド・ボーイ」と、カヴァーが三曲あることだ。収録するオリジナル曲がなかったというわけではないはずだ。

先行シングルの「涙の乗車券」はイギリスでは一九六五年四月九日にリリースされて、初登場の四月十七日から五週間第一位になっている。アメリカでは四月十九日に発売されて、五月二十二日に第一位になっている。「ヘルプ!」はイギリスでは七月

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

二十二日の発表で、初登場の七月三十一日から四週間第一位になっている。アメリカでは七月十九日発売で、九月四日から三週間第一位になっている（アメリカでは「イエスタデイ」が九月十三日にシングル・カットされて、十月九日から四週間第一位になっている）。

LP『ヘルプ!』はイギリスでは八月六日に発表されて、初登場の八月十四日から九週間第一位になっている。十月十六日に第二位になったのだけど、翌週からまた六週間第一位になっている。アメリカでは『ア・ハード・デイズ・ナイト』のように、ビートルズの曲七曲とオーケストラ曲六曲という構成で発売された（しかし、今作はユナイテッド・アーティストではなくて、キャピトルだったから、またB面曲にシングルB面曲などを合わせて、レコードの水増しを考えたのだろう）。八月十三日に発売されて、九月十一日から九週間第一位になっている。

「ヘルプ!」はこのタイトルに決定した次の日がレコーディングだったそうで、ジョンが一日で作ったといわれている。「アイム・ア・ルーザー」から続く私ロックだから、おそらくある程度までは作ってあったのだろう。こういうシリアスな曲を見事なまでのポップ・ソングにしてしまうのが、ビートルズの凄いところである。ライヴで

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は「アイ・フィール・ファイン」とともに、ジョンが必ず歌詞を間違える曲でもある。

「イエスタデイ」のメロディーは、朝起きたらポールの頭の中にあったという。すぐにピアノで弾いてみたら、完璧に出来上がっている。きっとこれはどこかで聴いた曲なのだろうと思って、会う人全員に訊いてみたのだけど誰も知らない。一年経って、夢の中で作った曲だと分かったので、レコーディングしたそうだ。もちろん、弦楽四重奏を使うという、まったく新しい試みである。「蜜の味」や「アンド・アイ・ラヴ・ハー」からのポールの美しいバラッドの追究は、ついに「イエスタデイ」まできたのである。

「涙の乗車券」は「アイ・フィール・ファイン」とともに、ギター・リフを前面に押し出しているブリティッシュ・ロックらしい名曲である。フレーズごとにジョンが語頭や語尾を変えているのが、たまらなくかっこいい。ヴァースのブレイクも、リンゴは変えている。そういえば、このアルバムのパーカッションは、どれも決まっている。

「イエスタデイ」のクラシックの導入と同じように、「悲しみはぶっとばせ」と「夢の人」はアコースティック楽器でのフォークの導入である。変化は明らかになってきた。ジョージの第二作「アイ・ニード・ユー」も、名曲である。すでに、『オール・シングス・マスト・パス』の雰囲気が、漂っている。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

このセッションで「ディジー・ミス・リジー」、「バッド・ボーイ」、「アクト・ナチュラリー」をレコーディングしたのは何故なのだろうか。たとえば、『ア・ハード・デイズ・ナイト』では、二枚のシングル「キャント・バイ・ミー・ラヴ」と「ア・ハード・デイズ・ナイト」のB面である、「ユー・キャント・ドゥー・ザット」と「今日の誓い」も収録している。

このアルバムでも、シングル「涙の乗車券」と「ヘルプ!」のB面の、「イエス・イット・イズ」と「アイム・ダウン」を収録すれば、全曲オリジナルになったのである。そうしなかったということは、どうしても録音して収録したかったということになり、もうこういうカヴァーはしなくなるだろうという、予感があったのかも知れない。

『ウィズ・ザ・ビートルズ』の「イット・ウォント・ビー・ロング」、『ア・ハード・デイズ・ナイト』の同名曲、『ビートルズ・フォー・セール』の「ノー・リプライ」、そして「ヘルプ!」と、オープニング曲は必ずイントロなしというのは、ここで終わる。また、『プリーズ・プリーズ・ミー』から必ずあったジョンのハーモニカも、このアルバムでは聴くことが出来ない。

ビートルズは大きく変わり始めたのである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

6
ラバー・ソウル
RUBBER SOUL

1965年12月3日

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

6

ラバー・ソウル
RUBBER SOUL

1965年12月3日

① ドライヴ・マイ・カー　Drive My Car
② ノルウェーの森　Norwegian Wood (This Bird Has Flown)
③ ユー・ウォント・シー・ミー　You Won't See Me
④ ひとりぼっちのあいつ　Nowhere Man
⑤ 嘘つき女　Think For Yourself
⑥ 愛のことば　The Word
⑦ ミッシェル　Michelle
⑧ 消えた恋　What Goes On
⑨ ガール　Girl
⑩ 君はいずこへ　I'm Looking Through You
⑪ イン・マイ・ライフ　In My Life
⑫ ウェイト　Wait
⑬ 恋をするなら　If I Needed Someone
⑭ 浮気娘　Run For Your Life

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

二〇〇三年はブルース誕生百周年だったという。また、二〇〇四年はロックンロール誕生五〇周年だったともいう。それで、いろいろな動きがあって、歴史を振り返ることも行なわれた。それは大切なことだろう。しかし、ちょっと腑におちないこともある。つまり、ブルース誕生百周年とロックンロール誕生五〇周年の、根拠は何なのかということだ。一九〇二年には、世界のどこにもブルースはなかったのだろうか。一九五三年には、ロックンロールのロの字もなかったのだろうか。

まあ、だいたいこのあたりということなのだろう。それにしても、一九〇三年とか一九五四年というのは、中途半端である。いっそのこと、二〇〇〇年にブルース誕生百周年ロックンロール誕生五〇周年にしてしまえばいいのに。分かりやすいし、文句を言う人もいないだろう。

それにしても、百年五十年というのが、どれだけの重さを持つのか、ちょっと理解

し難い。そこで、歴史年表を見てみよう。ブルースが生まれたという一九〇三年には、なんとライト兄弟が初めて飛行機を飛ばしている。こうなると、本当に歴史上の出来事という感じがしてくる。当然日本は明治時代で、翌年日露戦争が始まっている。そういう頃に、ブルースが生まれたのだ。これは、もう本当に歴史の世界である。

では、ロックンロールが生まれた一九五四年はというと……。というところで、思考が止まってしまった。というのは、僕が生まれたのは、一九五一年だからである。ということは、僕が生まれたときには、まだロックンロールはなかったということになる。これには意表をつかれた。そうだったのか。そんなに新しいのか、ロックンロールは。そんなに古いのか、僕は。

そういうことのひとつとして、アメリカの「ローリング・ストーン」誌が、二〇〇三年に"THE 500 GREATEST ALBUMS OF ALL TIME"という特集をやった。つまり、ロックンロールの五十年の歴史の中で、名作を決定したのである。第一位はビートルズの『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』だった。第二位はビーチ・ボーイズの『ペット・サウンズ』だった。第三位はビートルズの『リヴォルヴァー』だった。第四位はボブ・ディランの『追憶のハイウェイ61』だ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

った。そして、第五位はビートルズの『ラバー・ソウル』だったのだ。ちなみに、ビートルズは、第十位が『ザ・ビートルズ（ホワイト・アルバム）』で、第十四位が『アビイ・ロード』ということになっている。

この順番が正しいかそうではないかということは、どうでもいい。あくまでも、一般的に考えてということだろう。僕だったら、当然異なった順番になっている。だから、どうでもいい。これが意味しているのは、『ラバー・ソウル』以後のビートルズのほとんどのレコードは、ロックンロールの五十年の歴史の中で、名作に認定されているということである。レコード・デビュー三年目で、歴史上の名作を作ったのである、ビートルズは。

スタジオでのレコーディングの時間が充分に取れないことは、ビートルズの大きな不満のひとつだったのだろうと思われる。たった三年で、もうずいぶんと遠くまで来てしまっているのだから。『プリーズ・プリーズ・ミー』の一日、『ウィズ・ザ・ビートルズ』の四日、『ア・ハード・デイズ・ナイト』、『ビートルズ・フォー・セール』の八日は、もう考えられない。『ヘルプ！』の十日でも、まだ少ない。『ラバー・ソウル』のレコーディングは、約二十日間だったという。まとまった時間

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が必要なために、スタジオを誰も使っていない深夜から早朝まで使うという方法も取り始めたそうだ。また、しっかりとしたソングライティングの時間も、必要だ。そのために、レコーディングの前の十日間は、他の仕事をしないということにもなったようだ。

そのことを、ポールが語っている。昼頃にポールがジョンの家に行くと、寝惚け顔でジョンが起きてきて、食事をしたりお茶を飲んだりしながら、どちらかが作りかけの曲をふたりで考える。すると、夕方までには必ず一曲完成したという。それで、ポールはロンドン中心地のクラブへ遊びに行ったそうだ。

これで、十曲。「ヘルプ！」や「イエスタデイ」のようにひとりで作った曲もあっただろうし、ジョージの曲もある。LP十四曲とシングル二曲は、これで出来上がったのである。半世紀経っても世界中で聴き続けられている、ロックンロール史上第五位の名作が、作曲に十日間録音に二十日間で完成しているというのは、奇蹟といってもいいのではないだろうか。

この年も、映画を撮影し、サウンドトラック・レコードを録音し、ワールド・ツアーを行ない、アメリカ・ツアーを行なった。十月から十一月まで『ラバー・ソウル』

のレコーディングをした後には、イギリス・ツアーも行なっている。
『ラバー・ソウル』はイギリスでは一九六五年十二月三日に発表されて、ヒット・チャートでは初登場の十二月十一日から十三週間第一位になっている。アメリカではオリジナル収録曲の内十曲と『ヘルプ!』の「夢の人」と「イッツ・オンリー・ラヴ」の全十二曲で十二月六日に発売されて、一九六六年一月八日から六週間第一位になっている。

シングルの「恋を抱きしめよう/デイ・トリッパー」はイギリスでは十二月三日に発表されて、十二月十八日から四週間第一位になっている。アメリカでは十二月六日に発売されて、一九六六年一月八日から三週間第一位になっている。アメリカでは「ひとりぼっちのあいつ」もシングル・カットされて、一九六六年二月二十一日の発売で三月二十六日の第三位が最高位だった。一九六四年のように滅茶苦茶ではないけれど、確実にビッグ・ヒットになっている。

なお、日本での『ラバー・ソウル』の発売は一九六六年三月十五日で、イギリスやアメリカとは三か月も差があった。「恋を抱きしめよう」の発売は一九六六年一月十五日だったし、「ひとりぼっちのあいつ」の発売は四月十五日だった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まず、ジャケット写真である。撮影したフィルムをチェックしていたときに、ずれたこの感じが面白いということでこうなったという。普通ならば間のびしたようになるのだけど、ビートルズのオーラがそうはさせていない。ジャケットには『ラバー・ソウル』とタイトルは記されてあるけれど、どこにもビートルズと書かれてはいない。写真を見れば、分かるだろうということだろう。

『ウィズ・ザ・ビートルズ』、『ビートルズ・フォー・セール』、そして『ラバー・ソウル』と、その年の後半に発表されるLPのジャケット写真は、みんな四人の顔が大きく写っているのだけど、見れば一目瞭然だろう。三枚を並べてみれば、どれだけ変わったのかがよく分かる。

『ラバー・ソウル』は全曲愛の歌ということで、初めてのコンセプト・アルバムといわれている。そういうことだったら、『ア・ハード・デイズ・ナイト』だって、そうだったということになる。『ア・ハード・デイズ・ナイト』に続く二枚目の全曲オリジナルで、なおかつ時間もあってじっくりと作ったらこうなったということだろう。

ただし、ビートルズはもう少し時間が欲しかったようだ。

まず感じるのは、ジョンとポールのふたりが実力を充分に発揮し始めたということ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

だろう。全十四曲中、ジョンのソロが六曲、ポールのソロが四曲、ジョンとポールが一曲、ジョージが二曲、リンゴが一曲となっている。曲に優劣がない。いや、四人が実力を発揮し始めたといったほうが、正しいのかも知れない。

ともかく、ポールのベースが圧倒的である。ブラック・ミュージックを基本としたから、まるでリード・ベースといいたくなるような曲もある。それに合わすかのように、リンゴのドラムスも、歯切れが良くなっている。パーカッションも、どれも素晴らしい効果を出している。ジョンのカッティングも、気持ちいい。短いけれど、ジョージのソロもかっこいい。

「ドライヴ・マイ・カー」、「ユー・ウォント・シー・ミー」、「ミッシェル」、「君はいずこへ」での、自作曲のポールのベースは、自由奔放というか、やりたい放題である。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」や「イエスタデイ」のように美しいメロディーを作るというのも、「ミッシェル」でクリアーしている。

ジョンの「ノルウェーの森」では、映画『ヘルプ！』で興味を持ったジョージが半年でシタールを弾いている。ビートルズの曲でカヴァーされた回数が一番多かったのは「イエスタデイ」だったのだけど、今では「ノルウェーの森」がそうなっているという。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ひとりぼっちのあいつ」は、ジョンとポールとジョージのコーラスがここまできたのかと感動を覚える。しかし、これはただの三声のコーラスとは思えない。『イエロー・サブマリン・ソングトラック』のリミックス・ヴァージョンを聴くと、ジョンが二声や三声はありそうだ。複雑なんてもんじゃない。基本的にジョンの心の引きこもりのような曲ではあるけれど、ビートルズ得意のダブル・ミーニングが生かされている。つまり、“NOWHERE MAN”はどこにもいない男なのだけど、ひとつずらすと“NOW HERE MAN”になって、いまここにいる男になるのである。

「イン・マイ・ライフ」も名曲として、認められている。若い頃の思い出が、重要なテーマになっている。しかし、おかしくはないだろうか。こういう曲は六十代七十代のそれなりの年齢になってからのものなのではないだろうか。このとき、ジョンは二十五歳である。充分に、若いはずである。レコード・デビューして三年で、ジョンはここまで来てしまったのだろうか。それに誰も気がつかなかったのである。

「ウェイト」はヴァースをジョンが歌いミドルをポールが歌うという、面白いものになっている。同時期にレコーディングした「デイ・トリッパー」も、十六小節の内前半の八小節がポールで後半の八小節がジョンになっている。こういうふうに作ると、本当にかっこいい。ともかく、かっこいいんだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

全体的にアコースティックの印象が強くて、ジャケットからも落ちついた秋のイメージがする。しかし、ジョンの精神は別のところに行っちゃってるし、ポールはやりたい放題だし、よく聴けばジョージのトーンはエキセントリックだし、リンゴも前に進んでいる。ここから、ビートルズは名作を作り続けていくのである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まだビートルズではなかった

ビートルズのレコード・デビューは一九六二年十月五日だから、当然それ以前のレコードはないはずだ。しかし、演奏活動はしていたのだから、その音源が残っていてもおかしくはない。一九九五年十一月に発売された『アンソロジー 1』には、そういう演奏が何曲か収録されていたのだけど、実はそれらの中には、レコードになっていたものもあった。そこには正規盤もあったし、ちょっと首をひねるものもあったけれど、ある程度のファンなら知っている、三枚を挙げてみる。

トニー・シェリダン・セッション

ロックンロール・シンガーであるトニー・シェリダンのバック・バンドとして、ビ

ートルズは一九六一年六月にハンブルクでレコーディングしている。演奏しているのは、「アイ・ボニー」、「ザ・セインツ」、「ホワイ」、「クライ・フォー・ア・シャドウ」、「エイント・シー・スウィート」、「イフ・ユー・ラヴ・ミー・ベイビー」、「スウィート・ジョージア・ブラウン」、「ノーバディーズ・チャイルド」の八曲。

このレコードは、ドイツ国内でのみ一九六二年六月に発売されている。しかし、一九六四年にビートルズがスーパースターになったために、ビートルズの名前のほうを大きくして、世界中で発売され始めた。アメリカでは一九六四年二月、イギリスでは一九六四年六月、日本では一九六四年八月に発売されている。メンバーは、ジョン、ポール、ジョージ、ピート・ベスト。

当時、トニー・シェリダンのバック・バンドは、誰であってもビート・ブラザーズと呼ばれていて、当然、ビートルズもビート・ブラザーズといわれて、どのビート・ブラザーズがビートルズなのだか分からなくなってしまった。その後の調査で、前記の八曲がビートルズの演奏だということが判明する。

その分からなくなっているときに、レコード会社は明らかにビートルズの演奏ではないものもビートルズと思わせるような態度をとっていた。そのためか、アルバム・タイトルも何度も変えて、『ザ・ビートルズ・ファースト』、『ザ・ヤング・ビートル

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ズ』、『イン・ザ・ビギニング』、『ザ・ビートルズ　一九六一』、『ビートルズ・オールディーズ』、『ジ・アーリー・イヤーズ』など、嫌になるほどある。

ともかく、これは正規にレコーディングしたもので、今でもユニヴァーサル盤でCDが手に入れられる。何年か前に僕もCDショップで見つけて、久しぶりに聴いた。現在のタイトルは『ザ・ビートルズ・ウィズ・トニー・シェリダン／トニー・シェリダン・アンド・ザ・ビート・ブラザーズ』という、やはり微妙なものだ。余計なものも入っているのだけど、前記の八曲は収録してあるので良しとしている。

このアルバムで不思議なのは、基本的にトニー・シェリダンのレコードなのに、何故かジョンがリード・ヴォーカルの「エイント・シー・スウィート」が入っていたり、ジョンとジョージが作曲したインストルメンタルの「クライ・フォー・ア・シャドウ」が入っていることだ。もうひとつ不思議なのは、もうビートルズが演奏している八曲が明らかになっているのだから、その八曲だけで一枚にすればなんの問題もないというのに、そうしないことだ。

一番有名なのは、やはりちょっとはヒットした「マイ・ボニー」で、バック・コーラスでポールがやたらと大きな声を出しているのが、おかしい。

正規レコーディングなので、音質もまともである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

デッカ・オーディション・テープ

一九六二年一月に、ビートルズがデッカ・レコードのオーディションを受けたときの、演奏テープである。この演奏を聴いたデッカの担当者は古いと言って、不合格にした。次に、ブライアン・エプスタインにこのテープを聴かされたジョージ・マーティンは、面白いと言って合格にした。一年後、ビートルズがブレイクすると、そのデッカの担当者はビートルズを不合格にした男として、業界中の笑い者になった。

当然、そのデッカの担当者は、ビートルズのようなバンドと契約しなければと、焦りまくっていたのだけど、良いバンドは見つからない。そんなとき、なんとジョージと逢ってしまった。もちろん事情を知っているジョージは「ちょっと良いバンドがいるんだけど、一度見に行ったら?」と、彼に言ったという。そのバンドを見に行ったデッカの担当者は、すぐに契約した。そのバンドの名前は、ローリング・ストーンズ。めでたし、めでたし。

ストーンズに関しては、マネージャーでプロデューサーのアンドリュー・ルーグ・オールダムも同じである。もともと彼はビートルズのマネージャーであるブライア

ン・エプスタインの下で働いていて、ビートルズがスーパースターになったために、マネージャーやプロデューサーも有名になったのを見て、自分もそれを目差したのだ。そして、アンドリューにストーンズの存在を教えたのも、ビートルズだった。ストーンズがアンドリューとマネージメント契約をしたのが、一九六三年四月。デッカとレコーディング契約をしたのが、五月。デビュー・シングル「カム・オン」が発売されたのが、六月。あっぱれあっぱれ。しかし、ここまでくると、何故ジョージはストーンズのマネージャーにならなかったのか、不思議になってくる。

メンバーは、ジョン、ポール、ジョージ、そしてピート・ベスト。七〇年代にすでにブートレッグはあったのだけど、正規盤はイギリスとアメリカでは一九八二年九月に発売されている（日本では、同年十月）。

とりあえず、レコーディング・スタジオでの録音だから、音はまあ聴ける。CDになっているかどうかは、不明。

ライヴ・アット・ザ・スタークラブ

一九六二年十月に、ハンブルクのスタークラブで録音されたビートルズのライヴ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

メンバーは、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴ。

一九七七年五月に、EMIが『ザ・ビートルズ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』を発売したときに、どさくさにまぎれて発売された。観客席での録音なので、音は悪い。ただただ、ビート・バンドである。しかし、ちょうどパンクが出てきたときだったので、それほどの違和感はなかった。この頃のビートルズは、パンクそのものだろう。やはり、ジョンである。

ずいぶん前に、CDショップでアメリカ盤のこのアルバムのCDを見たことがあった。レーベルがアメリカのソニーだったのが、不思議だった。

どうせひどい音だろうと思って買わなかったのだけど、ときどき買っておけば良かったと思うこともある。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

7 リヴォルヴァー
REVOLVER

1966年8月5日

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

7

リヴォルヴァー
REVOLVER

1966年8月5日

① タックスマン　Taxman
② エリナー・リグビー　Eleanor Rigby
③ アイム・オンリー・スリーピング　I'm Only Sleeping
④ ラヴ・ユー・トゥー　Love You To
⑤ ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア
Here, There And Everywhere
⑥ イエロー・サブマリン　Yellow Submarine
⑦ シー・セッド・シー・セッド　She Said She Said
⑧ グッド・デイ・サンシャイン　Good Day Sunshine
⑨ アンド・ユア・バード・キャン・シング
And Your Bird Can Sing
⑩ フォー・ノー・ワン　For No One
⑪ ドクター・ロバート　Doctor Robert
⑫ アイ・ウォント・トゥー・テル・ユー
I Want To Tell You
⑬ ゴット・トゥー・ゲット・ユー・イントゥー・マイ・ライフ
Got To Get You Into My Life
⑭ トゥモロー・ネヴァー・ノウズ　Tomorrow Never Knows

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

六〇年代にリアル・タイムでビートルズを聴いていた人間は、当時の日本で彼等がどれぐらいの人気があったのかと訊ねられると困ってしまう。もちろん、人気はあった。

たとえば、ビートルズの日本でのシングル・レコードの発売点数である。当時は各国が勝手にシングルを発売してもかまわなかったので、とんでもないことになっている。一九六四年は十三枚で、一九六五年は十四枚である。イギリスでは、一九六四年は「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、「ア・ハード・デイズ・ナイト」、「アイ・フィール・ファイン」で、一九六五年は「涙の乗車券」、「ヘルプ!」、「恋を抱きしめよう」で、一年に三枚と決められている。

それを考えると、とてつもない点数というしかない。『ア・ハード・デイズ・ナイト』に関していうと、「キャント・バイ・ミー・ラヴ／ユー・キャント・ドゥー・ザ

ット」、「ア・ハード・デイズ・ナイト／今日の誓い」、「恋する二人／ぼくが泣く」、「アンド・アイ・ラヴ・ハー／恋におちたら」、「すてきなダンス／テル・ミー・ホワイ」と、五枚十曲になる。全十三曲のLPの内、十曲がシングル発売されているのだ。シングルになっていないのは、「エニイ・タイム・アット・オール」、「家に帰れば」、「アイル・ビー・バック」の三曲だけで、どれも名曲であって、逆にどうしてシングルにならなかったのか知りたくなってしまう。

　そのリリース方法も、今見ると唖然としてしまう。一九六四年四月には「シー・ラヴズ・ユー」、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、「フロム・ミー・トゥー・ユー」の三枚が発売されて、五月には「ツイスト・アンド・シャウト」、「ドゥー・ユー・ウォント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」、「オール・マイ・ラヴィング」の三枚が発売されている。一九六五年になっても、二月には「ロング・トール・サリー」、「ノー・リプライ」、「ロックンロール・ミュージック」が発売されている。つまり、ともかくリリースさえすれば、それなりの枚数のセールスにはなるということだろう。

　そして、日本で一番のセールスがあったシングルは「ロックンロール・ミュージック」で、八十五万枚だったといわれている。しかし、実をいうとレコード会社にも正確な記録は残っていなくて、まあだいたいこれぐらいのものだったという程度に思っ

てもらいたい。どちらにしろ、この八十五万人というのが、日本のビートルズ・ファンの上限だろう。今は累積していて数字は増えると思うのだけど、少なくとも六〇年代の日本ではミリオン・セラーはなかったのだから。

また、僕達は団塊の世代の直後だったので、いつも学校の一クラスには五十人ぐらいいた。それで、ビートルズ・ファンは、一クラスに二〜三人といったところだったと思う。中学校は十クラスあったので、一学年は五百人ということになる。その中で、ビートルズ・ファンは二十人から三十人になる。学校全体では千五百人で、六十人から九十人ということになる。これでは、胸を張って人気があったとは言い難い。

二〇〇〇年に『ザ・ビートルズ　1』が発売されて、日本でも三百万枚というスーパー・ヒットになった。そのとき、テレビのニュース・ショーなどで、新橋のSLの前の酔っぱらいに訊くと、みんなビートルズは青春だったと言っていた。はっきり言おう、それは嘘だ。ビートルズは僕達の青春であって、お前達の青春ではない。音がうるさいとか、髪が長いとか、大学に行っていないとか、わけの分からないことを言っていたじゃないか。僕達は千五百人の中の六十人だったけれど、お前達は千四百四十人のほうにいたじゃないか。

だいたい、そんなにファンがたくさんいたら、何枚もミリオン・セラー・ヒットが

あったはずだ。なかったから、僕達は口ごもっているのである。

一九六六年から、ビートルズの活動は変わる。一九六四年一九六五年が疾風怒濤(しっぷうどとう)のようで、レコードを作るという第一の仕事がないがしろになっていたことの反省だろう。まず、映画の撮影が中止になった。コンサート・ツアーもワールド・ツアーとアメリカ・ツアーは行なったけれど、イギリス・ツアーはやってはいない。

そして、以後、LPは一年に一枚ということになった。一九六六年の『オールディーズ』はベスト・アルバムだし、一九六七年の『マジカル・ミステリー・ツアー』はイギリスではEP二枚組だったし、一九六九年の『イエロー・サブマリン』の新曲は四曲で没になっていたものだった。

そういうわけだから、一九六六年は三か月の休暇から始まる。スタジオに戻って来たビートルズは、『リヴォルヴァー』のレコーディングに三か月の時間をかける。とはいっても、九十日間ずっとやっていたわけではないようで、だいたい半分ぐらいだったらしい。それでも、それだけの時間が必要な一枚に出来上がっている。

何回も書いているようだけど、まずレコード・ジャケットが素晴らしい。ハンブルク時代からの友人であるクラウス・フォアマンの作品で、明らかにアートである。ジ

ヨン、ポール、ジョージ、リンゴの顔の絵に、たくさんの彼等の写真がキャンヴァスを埋めている。これまでに、こんなジャケットはなかったはずだ。同時代のボブ・ディラン、ビーチ・ボーイズ、ローリング・ストーンズとは、明らかに違う。もちろん、ザ・ビートルズの名前はない。

発表された六〇年代や七〇年代には、『リヴォルヴァー』の評価はそれほど高くはなかった。『ラバー・ソウル』から『サージェント・ペッパーズ』までの、移行期の試行錯誤の一枚というふうに見なされていた。しかし、八〇年代九〇年代と時間が経つ間に、この実験性に興味を持たれるようになった。その結果、現在では、"THE 500 GREATEST ALBUMS OF ALL TIME" の第三位ということになっている。

そういえば、当時の音楽雑誌のレコード評に、これはもうロックではないというようなことが書かれてあった。たしか、木崎義二さんだったと思う。木崎さんはアコースティック・ギター時代のティラノザウルス・レックスを評価した方である。ビートルズが別の次元に向かっていることが、分かったのだろう。

オープニングは、ジョージの「タックスマン」である。税金が高いなどということをテーマにして、ウィルソンやヒースなどの政治家の名前まで出している。のちにラ

ーガ・ロックといわれる、インドふうのフレーズのギターがかっこいい。また、数年後にフェリックス・パパラルディーがマウンテンでやる、ギターとベースが同じフレーズを弾くというのも、すでにここでやっている。

「ラヴ・ユー・トゥー」ではシタールを弾いていて、「ノルウェーの森」よりもはっきりとロックになっている。外部から、タブラ奏者も招いている。“MAKE LOVE ALL DAYS LONG”などという歌詞も、当たり前のように歌っている。ジョージも過激になってきている。「アイ・ウォント・トゥー・テル・ユー」も含めて、一枚に三曲も収録されるようにもなっている。もはや、ソングライターとしては、ジョンとポールと肩を並べている。

ポールも凄いことになっている。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」や「イエスタデイ」の流れとしては、弦楽八重奏を使った「エリナー・リグビー」なのだろうけれど、それだけではなくて、万人に愛される「ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア」もある。それよりも興味深いのは、名曲「フォー・ノー・ワン」で、ビートルズで演奏しているのはポールとリンゴだけで、フレンチ・ホルンの奏者を呼んでいる。つまり、美しいメロディーが、三曲も収録されているのである。

もちろん、そういう曲だけではなくて、「グッド・デイ・サンシャイン」もあれば、

「ゴット・トゥー・ゲット・ユー・イントゥー・マイ・ライフ」もある。ホーン・プレイヤーを使った後者は、後半のシャウトが嬉しい。リンゴが歌う「イエロー・サブマリン」は、ビートルズのユーモアのセンスが結集したものになっている。もちろんこのときはまだ映画化の予定などなかったのに、SEがいっぱいですでにサウンドトラックのようになっている。

このアルバムでジョンがそれまでのビートルズ・スタイルで作った曲といったら、「アンド・ユア・バード・キャン・シング」だけだろう(佐藤泰志の『きみの鳥はうたえる』は、ここからきている)。「アイム・オンリー・スリーピング」、「シー・セッド・シー・セッド」、「ドクター・ロバート」は、明らかに心が引きこもっている。それでも、「アイム・オンリー・スリーピング」では、逆回転ギターを使っている。これはテープを逆回転させて、フレーズを逆に弾いて、元に戻すというもので、サイケデリックな効果が得られる。

そして、「トゥモロー・ネヴァー・ノウズ」である。『チベットの死者の書』からインスパイアされた曲で、山の上で僧侶が読経しているようなものにしたかったという。ポールが作ったというテープ・ループが繰り返されて、ジョージの逆回転ギターとシタールがヒステリックに響き渡り、独創的なリンゴのドラムスがリズムを作りあげ、

ハモンド・オルガンで使うレズリーのスピーカーからジョンの声が流れる。現代音楽というか、アヴァンギャルドである。

つまり、後のハード・ロック、クラシック、インド音楽、ノヴェルティー・ソング、リズム・アンド・ブルース、アヴァンギャルドが混在しているのである。こんなレコードは、今迄になかったはずである。こういうレコードがいつものようにビッグ・ヒットになっているということに、びっくりしてしまう。というよりも……。

もう白状してしまおう。ファンは気づいていなかったのだ。ビートルズの新作は、いつも前作とは違っていた。ファンは、ただただ、それを受け入れていただけだったのだ。『リヴォルヴァー』がこういう実験的なレコードだと気がついたのは、何年もあとだった。中学三年生だったから……という言い訳はやめよう。

『リヴォルヴァー』はイギリスでは一九六六年八月五日に発表されて、初登場の八月十三日から九週間第一位になっている。アメリカでは三曲少ない十一曲で八月八日に発売されて、九月十日から六週間第一位になっている。

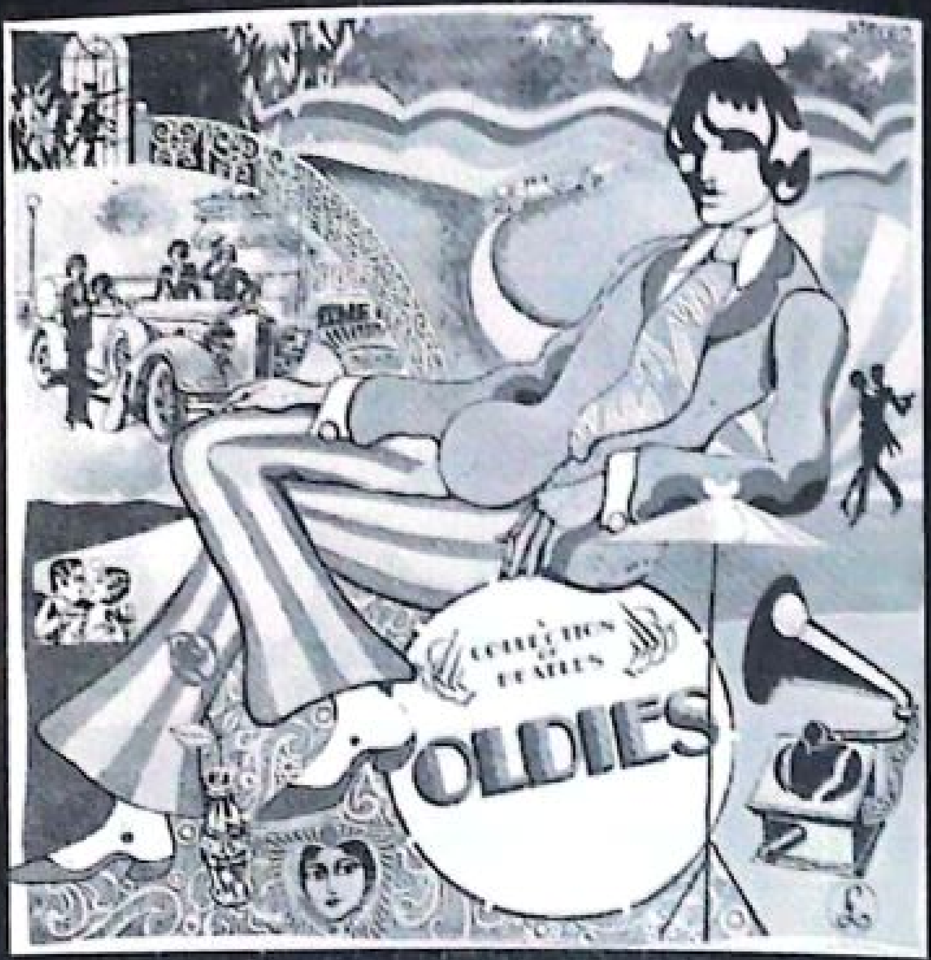
同時にレコーディングされた「ペイパーバック・ライター」はイギリスでは六月十日に発表されて、初登場の六月十八日から四週間第一位になっている。「イエロー・

サブマリン」は八月五日発表で、八月二十日から三週間第一位になっている。アメリカでは「ペイパーバック・ライター」が五月三十日発売で、六月二十五日から二週間第一位。「イエロー・サブマリン」が八月八日発売で、九月十七日の第二位が最高位。

CamScannerでスキャン

8
オールディーズ
A COLLECTION OF BEATLES OLDIES

1966年12月9日



CamScannerでスキャン

8

オールディーズ
A COLLECTION OF BEATLES OLDIES

1966年12月9日

① シー・ラヴズ・ユー　She Loves You
② フロム・ミー・トゥー・ユー　From Me To You
③ 恋を抱きしめよう　We Can Work It Out
④ ヘルプ！　Help!
⑤ ミッシェル　Michelle
⑥ イエスタデイ　Yesterday
⑦ アイ・フィール・ファイン　I Feel Fine
⑧ イエロー・サブマリン　Yellow Submarine
⑨ キャント・バイ・ミー・ラヴ　Can't Buy Me Love
⑩ バッド・ボーイ　Bad Boy
⑪ デイ・トリッパー　Day Tripper
⑫ ア・ハード・デイズ・ナイト　A Hard Day's Night
⑬ 涙の乗車券　Ticket To Ride
⑭ ペイパーバック・ライター　Paperback Writer
⑮ エリナー・リグビー　Eleanor Rigby
⑯ 抱きしめたい　I Want To Hold Your Hand

CamScannerでスキャン

正式タイトル『ア・コレクション・オブ・ビートルズ・オールディーズ』はビートルズが活動していた時期に発表された、唯一のベスト・アルバムである。しかし、CDにはなっていない。現在、ベスト・アルバムといえば、『ザ・ビートルズ 1』があるし、『ザ・ビートルズ／1962〜1966』と『ザ・ビートルズ／1967〜1970』の通称赤盤青盤もある。それで、赤盤時代の十六曲のベスト・アルバムなど、CDを発売してもしょうがないということなのだろう。それでも、リアル・タイムのファンには、愛着のある一枚である。やはり、あの時代の匂いがするからなのだろう。

ベスト盤であるからか、いつもの十四曲よりも二曲多い全十六曲収録である。ビッグ・ヒット曲が十五曲と、それまでイギリスでは未発表だった「バッド・ボーイ」のカヴァーである。イギリスでは、『オールディーズ』は一九六六年十二月九日に発売

された。アメリカはこういうものにはすぐに飛びつきそうなのに、何故か発売しなかった。現在だったらベスト盤はヒットしそうだけど、当時のイギリスは厳しい。全十六曲の内すでに持っている曲が十五曲もあるのなら、買わない。十二月十七日に第七位で初登場して、最高位は十二月三十一日と一月七日の第四位だった。一月の終わりには、名前はなくなっている。

ジャケットはイラストで、名前はデヴィッド・クリスチャンと記してある。真ん中に大きく描かれている人物のファッションは、当時のロンドンの最先端だったのだろうけれど、ビートルズのようでいて、やはりビートルズの感覚ではない。おそらく、四人とも、このジャケットには興味はなかったのだろう。その前の『リヴォルヴァー』とその後の『サージェント・ペッパーズ』のジャケットを思えば、そう見るしかない。

面白いのは裏ジャケットのほうで、イギリス盤と日本盤では左右が逆になっている。つまり、フィルムの表と裏である。それでは、オリジナルのイギリス盤が正しくて、日本盤が間違っているのかといったら、そうではない。この写真は明らかに数か月前の日本のホテルでの一枚で、ポールが法被のようなものを着ている。そして、胸に描かれている「寿」の字が、イギリス盤は逆になっている。日本のレコード会社はそれ

に気がついて、止しくしたのだろう。

毎年、ビートルズは八月と十二月にLPを発表していた。夏休みとクリスマス休暇であって、イギリスではその時期にレコードが売れていたのだろうか。その他の仕事は、春までに映画を一作撮影する。そして、イギリス・ツアーと、アメリカ・ツアーと、ワールド・ツアーである。今、考えると、とんでもない仕事量である。それに終止符を打ったのが、一九六六年だった。

もう、映画は作らない。『ア・ハード・デイズ・ナイト』も『ヘルプ！』も素晴らしい映画だったのだけど、やはり音楽を中心にしたかったのだろう。コンサート活動も、中止する。八月に発表した『リヴォルヴァー』は、もはやギターとベースとドラムスだけではステージでは演奏出来なくなっている。

ライヴ活動に限れば、これは言い訳である。おそらく、身の危険を感じることが多くなったからだろう。七月の日本の次に行ったフィリピンでは、イメルダ・マルコスの招待を断わって、無礼だとののしられて、暴徒に襲われた。八月のアメリカでは、ジョンのキリストについての発言を問題にされて、ビートルズ排斥運動を起こされて、脅迫状も送られてきた。

ツアーは厳しく、観客は演奏を聴かない。七月の日本公演は、観客が静かに演奏を聴いたので、ビートルズは自分達のライヴ演奏を、数年ぶりに聴くことが出来た。もちろん、日本のような観客は稀である。なおかつ、身の危険を感じるのならば、もうやらないほうがいいだろう。

そこで、しばらく休暇をとって、次のレコーディングに向かう。そのために、十二月のアルバムは作らないで、ベスト・アルバムにしておく。だから、ジャケットにも、関知しない。おそらく、選曲にも関わらなかったのではないだろうか。

イギリスの全オリジナル・シングルから、最初期の「ラヴ・ミー・ドゥー」と「プリーズ・プリーズ・ミー」を外して、人気のある「イエスタデイ」と「ミッシェル」を入れるというのは、当たり前過ぎてビートルズのセンスではない。ジョージの曲が入っていないというのも、少しおかしい。

さて、『オールディーズ』には、一九六三年の「フロム・ミー・トゥー・ユー」や「シー・ラヴズ・ユー」から、一九六六年の「ペイパーバック・ライター」や「エリナー・リグビー」まで収録されていて、注意深く聴けば、ビートルズの変化や進歩がわかるようになっている。この変化や進歩こそ、ロックの基本である。そのビートル

ズの基本は、ミックスチュアーである。
いうまでもなく、ロックンロールは黒人のブルースと白人のカントリーがミックスされたものといわれている。ミックスチュアーこそ、ロックなのである。最初のロックンロールのスーパースターであるエルヴィス・プレスリーは、黒人のように歌う白人だったから若者の支持を得たともいわれている。これもミックスチュアーだろう。ということは、アメリカでのビートルズのブレイクは、黒人のように歌うイギリス人だということにならないだろうか。
ブラック・ミュージックは、黒人だけにしか愛されなかった。あの人種差別の激しかった時代のアメリカ白人には、下品で忌み嫌うべきものだった。しかし、イギリスでは、そうではなかった。ビートルズはもちろん、ローリング・ストーンズもアニマルズも、キンクスもフーもヤードバーズも、みんなブラック・ミュージックが大好きだったのだ。
そして、一九六四年の、ビートルズを先頭にしての、黒人のように歌うイギリスのバンドの、アメリカへの侵攻である。彼等が若者に支持されたことによって、アメリカでブラック・ミュージックが定着したといってもかまわないだろう。実際に、スモーキー・ロビンソンは、そのことについてビートルズに感謝していると発言している。
ビートルズがカヴァーしたチャック・ベリーやリトル・リチャードも、そう感じてい

ると思う。

なんといっても、一九六四年に初めてビートルズがアメリカに行ったときに、彼等が一番の楽しみにしていたのは、イギリスでは手に入らないブラック・ミュージックのレコードを、買い集めることだったという。ところが、レコード店の白人の店員は何も知らなくて、びっくりしたそうだ。

それどころか、ビートルズがカヴァーした「ツイスト・アンド・シャウト」や「ロール・オーヴァー・ベートーヴェン」も、彼等のオリジナルだと思っている人がいて、唖然としたらしい。つまり、ブラック・ミュージックの本場のアメリカに来たら、白人は誰も何も知らなかったのである。

ブラック・ミュージックこそ、ビートルズが最初にミックスチュアーしたものである。そして、カントリーであり、フォークである。クラシックであり、ジャズである。あとには、ヴォードヴィルであり、インド音楽であり、アヴァンギャルドである。

ちなみに、『ザ・ビートルズ／ザ・ファースト・U・S・ヴィジット』というDVDには、イギリスへ帰国するビートルズが、大事そうにレコードを抱えている映像がある。

この当時のベスト・アルバムは、当然今のようにオール・タイム・ベストではない。たとえば、ローリング・ストーンズは、一九六六年の最初のベスト・アルバム『ビッグ・ヒッツ』には、一九六三年のデビュー曲「カム・オン」から一九六六年の「ハヴ・ユー・シーン・ユア・マザー、ベイビー、スタンディング・イン・ザ・シャドウ」までが収録されている。

次の一九六九年の『スルー・ザ・パスト・ダークリー』は、前作以後の一九六七年の「レッツ・スペンド・ザ・ナイト・トゥゲザー」から一九六九年の「ホンキー・トンク・ウィーメン」まで入っている。後の、『メイド・イン・ザ・シェイド』も、『サッキング・イン・ザ・セヴンティーズ』も、同じことである。

つまり、この時代のベスト・アルバムは、四〜五年分の代表曲をまとめていくものだったのだ。だから、すべてのアルバムまで買えないバンドでも、四〜五年毎にベスト・アルバムを手に入れれば、それなりに納得出来たのである。そういう意味では、『オールディーズ』も役目を果たしている。しかし、その後がない。

「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」から「レット・イット・ビー」までのベスト・アルバムがない。ビートルズ自身はもう解散だから、どうでも良かったのだろう。EMIも『オールディーズ』がヒットしなかったから、選曲さえしなかった

のだろう。というわけで、『オールディーズ』は中途半端なレコードになってしまった。おそらく、ＣＤにはされないだろう。このレコードに愛着があるというのは、とても他人事と思えないからかも知れない。

活動期のビートルズが日本でどれぐらいの人気があったのかを思うときに、ひとつ参考にしたほうがいいことがある。日本の人口である。現在約一億二七〇〇万人といわれている人口は、当然あの頃はもっと少なかったはずだ。ちょっと調べてみたら、なかなか興味深かった。なお、この数字は資料によって異なる。だいたいのところだと、思ってもらいたい。

まず、僕が生まれる直前の一九五〇年で、日本の人口は八〇〇〇万人である。現在の約六〇パーセントになる。一九六〇年は九〇〇〇万人で、約七〇パーセントになる。一九七〇年が一億人で、約八〇パーセントということになる。十年毎に、一〇〇〇万人増えている。となると、六〇年代は約九五〇〇万人ととらえてもいいだろう。そういえば、あの頃「9500万人のポピュラー・リクエスト」というラジオ番組があっ

たな。とても落ちついた洋楽番組だった。

現在の人口の約七五パーセントの九五〇〇万人で、「ロックンロール・ミュージック」が八十五万枚のヒットというのは、どうだ凄いだろうと、大きな顔をしてもいいのだろうか。ちょっと、微妙である。たしかイギリスの人口は日本の半分ぐらいだったと思うから、そこでの一〇〇万枚とはやはり違う。どうなのだろうか。当時の日本でのビートルズのLPは、十五万枚から二十万枚だったという。イギリスの一〇〇万枚と比べると、どうなんだろう。

ついでに記しておくと、西暦〇年の弥生時代には、日本の人口は六〇万人である。平安時代の九〇〇年で、十倍の六〇〇万人になる。関ヶ原の戦いのあった一六〇〇年で、その二倍の一二〇〇万人になる。つまり、四〇〇年前には、日本人は現在の一〇パーセントもいなかったことになる。

ビートルズの日本でのコンサートも、今考えると微妙である。初めての日本武道館でのコンサートで、一回一万人で五回五万人ということになっていた。実はこの数字は間違っていて、最近では僕が主張しているものが認知され始めている。まあ、とりあえず五万人ということにしよう。つまり、東京ドーム一回分である。現在、東京ド

ームでコンサートを行なうバンドなど、いっぱいいる。スリー・デイズなどというのさえある。十五万人である。

となると、一回一万人で五回五万人などというのは、吹き飛んでしまいそうだ。しかし、これが初めての日本武道館である。ということは、それまではどれだけビッグなミュージシァンでも、渋谷公会堂や新宿厚生年金会館クラスだったのだ。それぐらいのものだったのだ。つまり、ミュージック・ビジネスのマーケットの大きさが、まったく異なっているのだ。だから、八十五万枚でも、日本中の人がビートルズを知っていたのだろうか。

よく知られているように、ビートルズのコンサートのチケットは申し込み制で、往復葉書を出して当選の葉書が戻ってきたら、それを持って買いにいくというものだった。この応募総数は、二十三万枚といわれている。LPを買うぐらいのファンがみんな応募したとも考えられるのだけど、ひとりで何枚も出した人もいるはずだ。僕はA席B席C席を五回分、十五枚出したと思う。

となると、多くても十万人で、少なければ五万人ぐらいになるのではないだろうか。十五枚出した僕は、一枚も当たらなかった。しかし、数少ない学校でのビートルズ・

ファンのひとりが、二枚当たったからといって、当選葉書を一枚くれたのだ。一九六六年の中学三年生にとっては、二一〇〇円というのは大きい。ビートルズといっても、何度も見にはいけない。ラッキーだった。

このビートルズ来日に対して、反対運動が起こった。これは徹頭徹尾わけの分からないものだった。今、考えると、構図ははっきりと見える。すべては無知なのだ。

まず、ビートルズの人気と並行して、ベンチャーズのエレキ・バンドのブームが起こる。ベンチャーズのレコードは、ビートルズの数倍のセールスがあったという。だから、「ダイアモンド・ヘッド」や「十番街の殺人」や「キャラヴァン」などは、軒並みミリオン・セラーだったのだろう。アマチュアのエレキ・バンドが、たくさん結成される。アマチュア・エレキ・バンドのコンテストの「勝ち抜きエレキ合戦」のようなテレビ番組が、いくつも放送されていた。日本で最初のバンド・ブームは、エレキ・ギターのインストルメンタル・グループだったのだ。

若者にブームが起こると、教育委員会やPTAが何故か押さえ込もうとする。今でも覚えているのは、テレビの討論番組で、そういう人が「エレキは子供を不良にするんです!」と叫んでいる図で、この人は自分の言っていることが分かっているのだろ

うかと思った。エレキテルか。平賀源内か。

本来ならばその元凶であるベンチャーズを攻撃するところなのだけど、それほどベンチャーズが迷惑をかけられていたという印象はない。ベンチャーズはすでに立派な大人で、ステージ・マナーもしっかりしたギター・プレイヤーだった。これでは文句をつけにくかったのかも知れない。いや、あいつらはエレキ・ギターというだけで、ベンチャーズを知らなかったのかも知れない。

では、エレキ・ギターを使っている悪そうな奴等はということになって、知名度があったのは髪の毛が長いビートルズということになったのだろう。その不良の親玉と勝手に決めたビートルズの来日が決まったので、反対運動が起こったのである。おそらくあの頃の教育委員会やPTAが決めたビートルズのイメージは、朝起きたらウイスキーを呷って、顔を洗ったらシャブを打って、男を見たら殴りかかって、女を見たらレイプする……というようなものだったのではないだろうか。ロック・バンドだということさえ、忘れていたのではないだろうか。

ビートルズ来日が決定してから、あっちこっちの中学校や高校ではビートルズを見に行かないようにという指示が出たという。行ったら退学にするなどというのも、あったそうだ。これは各地の警察や教育委員会の要請だったようだ。はっきり言おう、

こいつらはみんな大馬鹿野郎だ。あれから四十六年の時間が経っているから、もうくたばった奴も多いだろう。生きていたら、頭を丸めて謝れ。

来日が決定した五月から始まったビートルズ排斥運動は、七月一日に終わった。つまり、この日、ビートルズのコンサートがテレビで放送されたからだ。ジョンはウィスキーを呷らずに、歌っていた。ポールはシャブも打たずに、歌っていた。ジョージは殴りかかりもせずに、ギターを弾いていた。リンゴはレイプもせずに、ドラムスを叩いていた。

当たり前ではあるけれど、ビートルズは十一曲三十分演奏しただけである。これを見て、反対運動をしていた大馬鹿野郎共はどう思ったのだろうか。まず、反対運動をしていながら、ビートルズのことをまったく知らなかったことに気がついただろう。そして、どうして自分はあんなにヒステリックになって反対していたのだろうと思っただろう。

あれから四十六年、日本武道館でビートルズを見たという同世代の人とけっこう逢っているのだけど、退学になったという人はひとりもいない。そりゃあ、そうだろう。あのテレビを見たら、どうしてこれを見たら退学なのか教師自身が分からないに決まっている。だから、そんなことはなかったことにしたのだろう。

ビートルズ来日ではっきりしたのは、学校や警察は敵だということだった。日本中の中学生や高校生に、そう思わせた罪は重い。

そして、もうひとつ。観客が騒ぎ過ぎてビートルズの演奏が聴こえなかったと、新聞や雑誌は書いた。これが不思議で、しょうがなかった。僕にはしっかりと聴こえた。リンゴが「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」で音を外しっ放しだったのも、「恋をするなら」のコーラスがハモらなかったのも聴こえた。ビートルズを見に行って聴こえなかったという人には、逢ったことがない。

だいたい、観客が静かだったので、ビートルズは久しぶりに自分達のライヴ演奏を聴くことが出来て、これではまずいと思ったという。翌日の二日目は機材も変えてリハーサルも行なって、ステージに臨んでいる。どうも、この頃のビートルズは、どうせ音は聴こえないのだからと、リハーサルもしていなかったようだ。だから、一日目に撮ったビデオは没にして、二日目の昼の部をテレビ放送したのである。

そういえば、あるコンサートのブートレッグで、「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」の演奏が始まっているのに、リンゴが歌わないというのがあった。で、コーラスのところにくると、ジョンとポールがちゃんと歌う。おそらく、リンゴのヴォーカ

ル・マイクがオフになっていたのに、誰も気づかなかったのだろう。ステージの上の四人も、観客も。

前述のように、僕は日劇のウエスタン・カーニヴァルに行っていた。こちらはうるさかった。まったく聴こえないこともあった。つまり、ビートルズのファンは、アメリカン・ポップスのカヴァーをやっている日本のアイドルのファンとは違っていたのだ。どうして、新聞や雑誌は聴こえないなどと書いたのだろうか。それは僕がこういう仕事を始めてから、分かった。

たとえば、フジ・ロック・フェスティヴァルは、今では夏の風物詩のようにさえいわれている。しかし、始めた頃は、ひどいあつかいだった。たしかに、第一回目は台風に直撃されて、中止になっている。それ以後は何の事故もないのに、異様な報道が続いていた。

たしか、第三回目の二日目の朝だった。新聞に一日目のことが書いてあって、救護場に七人が運ばれたとあった。僕は会場にいたので主催者のところに行って、いったいどうしたのと訊いた。答は裸足で歩いて切り傷を作ってバンド・エイドを貰いにきた人が四人と、生理が始まって生理用品を貰いにきた人が三人ということだった。もちろん、みんな自分で歩いてきている。悪意を感じた。

ビートルズが聴こえなかったというのも、無知である。日本武道館にビートルズを取材にきた記者は、社会部だったのだ。音楽や舞台の担当者だったら、ちゃんと聴こえていただろう。しかし、ロック・コンサートなど行ったこともなくて、ビートルズも聴いたことがない連中である。社会部には〝事件待ち〟という言葉があるということも、知った。自分が無知であるのに、オラァ聴こえなかっただと言っているのである。こういう無知な大馬鹿野郎共に、ビートルズとビートルズ・ファンは冒瀆されたのである。生きてるんなら、頭を丸めろ。

こういうことを書いていったら切りがないので、最後にしよう。日本での記者会見で、「次に、何を望むか?」という質問に、ジョンは「平和」と答えポールは「原爆を禁止したい」と答えたら、記者団は笑ったという。ジョンは「ヴェトナム戦争は間違っている」とも発言したのだけど、反応は同じだったそうだ。数年後、ジョンが平和運動を始めたときに、笑った大馬鹿野郎共はいったいどう思ったのだろうか。

一九六六年七月一日、僕は日本武道館にいた。中学三年生で、中間テストだったたから、学校は午前中で終わって、家で昼食をとってから出かけた。一週間前に下見に行ったから、迷わずに武道館に行くことが出来た。大森から京浜東北線で、有楽町へ行

く。ちょっと歩いて西銀座デパートの前から都電で、九段下へ行く。まだ、地下鉄はなかった。

日本武道館の客席はいっぱいだった。しかし、アリーナに客席はないのだから、一万人は入場できないだろう。そのことに気がついたのは一九九五年で、一回に入場出来たのは五〇〇〇人ぐらいだろうと思った。その後、日本公演の原稿を依頼された雑誌にそのことを書いたら、二十代と思われる女性編集者は、そういうことは聞いたことがないのでこの部分はカットしますとファックスを送ってきた。

このときは抗議をして、カットはされなかったのだけど、アリーナを除いた入場可能者数を武道館に問い合わせてもらいたいと言ったのに、してはもらえなかった。その後、同じようなことが、何回かあった。自分で問い合わせてみようかと思ったけれど、やはり出版社名がはっきりしたほうがいいだろう。そして、二〇〇六年に来日四〇周年のテレビ番組に出演したとき、打ち合わせでディレクターが一回五〇〇〇人ですからねと言ってくれて、やけに嬉しかった。

客席もいっぱいになったのだけど、通路もいっぱいになった。灰色の夏服を着た警官が、びっしりと座ったのである。後方には、黒い学生服を着た大学応援団ふうが、ガードマン然として、ずらりと並んでいる。こいつらの役目は、「ボール！」と言っ

て、立ち上がった女の子を、力ずくで座らせることだった。ビートルズのコンサートなのだから、女の子が立とうと飛び上がろうと、僕には異存はない。

ウエスタン・カーニヴァルでしょっちゅう見ている人達の前座が、一時間ぐらいあった。そして、ついにビートルズがステージに登場して来た。『ア・ハード・デイズ・ナイト』や『ヘルプ！』で何百回も見たあの立ち位置で、ジョンとポールとジョージとリンゴがいる。それが、すべてだった。三年間毎日レコードを聴いていたビートルズが、実際に演奏をしている。今となっては、それは神を見たということになる。

この日本公演のビートルズの演奏は、とても素晴らしいとはいえないものだった。そんなことは、どうでもいいのだ。このあと、ビートルズはフィリピンで独裁者に小突きまわされ、アメリカで狂信者に生命を脅かされて、コンサート活動を中止した。最後のところで、僕達はビートルズが演奏しているのを、見ることが出来たのである。

あのとき中学三年生というのは、あの場所での最年少であると、やはり来日四〇周年の特集記事を作った、新聞記者に言われたことがあった。あれから四十六年である。二十歳の人は六十六歳で、三十歳の人は七十六歳で、四十歳の人は八十六歳で……。客席にはティーンエイジャーと同じぐらいに、そういう大人がいたのだ。かなりの人が亡くなっているだろう。二万五千人の内、どれだけ生きているのだろうか。もう半

分もいないような気がする。僕は日本武道館でビートルズを見た、生き残りのひとりである。

ともかく、ビートルズの日本武道館のコンサートには、敵が多かった。警察、教育委員会、PTA、大学応援団、新聞、雑誌……。しかし、僕達は負けなかったのだ。ジョンとポールとジョージとリンゴが演奏しているのを見たのだから。一九六六年七月一日日本武道館、十五歳の僕はビートルズを見たのである。それが僕の人生を決定し、僕は今ここにいるのである。

CamScannerでスキャン

9

サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド

SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND

1967年6月1日

CamScannerでスキャン

9
サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド
SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND

1967年6月1日

① サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド
Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band

② ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ
With A Little Help From My Friends

③ ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ
Lucy In The Sky With Diamonds

④ ゲッティング・ベター　Getting Better

⑤ フィクシング・ア・ホール　Fixing A Hole

⑥ シーズ・リーヴィング・ホーム　She's Leaving Home

⑦ ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト
Being For The Benefit Of Mr. Kite !

⑧ ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー　Within You Without You

⑨ ホエン・アイム・シックスティー・フォー　When I'm Sixty-Four

⑩ ラヴリー・リタ　Lovely Rita

⑪ グッド・モーニング・グッド・モーニング
Good Morning Good Morning

⑫ サージェント・ペッパーズ・
ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド（リプリーズ）
Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)

⑬ ア・デイ・イン・ザ・ライフ　A Day In The Life

CamScannerでスキャン

最近、〝ビートルズ中期〟という言葉を、ときどき目にすることがあるのだけど、これが分からない。僕の感覚では、ビートルズは前期と後期だけである。レコード・デビューをした一九六二年から、コンサート活動を行なっていた一九六六年までが、前期。そして、レコーディングが中心になった一九六七年から、解散した一九七〇年までが、後期。ちょうど、赤盤と青盤である。すっきりする。もっと細かくしたいのならば、一九六二年も含めて一九六三年と一九六四年が、第一期。一九六五年と一九六六年が、第二期。一九六七年と一九六八年が、第三期。一九六九年と一九七〇年が、第四期。これでいいと思う。ずっと、こういう感覚だった。

どうして中期などという概念が出来たのだろうかと考えてみたら、『アンソロジー』が三部作だったからなのかも知れないと気がついた。たしかに、『アンソロジー1』はデビュー前の一九五八年から一九六四年まで。『2』は一九六五年から一九六

八年二月まで。『3』は一九六八年五月から一九七〇年まで。こういうことだろう。しかし、これはデビュー前の曲も入っているし、単純に収録時間で分けただけのような気もする。だいたい、「イエス・イット・イズ」や「アイム・ダウン」と、「レディー・マドンナ」や「アクロス・ザ・ユニヴァース」を、いっしょにしてしまうのは、おかしいのではないだろうか。中期なんて、必要なのだろうか。

そういうわけで、一九六七年から後期ということになる。コンサート活動を中止して、レコーディングが中心になる。このライヴ活動の中止を、ミック・ジャガーが批判したという。それに対して、ジョンは「お前達がランチ・ボックスを持って学校に行っていた頃から、俺達は一晩中ドイツで演奏していたんだ」と言ったそうだ。ビートルズが初めてハンブルクへ行ったのは一九六〇年八月だから、ミックは十六歳になったばかりである。まあ、ジョンの言いたいことは分かる。

一九六六年八月二十九日、サン・フランシスコのキャンドルスティック・パークのコンサートを終えたビートルズは、この年、もうやることがなくなった。もう一枚LPを作らなくてもいいし、イギリス・ツアーをしなくてもいい。ジョンは『ア・ハード・デイズ・ナイト』や『ヘルプ!』の監督のリチャード・レスターの映画『僕の戦

争』に出演することにした。ポールは映画『ふたりだけの窓』のテーマ・ソングを作った。ジョージはインドへ行って、ラヴィ・シャンカールにシタールを習った。リンゴは休暇をとった。

約三か月そういうふうに過ごした後、ビートルズの四人は十一月の終わりにアビイ・ロード・スタジオに集まった。そして、"THE 500 GREATEST ALBUMS OF ALL TIME" 第一位の『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』が完成したのは、一九六七年四月の終わりだった。六か月の時間を費やしたのである。ロックのレコードとしては、空前のことだった。

その間に、マスコミはビートルズ解散説を流した。本来なら一九六六年にもう一枚LPが出るはずなのに、ベスト・アルバムの『オールディーズ』であるし、一年に三枚のシングルも、二枚しか出ていない。しかし、ビートルズは連日スタジオに通っていることが分かる。すると、今度はビートルズは才能が枯渇したと書きたてた。ビートルズはスタジオでそういう新聞を読んで、笑ったという。ポールは今に見てろよと言ったそうで、かっこいいっちゃありゃしない。

事情をまったく知らないアメリカ・キャピトルの某重役は、早くレコードを作れとビートルズに催促するつもりでアビイ・ロード・スタジオに行ったらしい。そして、

そんなことはとてもじゃないけれど言えないようになっていたことに、初めて気がついたようだ。それまではレコード会社のほうが立場は上で、バンドにレコードを作らせてやるレコードを出させてやるという態度だった。しかし、レコードがすべてベスト・セラーになるビートルズに、EMIは命令など出せなくなっていた。

ビートルズはEMIに、とてつもない額の利益を与えてくれていた。特に、一九六七年は最初の五年間の契約が終わる年だった。もしも再契約のサインが貰えなかったら、大変なことになってしまう。レコーディングはビートルズが納得するまで、続けられることになっていた。

マネージャーのブライアン・エプスタインも、黙って見ている。一度アレンジに口を挟んだら、ジョンに「あんたは金の勘定をしていればいいんだ」と辛辣に言われたことがあったからだ。かつてはビートルズを仕切っていたプロデューサーのジョージ・マーティンも、EMIを辞めてフリーになっていて彼等に雇われるという立場だった。ビートルズに指示を出すというよりも、彼等のイメージを具現化することのほうが重要になっていた。

その某重役がスタジオに来たときに、ビートルズがレコーディングしていたのは「シーズ・リーヴィング・ホーム」だったという。「抱きしめたい」や「シー・ラヴ

ア・ユー」から三年ちょっとで、ビートルズはとんでもなく遠くまで来ていたのである。

ビートルズが架空のバンドになるというアイディアはポールのもので、正にポールが大活躍している一枚である。彼がただのおまけだと言っている切り絵のシートは、モダン・アートといってもいいだろう。注目したいのは、そこのサージェント・ペッパーの絵葉書とバッジである。この顔は、明らかにポール自身だろう。

四人が興味を持っている人を集めたというピーター・ブレイクの作ったジャケットも、大評判になった。この左上方には、レコード・デビュー以前のビートルズのメンバーだったスチュワート・サトクリフがいる。右前方で不気味なおばあさんのような人に抱かれているシャーリー・テンプルの服には、“WELCOME THE ROLLING STONES” と記されてある。面白いのは左下の福助で、おそらく前年日本で入手したものだろう。

当時は、初めてのコンセプト・アルバムといわれた。解散後のジョンは、それを否定した。そんなことは、どうでもいい。コンセプト・アルバムといったら、すでに

『ラバー・ソウル』があったのだから。ともかく、素晴らしい曲が素晴らしい演奏で、十三曲収録された一枚である。それも〝サマー・オブ・ラヴ〟といわれた、すべてが変わりつつあった一九六七年の夏の匂いを濃厚に漂わせながらだ。

オープニングはライヴふうで、ポールのタイトル曲が演奏される。これが直球のロックンロールであることが、嬉しい。ファースト・アルバムの「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」を思い浮かべる。ポールは「ゲッティング・ベター」、「フィクシング・ア・ホール」、「ホエン・アイム・シックスティー・フォー」、「ラヴリー・リタ」、タイトル曲のリプリーズ、「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」のミドルに、シングルの「ペニー・レーン」と、正にこのアルバムの主役である。「イエスタデイ」や「エリナー・リグビー」は、「シーズ・リーヴィング・ホーム」までできてしまっている。ベースはもちろんリード・ベースで、当時のレコードでこれだけベースが大きな音になっているものはなかっただろう。

ジョンはまだ心の引きこもり状態で、曲のテーマは身近なものばかりである。しかし、『リヴォルヴァー』と比べたら、その内容は素晴らしく深くなっている。「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」はサイケデリックで、彼の愛読書『不思議の国のアリス』を彷彿とさせる。「ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・

CamScannerでスキャン

オブ・ミスター・カイト」はサーカス音楽で、少年時代の記憶のひとかけらなのだろう。

「グッド・モーニング・グッド・モーニング」は、テレビのCMの影響だというのだけど、最終部のサウンド・コラージュが面白い。そして、「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」とシングルの「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」である。天才が引きこもると、こういう名曲を作るのだ。シュールリアリスティックで、ジョンは空中浮遊しているかのようだ。

ジョージの「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」は、彼のインド音楽の解釈の結論なのだろう。しかし、ギターを弾けば、すべてのフレーズがエキセントリックである。それにしても、リンゴのドラムスは凄いことになっている。日本刀で叩き斬っているようで、「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」などは殺気さえ感じた。

このアルバムはイギリスでは一九六七年六月一日に発表されて、初登場の六月三日から二十二週間第一位になっている。アメリカではビートルズのレコードでは初めてオリジナルどおりで（インナー・グルーヴはなかった）六月二日に発売されて、七月

一日から十五週間第一位になっている。しかし、それだけではなくて、ロング・セラーにもなった。トップ・ワン・ハンドレッドから消えたのは一九六九年二月八日だったから、八十四週間ヒット・チャートにいたことになる。

「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー／ペニー・レーン」はイギリスでは一九六七年二月十三日に発表されて、三月四日から三週間第一位になっている。アメリカでは二月十七日に発売されて、三月十八日に第一位になっている。

このアルバムが発表された直後から、ロック界ではその影響を受けた作品が多数作られて、一種の〝サージェント・ペッパーズ・シンドローム〟のようなブームが、何年も続いた。ローリング・ストーンズは『ゼア・サタニック・マジェスティーズ・リクエスト』を作り、エリック・バードンとアニマルズは『ザ・トゥエイン・シャル・ミー』を作り、キンクスは『ヴィレッジ・グリーン・プリザヴェイション・ソサエティー』を作り、フーは『トミー』を作り、ドアーズは『ストレンジ・デイズ』を作り……。

しかし、このレコードに一番振りまわされたのは、間違いなくブライアン・ウイルソンだろう。彼がリーダーのビーチ・ボーイズは、ビートルズと肩を並べられる唯一

のアメリカン・バンドだった。ところが、彼は『ラバー・ソウル』を聴いて、これ以上の作品を作ろうと決心した。その結果、一九六六年に『ペット・サウンズ』を作り上げて、ジョンやポールも熱心に聴いたという。

ブライアンはより素晴らしいものを考えて、『スマイル』のレコーディングを始めた。しかし、テーマが大き過ぎたためか、作業は進まなかった。そこへ、『サージェント・ペッパーズ』のレコーディングを終えたポールが遊びに来た。ブライアンが『スマイル』の話をすると、ポールは早く作り上げたほうがいいよと言って帰って行った。その半月後『サージェント・ペッパーズ』が発表されて、それを聴いたブライアンはこれ以上のものは作れないと感じて『スマイル』の制作を中止した。以後、ブライアンはドラッグの世界に入りこんでしまい、人間をやめてしまった。

ブライアンがカムバックしてきて『スマイル』を完成させたのは二〇〇四年で、三十七年後のことだった。

『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』がリリースされたときには、ここには一九六七年の音楽がすべてであるといわれた。今では、二十世紀の音楽がすべてであるといわれている。ロックンロール、サイケデリック、クラシック、

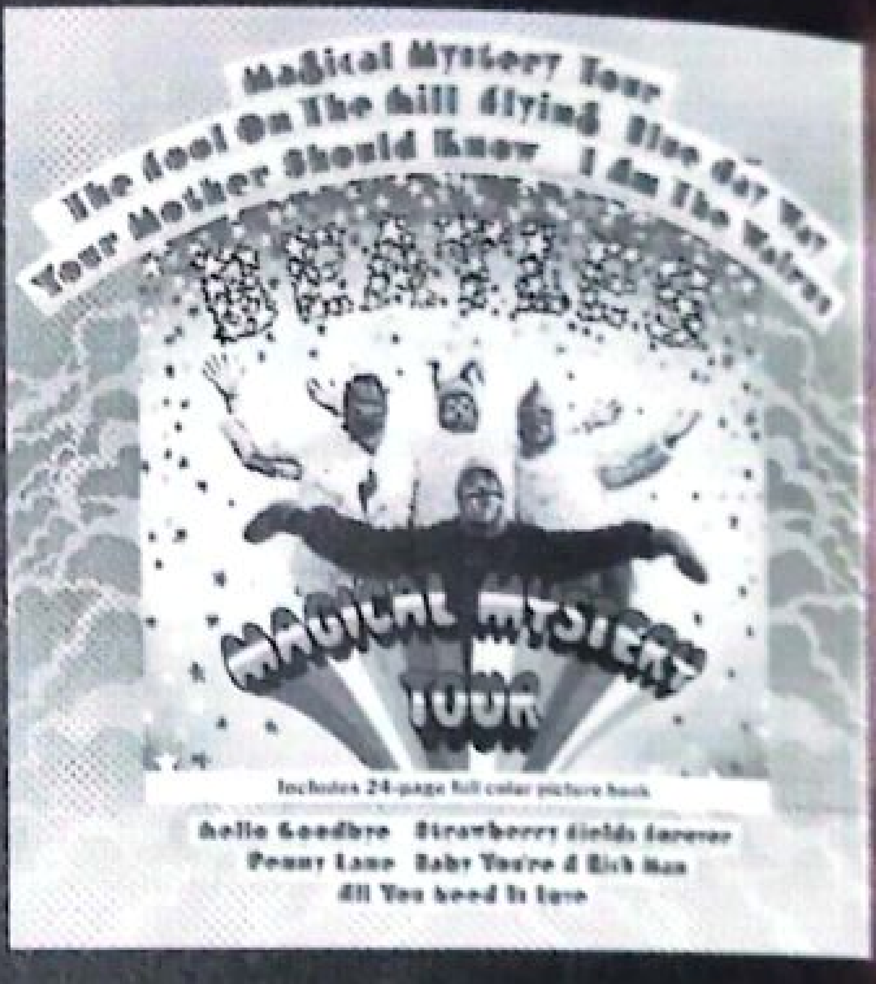
サーカス音楽、インド音楽、ヴォードヴィル、サウンド・コラージュ、アヴァンギャルド……。考えてみたら、『リヴィルヴァー』で実験したものを、より鮮やかに作品にしたというだけである。

10

マジカル・ミステリー・ツアー

MAGICAL MYSTERY TOUR

1967年11月27日



CamScannerでスキャン

10

マジカル・ミステリー・ツアー
MAGICAL MYSTERY TOUR

1967年11月27日

マジカル・ミステリー・ツアー　Magical Mystery Tour

ザ・フール・オン・ザ・ヒル　The Fool On The Hill

フライング　Flying

ブルー・ジェイ・ウェイ　Blue Jay Way

ユア・マザー・シュッド・ノウ　Your Mother Should Know

アイ・アム・ザ・ウォルラス　I Am The Walrus

ハロー・グッドバイ　Hello Goodbye

ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー
Strawberry Fields Forever

ペニー・レーン　Penny Lane

ベイビー・ユーアー・ア・リッチマン　Baby You're A Rich Man

愛こそはすべて　All You Need Is Love

『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』のレコーディングが終わって、まだ発表もされないうちに、ビートルズはスタジオに戻って、また仕事を始めている。四月二十五日からというから、『サージェント・ペッパーズ』完成から四日後である。これはポールが『マジカル・ミステリー・ツアー』のアイディアを思いついたからだという。『サージェント・ペッパーズ』にしろ、『マジカル・ミステリー・ツアー』にしろ、この頃のビートルズをリードしていたのはポールだということがよく分かる。

そこから十一月まで、断続的ではあるけれどずっとレコーディングが行なわれている。『マジカル・ミステリー・ツアー』の六曲、シングルの「愛こそはすべて」、「ベイビー・ユーアー・ア・リッチ・マン」、「ハロー・グッドバイ」、のちに『イエロー・サブマリン』に収録される「オール・トゥゲザー・ナウ」、「イッツ・オール・ト

ウー・マッチ」、「レット・イット・ビー」のB面になる「ユー・ノウ・マイ・ネーム」と、十二曲もレコーディングしている。

つまり、充分にLP一枚分になるだけの曲を作っているのである。六か月もかかった名作『サージェント・ペッパーズ』を完成させた直後でも、創作力はあふれていたのだろう。ひと休みするどころか、止まらなくなっていたのかも知れない。『マジカル・ミステリー・ツアー』のテレビ映画も、自分達で作ってしまった。それまでと違ったのは、コンサート・ツアーがなくなっただけだった。こういうふうにしたかったのか。

レコードにしろ映画にしろ、自分達の中から出てきたものだというのも大きいのかも知れない。マネージャーやレコード会社や映画会社やプロモーターに指示されるのではなくて、自発的に仕事をしたかったのだろう。

一九六七年十二月二十六日にイギリスでテレビ放映された『マジカル・ミステリー・ツアー』は、わけが分からないと不評だった。実は、この頃のイギリスのテレビはほとんどがモノクロで、サイケデリックなカラーの映像が理解されなかったという説もある。その後カラーが一般的になって、評価は上がったそうだ。僕はおそらく百

回くらいは見ていると思うのだけど、ちょっと難しい。今回もう一度見て感じたのは、分かるような分からないような……というものだった。しかし、六曲の演奏シーンは興味深く、つまり、ビートルズが歌っていればそれでいいのである。

このテレビ映画は、日本では一九六八年十月に放映された。ところが、これが分からないことになってしまった。映画は普通に放映されているのに、そこにかまやつひろしさんと星加ルミ子さんの対談が流されるというもので、同じシーンが何度も出てくるという不手際もあって、滅茶苦茶になってしまったのだ。たしか次の週にオリジナルのままで放映されたのだけど、ビートルズ・ファン以外はもう誰も見なかった。

その少し前に、日本武道館で上映会もあった。これはスポンサーが不二家で、チョコレートの箱かなんかを送って応募するというものだった。僕もやたらとチョコレートを食べて送って、当選した。二年ぶりの、武道館だった。当日は模擬試験の日だったけれど、ほんの一瞬も迷わなかった。翌日、学校で教師に殴られた。

どうして、ビートルズはこのようなテレビ映画を作ったのだろう。たぶんたいした理由はなくて、ただ作りたかっただけだろう。そういえば、コンサート・ツアーを中止した一九六六年後半から、ビートルズはシングル・レコードを発表する度にプロモーション・フィルムを作った。今でいうビデオ・クリップで、最初は「ペイパーバッ

CamScannerでスキャン

ク・ライター」と「レイン」だった。しかし、僕がこのクリップを見たのは、八〇年代になってからだったと思う。まったく、活用されていなかったのだ。

次の「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」と「ペニー・レーン」もリリース時には見ていないと思う。しかし、その撮影風景は音楽誌のグラビアで見て、びっくりしてしまった。ジョージ以外の三人の髪は短くなっていて、全員口髭をはやしていた。そして、ジョンはあの丸眼鏡をかけていて、僕も眼鏡をかけているから嬉しくも思い、ジョンは似合わないのではないかとも感じた。

一九六七年六月二十五日に、全世界同時中継のテレビ番組「アワー・ワールド」が放送された。おそらく、これは衛星生放送が出来るようになったからだろう。たとえば、一時から二時まではアメリカの作った番組で、二時から三時まではイギリスの作った番組で、三時から四時までは日本の作った番組で……というようなものだった。そのイギリスからの中継番組が、ビートルズの「愛こそはすべて」のレコーディング風景だったのである。

NHKのアナウンサーが「もうすぐ、イギリスからビートルズのレコーディングを放送します」というので、ずっと起きていて、それが始まったのは、たしか午前四時ぐらいだった。これは『アンソロジー』などでも見ることが出来て、床に座っている

たくさんの人の中にはローリング・ストーンズのミック・ジャガーとキース・リチャーズやポールの弟のマイケル・マクギアもいた。

その他にこの番組で覚えているのは、たしかイタリアの番組が映画『ロミオとジュリエット』の撮影風景で、オリヴィア・ハッセーが信じられないような美少女だったことだ。日本の番組は伝統芸能だったと思うのだけど、高校一年生男子にはよく分からなかった。

『マジカル・ミステリー・ツアー』は、イギリスでは三曲収録されたEPの二枚組として、一九六七年十二月八日に発表されて一九六八年一月十三日に第一位になっている。アメリカではA面がEP二枚分の六曲でB面がこの年に発表されたシングル曲五曲というLPで、一九六七年十一月二十七日に発売されて一九六八年一月六日から八週間第一位になった。

アメリカはいつものように勝手にLPを作っているようにもとれるけれど、とりあえず『サージェント・ペッパーズ』以外にこの年に発表したものを全曲集めたわけで、分かりやすくて、すっきりとしている。前述のように、アメリカも『サージェント・ペッパーズ』から、イギリス・オリジナルに近い形で、レコードをリリースするよう

になった。

ビートルズ側の無言の抗議があったからだ。一九六六年七月三十日に、アメリカでは『イエスタディ・アンド・トゥディイ』というレコードを発売している。いつものように、内容は『ヘルプ!』から二曲、『ラバー・ソウル』から四曲、『リヴォルヴァー』から三曲、そしてシングルの「恋を抱きしめよう」と「デイ・トリッパー」の二曲の、全十一曲である。オリジナルをばらばらにしてからの、寄せ集めである。

そのジャケットのために新しい写真を送ってくれというアメリカ・キャピトルからの要請に、ビートルズ・サイドが送ったのがあのブッチャー・カヴァーである。四人は白衣を着てにこにこしているのだけど、手に持っているのは血まみれのばらばらになった人形だった。無神経なキャピトルはその写真を使ってジャケットを作って、レコード店から苦情を受けた。そこで初めて気がついたキャピトルは、ブッチャー・カヴァーを回収して新しいジャケットを作った。それ以後、キャピトルはイギリス・オリジナルに添った形で、レコードを作るようになった。それが『サージェント・ペッパーズ』からだった。

「愛こそはすべて」はイギリスでは一九六七年七月七日の発表で、七月二十二日から三週間第一位だった。アメリカでは一九六七年七月十七日で、八月十九日に第一位に

なっている。「ハロー・グッドバイ」はイギリスでは一九六七年十一月二十四日の発表で、十二月九日から四週間第一位になっている。アメリカでは一九六七年十一月二十七日で、十二月三十日から三週間第一位になった。
「ハロー・グッドバイ」のビデオ・クリップはリリース時に見たような記憶があって、サージェント・ペッパーズの衣装を着たビートルズが、いつものあの立ち位置で演奏しているのが、とても嬉しかった。また、リンゴのドラム・セットがおもちゃみたいなものになっているのが、不思議だった。

まず、「マジカル・ミステリー・ツアー」は性急なポールのヴォーカルで、ロックンロール・スタイルである。タイトルも含めてこれはドラッグを意味しているそうで、ビートルズらしいダブル・ミーニングである。「シーズ・リーヴィング・ホーム」までいってしまったためか、美しいメロディーは違う方向にいっている。しかし、「ザ・フール・オン・ザ・ヒル」よりも、「ユア・マザー・シュッド・ノウ」のほうが、新しい試みだろう。初めて聴くのに、懐かしい曲である。後のメアリー・ホプキンの「悲しき天使」も、こういうものだった。
その他の曲は『サージェント・ペッパーズ』のあとで落ち着いているようにも聴こ

えるのだけど、ジョンの「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」と「アイ・アム・ザ・ウォルラス」は凄まじい。しつこいけれど、前者は心の引きこもりの極北で、リンゴのドラムスが圧倒的だ。右でも左でもいい、この曲を片チャンネルだけで聴くと、サイケデリックでアナーキーでシュールで、アヴァンギャルドでアシッドだ。その約八か月後が、後者であって、ついに引きこもりを脱して、ジョンが攻撃的になったのだ。サウンド・コラージュに乗って、ジョン・レノンの帰還である。ゴー、ジョニー、ゴー、ゴー！『不思議の国のアリス』である。このアリスこそ、ヨーコ・オノである。

ビートルズのマネージャーのブライアン・エプスタインには、三つのコンプレックスがあった。まず、ユダヤ人である。裕福なエプスタイン家の長男であるブライアンは、リヴァプールの名士のひとりでもあったのだけど、陰口を叩かれていることは、承知していた。次に、ゲイである。現在ならそんなことはどうということはなくて、カミング・アウトしたらそれでおしまいである。しかし、当時のイギリスでは、それは犯罪と見なされていたのだ。脅迫されて、金品を奪われてもいたという。そして、王立演劇アカデミーにまで通った、舞台俳優志望だった。親の持っていたレコード店

の目きになったのだから、それに挫折したのだろう。

それでも、ビートルズとマネージメント契約を結んでからは、すべてがうまくいった。なんといっても、世界一のロック・バンドのマネージャーであって、つまり世界一有名なマネージャーなのである。ところが、ビートルズがコンサート活動を中止して、ブライアンのビートルズの仕事は半減してしまった。一九六七年になるとうつ状態にもなって、ドラッグの量も多くなった。ビートルズが契約を破棄するのではないかという、強迫観念にも襲われた。リヴァプール時代からの仲間の部下にも、当たり散らすようになった。

一九六七年八月二十五日、ブライアン・エプスタインは三十三歳の若さで亡くなった。死因は睡眠薬の過剰摂取というものだった。ブライアンの死亡が発表されたとき、ビートルズはウェールズのバンゴアでマハリシ・マヘシ・ヨギの講義を聞いていた。これもブライアンには理解出来ないことだっただろう。

ビートルズを諫めることが出来る人は、ひとりもいなくなった。

ジョンとポールがいた

イギリスには四回行っている（と思う）のだけど、最初の二回はロンドンだけだった。これは仕事なのだからしょうがなくて、旧アップル・ビルやアビイ・ロードの世界一有名な横断歩道などを見に行っただけだった。三回目からはリヴァプールにも行けるようになって、これは嬉しかった。我々のような人間には、ロンドンよりもリヴァプールのほうがいい。懐かしい町に戻って来たような気がして、なんとなくほっとする。いうまでもなく、これは一九六四年以来何度も何十度もビートルズ・ストーリーを読んだり見たりしているからであって、一種の刷り込みである。

それとはちょっと違うけれど、植草甚一は書物によってニュー・ヨークの町の隅々まで知っていたという。初めてニュー・ヨークに行ったとき、町を歩いていて夫人に次のように言ったそうだ。この横の通りに入ると、五〇〇メートルも行かないうちに

ホールド・アップに遭う。しかし、十ドルも渡せば、それですむ。大人が笑ってとりあわないので、植草はむっとしてその通りに入って行った。すると、すぐにホールド・アップに遭って、十ドル渡したら、消えて行った。真っ青になっている大人に向かって、植草は得意げにほら見ろと言ったという。その日は、一日中植草は機嫌が良かったそうだ。

そこまで僕はリヴァプールの町を知っているわけではないのだけど、行ってみて分かったことがいくつもあった。たとえば、ブライアン・エプスタインは自分のレコード店で「マイ・ボニー」が売れるので、あまり行ったことのない地区のキャヴァーン・クラブにビートルズを見に行ったという物語があった。しかし、実際に行ってみたら、ブライアンの店とキャヴァーン・クラブとは、三〇〇メートルぐらいしか離れてはいなかった。キャヴァーン・クラブでビートルズがファンに騒がれていたら、レコード店主のブライアンは興味を持っていたはずだ。

また、ジョンの生まれ育った家は、セミ・デタッチという中流階級のものだった。ポールやジョージやリンゴは、ワーキング・クラスの長屋ふうの家だった。スチュアート・サトクリフの家は今はゲスト・ハウスになっているぐらいだから、大きい。ピート・ベストの家も屋内でクラブをやっていたのだから、大きい。ここで中流のジョ

ンを中心にして、ポールとジョージ対スチュとピートの反目があったと考えるのは下種の勘繰りだろう。しかし、スチュとピートは去って、ワーキング・クラスのリンゴが来たというのは、事実である。もちろん、ポールやジョージやリンゴには、音楽的な才能があったからなのだろう。だから、リヴァプールは面白い。

ジョン・レノンがとてつもなく特別な人物であるということに、異論はないだろう。自分のすべてをさらけだして、現在のロックの基本を作り上げた功労者である。同じように、ポール・マッカートニーがとんでもなく重要な人物であるということも、説明の必要はないだろう。類稀なメロディー・メイカーで、ロックンロールのエンターテイナーの第一人者である。

このふたりがチームを組んでいたというのは、今考えるとちょっと信じられないぐらいのことである。それが、レノン＝マッカートニーであって、その結果がビートルズである。右にジョンがガに股気味で立ってリッケンバッカーを弾き、左にポールが足を揃えて立ってヘフナーを弾く。ほぼ五十年間毎日見ている図ではあるけれど、それを見ると今でも僕は高揚する。

リヴァプールに行くと、いつも思う。ロックンロールだけではなくて、世界を変え

たあのふたりが、こんなイギリス北部の港町に同時期に生まれ育ったというのは、ミラクルなのではないだろうかと。ニュー・ヨークやロンドンやパリといった大都会ならばともかく、こういっては失礼だけどただの地方都市である。ビートルズがデビューしたとき、そのリヴァプール訛りがからかわれたそうで、キングス・イングリッシュを使うような人には、ズーズー弁のように聞こえたのかも知れない。

そんな町の自転車で十分ぐらいのところに、素晴らしい才能を持った少年がふたりいたのである。このふたりは学校が大嫌いで、ロックンロールが大好きだった。ふたりとも、母親を亡くして、いっしょにバンドを組んで、ビッグになろうとしていた。その結果、世界一になった。こんなストーリーで小説を書いたら、あまりにも真実味がないと滅茶苦茶にいわれるだろう。それが実際に起こったのだから、ミラクルと思うしかないだろう。

ジョンとポールがチームを組んだことが、どれだけ世界のためになったのかということは何度も何十度も考えてみるべきだろう。一九七〇年に別れてしまったけれど、あれだけの作品を残してくれたということには感謝しなければならない。もしもジョンとポールが組んでいなかったら、『ラバー・ソウル』も『リヴォルヴァー』も『サージェント・ペッパーズ』も『アビイ・ロード』もなかったことになる。世界はまっ

たく違うものになっていただろう。

そんな世界で、僕はここまで生きていただろうか。とっくに、死んでいると思う。

ビートルズが解散してからも、ジョンとポールは名作を作っている。しかし、最強のパートナーを失ったということは、まぎれもない事実である。ジョンがヨーコを、ポールがリンダを、音楽に引きこんだのには、そこらへんも関係があったのだろう。最強のパートナーと匹敵するのは、妻しかいなかったのだろうか。ジョンが暗殺されたとき、ヨーコはジョンの人生の中でもっとも重要だった三人に電話でそのことを伝えた。育ての親のミミ伯母さん、長男のジュリアン、そしてポールである。

興味深いのは、ジョンが暗殺された直後から、まるでそれを埋めるかのように、ポールは『タッグ・オブ・ウォー』や『パイプス・オブ・ピース』で、平和を歌い始めていることだ。さまざまなチャリティー・コンサートにも、出演している。また、スティーヴィー・ワンダー、マイケル・ジャクソン、エリック・スチュワート、エルヴィス・コステロなどと、共作もしている。そういうコラボレーションをやめたのは一九九〇年からで、つまりジョンの死から十年の時間がポールには必要だったということになる。

そういえば、ビートルズ解散後、ジョージはダーク・ホースでリンゴはリンゴ・オーで、自分のレーベルを作ったのに、ジョンとポールはまったくそういう行動はとらなかった。それだけ、ジョージとリンゴは、自由に作品を作りたかったのだろうか。それだけ、ジョンとポールは自由だったのだろうか。いや、アップルの苦い体験から、ジョンとポールはレーベルを維持する難しさを知っていたのだろう。

それと、解散後、ポールはウイングスというパーマネントなバンドを組んで、ジョンはプラスティック・オノ・バンドというメンバーが流動的なグループを作った。しかし、ジョージとリンゴには、そういう動きはなかった。ジョンとポールにはバンド幻想があって、ジョージとリンゴにはなかったのだろう。つまり、ジョンとポールはもうアップルはたくさんで、ジョージとリンゴはもうビートルズはたくさんだったのかも知れない。

最後に、ジョンとポールの女性の好みも面白い。ジェーン・アッシャーとの同棲を実質的な結婚とみると、ポールの結婚は一回目がイギリス人で二回目がリンダでアメリカ人だから外国人ということになる。ジョンもシンシアとヨーコだから、イギリス人と日本人という外国人である。実をいうと、ジョージもリンゴも同じことをしている。リンダは写真家でヨーコは前衛芸術家で、ふたりともアーティストである。そし

て、リンダもヨーコも、姉さん女房だった。

こんなことばかり考えているのは、いかがなものかと思わないわけでもないのだけど、同じようなビートルズ・ファンと酒を飲みながらこういう話をするのが、僕は一番楽しいのだからしょうがない。

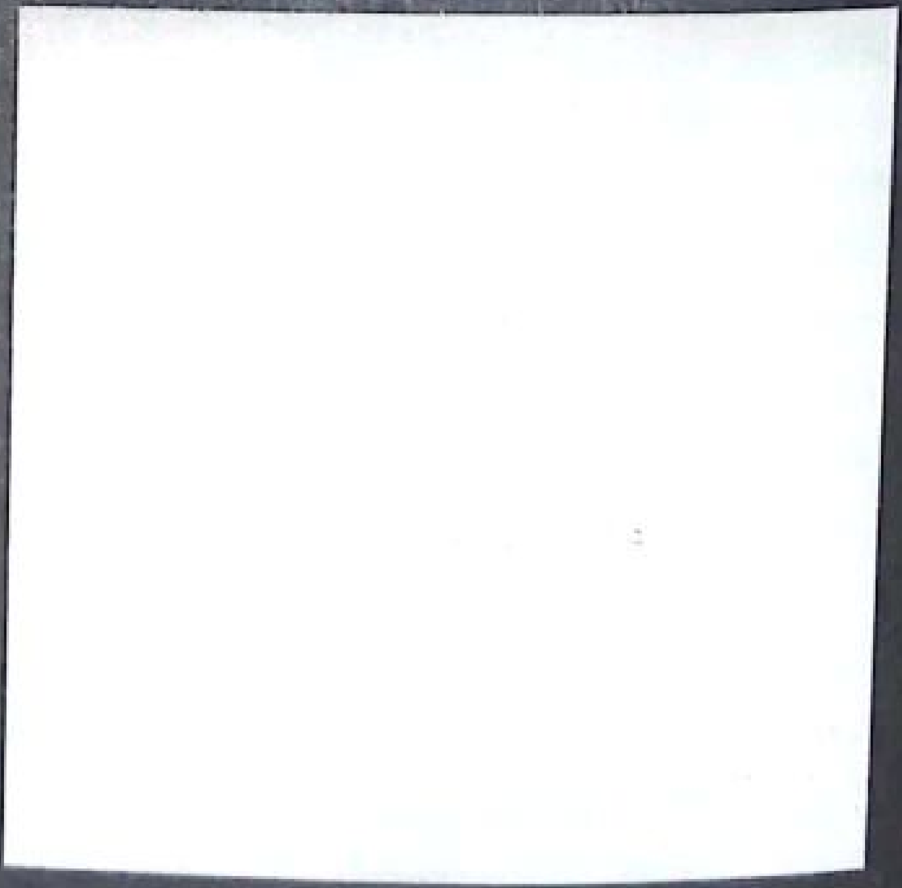
CamScannerでスキャン

11

ザ・ビートルズ［ホワイト・アルバム］

THE BEATLES ［WHITE ALBUM］

1968年11月22日



CamScannerでスキャン

11

ザ・ビートルズ［ホワイト・アルバム］
THE BEATLES［WHITE ALBUM］

1968年11月22日

[Disc 1]

① バック・イン・ザ・U.S.S.R.　Back In The U.S.S.R.
② ディア・プルーデンス　Dear Prudence
③ グラス・オニオン　Glass Onion
④ オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ　Ob-La-Di, Ob-La-Da
⑤ ワイルド・ハニー・パイ　Wild Honey Pie
⑥ ザ・コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル
The Continuing Story Of Bungalow Bill
⑦ ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーップス
While My Guitar Gently Weeps
⑧ ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン　Happiness Is A Warm Gun
⑨ マーサ・マイ・ディア　Martha My Dear
⑩ アイム・ソー・タイアード　I'm So Tired
⑪ ブラックバード　Blackbird
⑫ ピッギーズ　Piggies
⑬ ロッキー・ラックーン　Rocky Raccoon
⑭ ドント・パス・ミー・バイ　Don't Pass Me By
⑮ ホワイ・ドント・ウィー・ドゥー・イット・イン・ザ・ロード
Why Don't We Do It In The Road
⑯ アイ・ウィル　I Will
⑰ ジュリア　Julia

CamScannerでスキャン

【Disc 2】

①　バースデイ　Birthday
②　ヤー・ブルース　Yer Blues
③　マザー・ネイチャーズ・サン　Mother Nature's Son
④　エヴリボディーズ・ゴット・サムシング・トゥー・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー
Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey
⑤　セクシー・セディー　Sexy Sadie
⑥　ヘルター・スケルター　Helter Skelter
⑦　ロング・ロング・ロング　Long, Long, Long
⑧　レヴォリューション 1　Revolution 1
⑨　ハニー・パイ　Honey Pie
⑩　サヴォイ・トラッフル　Savoy Truffle
⑪　クライ・ベイビー・クライ　Cry Baby Cry
⑫　レヴォリューション 9　Revolution 9
⑬　グッド・ナイト　Good Night

CamScannerでスキャン

基本的に、ビートルズは仲が良いグループだった。レコード・デビューして、仕事がロンドンが中心になって、居を移さなければならなくなって、初めはホテルに住むことになった。これがシングルが四部屋ではなくて、ツインが二部屋なのである。もうホテルでは難しいとなって、ジョンは結婚していたから家族と住んだのだけど、ポールとジョージとリンゴは、ひとつのフラットに住んでいる。

各々が家を買ったときも、ポールだけはロンドン市内に住んで、ジョンとジョージとリンゴは、おたがいに行き来が出来るところに住んでいる。ジョンとリンゴなどは、ほとんどお隣さんだった。そういうふうになってからのコンサート・ツアーでも、ホテルの部屋はツインだった。スタジアムをフルハウスにするスーパースターがツインの部屋でふたりずつ泊まるというのは、ちょっとなかったのではないだろうか。

ひとりが何かに夢中になると全員がそうなるという傾向も、ビートルズにはあった。

おそらくリンゴから始まったのだろう、一九六五年一九六六年あたりは全員がカメラを趣味にしていた。「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」のビデオ・クリップでびっくりしたのは、全員が口髭をはやしていたことだった。ジョージがシタールに興味を持ったときも、ジョンとポールもシタールを買って少しは弾けたらしい。やはり、ジョージがマハリシ・マヘシ・ヨギに興味を持つと、全員で講演を聞きに行っている。それどころか、インドまで行っているのである。

ジョンとポールとジョージが出逢ったのは、今でいうと中学生や高校生の頃である。リンゴと知り合うのも、その二〜三年後である。そういう子供の頃からのつきあいだから、少しぐらいきついことを言い合ってもかまわないだろう。ビートルズの四人の中では、そういう暗黙の了解があったように思える。自作曲のレコーディングともなれば、注文もかなりきびしくなる。しかし、それが終わると、談笑しながらお茶を飲む。

簡単にいうと、それがどこまで許されるのかという許容範囲にずれが出来てきたということだろう。『ザ・ビートルズ』のレコーディング中にリンゴは脱退するつもりになったというし、ジョージもそれに近いところまでいったようだ。しかし、リーダー格のジョンとポールは、まったくそうなってはいない。強いていえば、ジョンとポ

ールは子供のままだったということになる。

そういう意味では、大人になってからのつきあいであるプロデューサーのジョージ・マーティンやエンジニアのジェフ・エメリックが、そういう言い合いを目にして嫌になったというのは理解出来る。なんてったって、ビートルズが解散したときに一番ショックを受けたのが、解散要求を出したポールだったのだから。なんと、「本当に解散するとは、思ってもいなかった」と発言しているのである。そういうことを言っても、四人で会えば元に戻れると見ていたのだろう。

しかし、一九六八年には、ジョンとリンゴは二十八歳で、ポールは二十六歳で、ジョージは二十五歳である。現在、還暦を過ぎた僕からしたら、子供である。友達に気をつかえといっても、難しいだろう。自分のことだけで、いっぱいいっぱいだったのではないだろうか。

だから、ビートルズの仲違いをどう見るかといったら、まず子供の喧嘩であって、次に兄弟喧嘩である。

一九六八年は二月に、シングルのレコーディングが行なわれる。「レディー・マドンナ」と「ジ・インナー・ライト」である。このときに「ヘイ・ブルドッグ」と「ア

クロス・ザ・ユニヴァース」も録音していて、この二曲のほうがシングル向けだと思うんだけどなあ。

　このシングルはイギリスでは一九六八年三月十五日に発表されて、三月三十日から二週間第二位が最高位である。アメリカでは三月十八日に発売されて、四月二十日から三週間第四位が最高位である。

（「レディー・マドンナ」は第一位になっていて、「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」はなっていないと書いてあるものもあると思う。これは僕が資料にしているのが「メロディー・メイカー」と「ビルボード」だからであって、「ニュー・ミュージカル・エキスプレス」と「キャッシュ・ボックス」ならそういうことになる。）

　その直後に、ビートルズはマハリシ・マヘシ・ヨギのところでメディテイションをするために、インドのリシケシュまで行っている。ジョンとジョージが約二か月、ポールが約五週、リンゴは約十日の、滞在だったという。それぞれのメディテイションへの興味の深さが、滞在日数にあらわれているのだろう。その後、ジョンとポールはニュー・ヨークに行って、アップル設立の記者会見を行なっていて、アップルについては次項で詳しく述べたい。

通称『ホワイト・アルバム』の『ザ・ビートルズ』は、一九六八年五月から十月までに約五か月をかけてレコーディングしている。二枚組だから、それぐらいの時間がかかったのだろう。この当時のLPはだいたい一枚が三十分から三十五分といったところだったのだけど、この作品は一枚目が四十六分二十四秒で、二枚目が四十七分十六秒で、合計九十三分四十秒にもなっている。三枚組であっても、おかしくないぐらいの量である。なおかつ、ポスターはついているし、四人のポートレイトもついている。スペシャルなレコードだった。

シングルの「ヘイ・ジュード／レヴォリューション」はイギリスでは一九六八年八月二十六日に発表されて、九月七日から四週間第一位になっている。アメリカでは八月三十日に発売されて、九月二十八日から九週間第一位になっている。

このビデオ・クリップはリアル・タイムで見たと思う。「ヘイ・ジュード」の壮大なことにも驚いたけれど、「レヴォリューション」でジョンが肩までの長い髪を揺らしてギターをかき鳴らして叫ぶのを見て狂喜した。

『ザ・ビートルズ』自体はイギリスでは一九六八年十一月二十二日に発表されて、十二月七日から十週間第一位になっている。アメリカでは十一月二十五日に発売されて、十二月二十八日から六週間第一位になっている。

難しいのは、一曲目が一枚目も二枚目もロックンロールだということだ。どちらも、ポールである。「バック・イン・ザ・USSR」にはビーチ・ボーイズふうのコーラスがあって、これはいっしょにインドに行ったビーチ・ボーイズのマイク・ラヴに教えてもらったという。「バースデイ」はどうもリフから作られた曲のようで、スタジオであっというまに完成させたそうだ。

「ロッキー・ラックーン」はアメリカン・ルーツ・ミュージックふうだし、「ハニー・パイ」も同じようにヴォードヴィルふうである。かと思うと、ヘヴィー・メタルの「ヘルター・スケルター」や、スカっぽい「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」もあったりする（村上春樹のエッセイにこの〝ライフ・ゴーズ・オン・ブラ〟を〝人生はブラジャーの上を行く〟と訳した人がいるというエピソードがあって、笑った）。「ホワイ・ドント・ウィー・ドゥー・イット・イン・ザ・ロード」と「ワイルド・ハニー・パイ」は、後のポールの『ワイルド・ライフ』などを思うと、即興で作ったようにも思えるのだけど、実は綿密に考えていた可能性もある。

「マーサ・マイ・ディア」、「ブラックバード」、「アイ・ウィル」、「マザー・ネイチャーズ・サン」などが、いつものポールのイメージだろう。マーサはポールが飼ってい

たモジャモジャの大型犬の名前だということは、よく知られている。「ブラックバード」は人種差別に抗議する曲だそうで、ポールのアコースティック・ギターが冴えている。しかし、三面まで、一曲目はポールの曲なんだなあ。
そして、「アイ・ウィル」は通常のビートルズのセットのようでいて、実はベースはポールがドゥッドゥッドゥッと口で言っている。僕はこの曲が大好きで、「オール・マイ・ラヴィング」と並ぶ大傑作だと思っている。「マザー・ネイチャーズ・サン」の初めの四小節は、チャイコフスキーの「スラブ行進曲」に出てくるメロディーである。「序曲一八一二年」にもほぼ同じようなメロディーが出てくるので、ヨーロッパでは一般的なフレーズなのかも知れない。
さて、ジョンである。ジョンがまた叫び始めて、世界は明るくなった。「ヤー・ブルース」は一番狭いスタジオで、ライヴ感覚での録音だったという。ほとんど、内容は「マザー」である。「アイム・ソー・タイアード」も同じようなやり方で、ヴォーカルも同時録音だったそうだ。そういえば、ヴォーカルの同時録音はよくあったと、ジョージ・マーティンが言ってたなあ。
「ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン」も、ビートルズのジョンらしい。「グラス・オニオン」はビートルズをひねって考える人をからかった曲だそうで、こういう

CamScannerでスキャン

ことをやるからそういうことになるということも分かっていたのだろう。「クライ・ベイビー・クライ」は引きこもり期のジョンを思わせるけれど、バックの音の減り張りが違う。「ディア・プルーデンス」、「セクシー・セディー」、「ザ・コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル」は、インドでの体験がテーマなのだろう。

「ジュリア」と「エヴリボディーズ・ゴット・サムシング・トゥー・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー」も、私ロックだろう。ジュリアはジョンの母親の名前で、オーシャン・チャイルドはヨーコだろう。すでに『ジョンの魂』の姿勢になっていることが、よく分かる。「ジュリア」のジョンのアコースティック・ギターも素晴らしくて、ポールの「ブラックバード」と並べたら面白かっただろう。

そして、シングル「レヴォリューション」をブルースにした「レヴォリューション1」と、サウンド・コラージュのアヴァンギャルド作品「レヴォリューション 9」である。ジョンとヨーコはすでに『トゥー・ヴァージンズ』を録音していて、十一月十一日に発表していた。だから、達成感はなかったのだろうけど、ビートルズのアルバムにこういうものを収録するというのは、同じ傾向があるポールにとっては複雑だっただろう。八分十二秒だもんね。

ジョージは一面に一曲ずつで、やはり「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」だろう。もはやビートルズのレコードに他のミュージシャンが参加するのは珍しくなかったのだけど、エリック・クラプトンほどの人はいなかった。基本的にコード進行の曲なので、ギターも流暢である。今のペースだったら自作曲を録音し終わるのに十年かかってしまうと、ジョージが不満を言い出したのもこの頃からだろう。

ジョンとポールだけではなくて、「ドント・パス・ミー・バイ」で、リンゴまでもソングライティングを始めたのだから、ジョージの言いたいことも分かる。最終曲のリンゴが歌う「グッド・ナイト」は、ジョンのメロディーだろう。

『リヴォルヴァー』から始まった実験は、一枚毎に深くなって、『ザ・ビートルズ』までできて、頂点に達したといってもいいだろう。ロックンロール、クラシック、ブルース、カントリー、ウエスタン、フォーク、ヴォードヴィル、ヘヴィー・メタル、アヴァンギャルド……すべてがビートルズという名前で、統一されている。のちの四人のソロ作品の片鱗も、見え隠れしている。四人には未来が見えていたのだろうか。

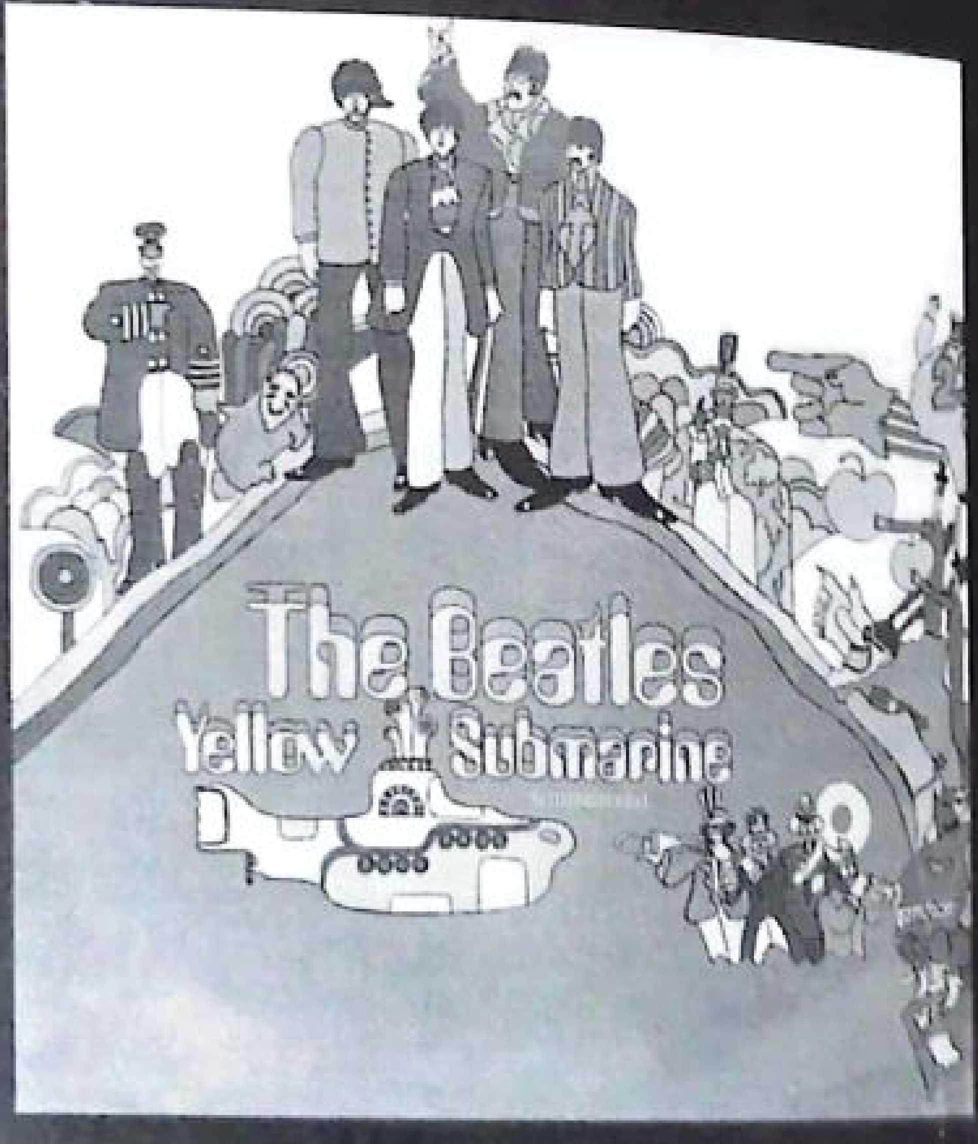
CamScannerでスキャン

12

イエロー・サブマリン

YELLOW SUBMARINE

1969年1月17日



CamScannerでスキャン

12

イエロー・サブマリン
YELLOW SUBMARINE

1969年1月17日

① イエロー・サブマリン　Yellow Submarine
② オンリー・ア・ノーザン・ソング　Only A Northern Song
③ オール・トゥゲザー・ナウ　All Together Now
④ ヘイ・ブルドッグ　Hey Bulldog
⑤ イッツ・オール・トゥー・マッチ　It's All Too Much
⑥ 愛こそはすべて　All You Need Is Love
⑦ ペッパーランド　Pepperland
⑧ シー・オブ・タイム　Sea Of Time
⑨ シー・オブ・ホールズ　Sea Of Holes
⑩ シー・オブ・モンスターズ　Sea Of Monsters
⑪ マーチ・オブ・ザ・ミーニーズ　March Of The Meanies
⑫ ペッパーランド・レイド・ウェイスト　Pepperland Laid Waste
⑬ イエロー・サブマリン・イン・ペッパーランド
Yellow Submarine In Pepperland

CamScannerでスキャン

アップルは一九六八年四月に設立されている。前年にブライアン・エプスタインが亡くなったために、ビートルズは新しい体勢を作ろうとしたのだろう。スタッフはそのままだったから、日常の機能には問題はなかった。必要だったのはイエスかノーかを決定する人物で、ビートルズはそれを自分達でやることにした。それが良かったのか悪かったのかは、誰にも分からない。一九六八年のビートルズに向かって何か言える人間は、ひとりもいなかったはずだから。

一九六八年五月に、ジョンとポールはニュー・ヨークでアップル設立の記者会見を行なっている。そこで、ジョンが「内容はレコード制作、音楽出版、映画制作、小売業、エレクトロニクス」と言うと、記者達は馬鹿にしたように笑って、からかうように拍手した。たしかに、それまでロック・バンドがそういうことをしたことはなかった。しかし、その映像を見て、僕は腹が立ってしかたがなかった。

今、考えてみると、レコード製作や音楽出版や映画制作はいいけれど、やはりエレクトロニクスはおかしい。当時取り巻きだったマジック・アレックスに、ジョンが乗せられてしまったのだろう。この頃は8トラックが最新だったのに、彼は72トラックのレコーダーが作れるなどと言っていた。後に、スタジオを作らせてみたら、スピーカーが七十二個並べてあっただけなので、さすがにジョンも手を切ったという。ビートルズとマハリシ・マヘシ・ヨギとの関係がおかしくなったのも、彼のせいだそうだ。ジョンがマハリシに夢中になったので、自分の立場が危なくなると思って、マハリシが女性をレイプしようとしたと、ジョンに吹きこんだらしい。

小売業というのは、店員も万引きしていて、数か月で閉店してしまった、アップル・ブティックのことだろう。これはしっかりした責任者にまかせれば良かったというだけのことだろう。おそらく、出来そこないのヒッピーみたいのばかり、店員にしてしまったのだろう。今になってみれば、その店限定のオリジナルのビートルズ・グッズを作ったら、大変なことになっていただろう。あの時代だって、ビートルズ・グッズは、山のようにあったのだから。それだけで、独立したビジネスになっていただろう。

メインはアップル・レコードである。レコード会社の意見に左右されないで、才能

あるミュージシャンのレコードを作ると、イギリスとアメリカの音楽誌に広告を載せたために、世界中からデモ・テープが送られてきたという。すぐに、すべてをチェックすることは、不可能になってしまった。それでも、偶然、四人のうちのひとりが聴いて、レコード発売までいった幸運な人も何人かいたそうだ。

そういうことはもう無理だということになって、ビートルズの四人かアップルのスタッフが気になったミュージシャンに声をかけるようになった。ジョージが一番多いらしい。プロデュースもジョージが一番多いだろう。ビリー・プレストンも、ジャッキー・ロマックスも、ドリス・トロイも、ラダ・クリシュナ・テンプルも。他のスタッフの好みも反映されていて、ジャズのモダン・ジャズ・カルテットやクラシックのジョン・タヴナーのものもある。もちろん、ラヴィ・シャンカールだってある。

アップルのカタログを見ると、活動していたのは一九七六年までで、約十年ということになって、発売されたＬＰは六十九枚になる。その中からビートルズと四人のソロ（ヨーコも含む）を除くと、二十九枚になる。カタログには書いてあるのだけど、発売されなかったものもあるらしい。すぐに発売中止になったものもあるようだから、実際に店頭に並んだのはもうちょっと少なくなるだろう。

それらの中でヒットしたものを、挙げてみる。メアリー・ホプキンの『ポスト・カ

ード』がイギリス六位アメリカ二十八位。バッドフィンガーの『マジック・クリスチャン・ミュージック』がアメリカ五十五位で、『ノー・ダイス』がアメリカ三十八位で、『ストレイト・アップ』がアメリカ三十一位。『ジェイムス・テイラー』がアメリカ三十一位。

シングルは百二十一枚で、ビートルズ関係を除くと五十七枚になる。その中でベスト三〇までに入ったものは、メアリー・ホプキンが「悲しき天使」イギリス一位アメリカ二位、「グッドバイ」イギリス三位アメリカ十三位、「夢見る港」イギリス四位、「しあわせの扉」イギリス三位、「未来の子供たちのために」イギリス二十位と、五枚ある。

バッドフィンガーは「マジック・クリスチャンのテーマ」イギリス四位アメリカ七位、「嵐の恋」イギリス六位アメリカ十位、「デイ・アフター・デイ」イギリス九位アメリカ五位、「ベイビー・ブルー」アメリカ十四位と、四枚ある。他には、ラダ・クリシュナ・テンプル「ハレ・クリシュナ・マントラ」イギリス十一位、「ゴヴィンダ」イギリス二十六位、ビリー・プレストン「神の掟」イギリス七位ということになる。

ビートルズ関係以外のレコードを発売していたのは、実質的に一九七三年まででであ

って、六年間でこれだけの数のレコードというのは、当時としてはたいしたものだと思う。それに対して、やはりヒットは少なかったというしかない。メアリー・ホプキンとバッドフィンガーだけである。後にスーパースターになるジェイムス・テイラーやビリー・プレストンがいたのになあ。

アップルを支えていたのは必ずベスト・セラーになるビートルズのレコードだったということは、間違いないだろう。アップルで最初のビートルズのLPは『ザ・ビートルズ』で、二枚目が『イエロー・サブマリン』ということになる。

『イエロー・サブマリン』がアニメーション映画の傑作として高く評価されているというのは、よく知られている。ビートルズはアニメなど嫌がっていたのだけど、ブライアン・エプスタインが契約していたのでしぶしぶ参加したようだ。新曲を四曲提出しなければならなかったので、すでにレコーディングしてあって宙ぶらりんになっていたものから出したらしい。しかし、出来上がった作品を見たら素晴らしいもので、あわてて手を加えた曲もあったそうだ。

ストーリーは、愛と音楽と花のペッパーランドに、ブルー・ミーニーが襲ってきて、ビートルズが戦うというものである。実にありふれた物語ではあるけれど、六〇年代

終わりの雰囲気にはぴったりだった。その時点で、出来る限りのアニメの手法が使われていたという。監督のジョージ・ダニングも原画のハインツ・エデルマンも、その世界では有名な実力者だった。

映画の中にはビートルズの曲が多数使われて、「エリナー・リグビー」や「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」などは独立した作品として見ることも出来た。しかし、レコードは、A面が「イエロー・サブマリン」と「愛こそはすべて」と新曲四曲で、B面はジョージ・マーティンのオーケストラのサウンドトラックということになった。つまり、はっきりいってしまえば、ビートルズの新曲は四曲しか収録されていないレコードだったのだ。ううむ。

どう考えても、四曲ともビートルズの作品として水準以上のものである。ジョージの「オンリー・ア・ノーザン・ソング」は『サージェント・ペッパーズ』のセッションのときのもので、まともにトラック・ダウンもされずに疑似ステレオになっている。「オール・トゥゲザー・ナウ」は一九六七年五月のセッションのもので、一日でレコーディングしている。アコースティックでジョンとポールのヴォーカルが楽しくて、どうしてほったらかしにされていたのか分からない。

CamScannerでスキャン

「ヘイ・ブルドッグ」は一九六八年二月のもので、「レディー・マドンナ」のビデオ・クリップのために、レコーディング風景を撮影することになって、そのためにこれをやったという。だから、数時間で完成させてしまった。この曲は「アイ・アム・ザ・ウォルラス」から「ヤー・ブルース」までを考えると、重要な一曲である。ジョンの躍動感が、たまらない。

「イッツ・オール・トゥー・マッチ」も一九六七年五月のセッションで、後から手を加えたのはこの曲のようだ。はっきりいって、ビートルズ時代のジョージの名曲を五曲挙げろといわれたら必ず入るべき曲で、ジョージの大きさがよく分かる。ところが、これが信じられないぐらいに音のバランスが悪い。どうしてこんなトラック・ダウンをしたのか、理解に苦しむ。

『イエロー・サブマリン』がプレミア公開されたのが、一九六八年七月十七日。『イエロー・サブマリン』のレコードが発売されたのが、一九六九年一月十七日。映画が公開されてから半年後にレコードを発売するというのは、どういうことなのだろう。結局、イギリスでは最高位が第四位、アメリカでは第二位ということになってしまった(第一位は『ザ・ビートルズ』だったのだけど)。

一九六八年七月といったら、『ザ・ビートルズ』のレコーディング中である。他のレコードを発売することなどは、出来ない。だから、『ザ・ビートルズ』を発売した二か月後の、一九六九年一月に発売したのだろう。明らかな、スケジュール管理の失敗だろう。もしくは……ビートルズはどうでもよかったのだろう、『イエロー・サブマリン』など。つまり……投げちゃっていたんだ、『イエロー・サブマリン』を。かつての『オールディーズ』や次の『レット・イット・ビー』の前の『ゲット・バック』を思い出す。ビートルズは興味をなくすと、投げ出してしまうことがある。

一九九九年九月に、『イエロー・サブマリン・ソングトラック』というCDが発売された。これは映画で使われた曲を十五曲集めたもので、初めてビートルズの曲をリミックスした一枚として注目された。ここで「オンリー・ア・ノーザン・ソング」はしっかりとしたステレオ・ミックスがされて、「イッツ・オール・トゥー・マッチ」の音のバランスも良くなった（ただし、乾坤一擲（けんこんいってき）のジョージのギターの最初の一音が小さくなっているのが、口惜しい）。

名曲をほったらかしにして、ろくにトラック・ダウンもしない。そういう曲を四曲

だけ収録して、ビートルズのレコードにする。明らかな、間違いである。このレコードは、ビートルズとジョージ・マーティンのレコードとすべきである。

CamScannerでスキャン

いつもビートルズがいっしょにいた

ビートルズのレコードが日本で発売され始めた一九六四年に、僕は中学生になった。『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』が発売された一九六七年には、僕は高校生になっている。そして、実質的なラスト・アルバムである『アビイ・ロード』が発売された一九六九年に、高校を退学になった。解散が伝えられた一九七〇年には、父が亡くなっている。ビートルズの前期は、僕の中学生の時期だった。後期が高校生の時期でもあった。

こういうふうに、ビートルズと自分を関連づけようとすれば、いくらでも出来る。しかし、ビートルズの活動期間が中学生高校生の時期だったということは、まぎれもない事実である。もっとも感受性が瑞々しかった時期にリアル・タイムでビートルズと過ごせたことは、神に感謝しなければならない。僕の根幹は、それだけである。そ

れだけで還暦過ぎまできたといっても、いい。それだけで生きてきたといっても、おかしくはない。

それまで使っていたポータブル電蓄は、一九六六年あたりにはそれよりは少しはましな卓上ステレオに代わっていた。その頃のステレオといったら家具のようなあつかいで、机ぐらいの大きさがあった。もちろん、卓上ステレオはそんなものではなくて、ポータブル電蓄よりもひとまわり大きいぐらいで、文字どおり机の上に乗ってしまう。それでも、スピーカーが右と左にあって、ステレオで聴こえる。

これで『ア・ハード・デイズ・ナイト』や『ヘルプ！』を、毎日聴いていた。しかし、三メートルも離れると、音の分離はあいまいになって、左右の音がミックスして、モノラルのようになってしまった。プレイヤーとアンプとスピーカーが二台というまともなステレオを手に入れたのは、高校を退学になって始めたアルバイトの給料でだった。あのステレオ・セットは嬉しくて、十年は聴いていたと思う。

ビートルズの他にもいろいろなバンドが好きになって、レコードを買って聴いた。アニマルズ、ローリング・ストーンズ、キンクス、フー。ビートルズとこれらのバン

ドが、六〇年代のイギリスの五大バンドだと僕は思っている。彼等のコンサートを見たいとは思っても、それはなかなかに大変なことだった。キンクスは一九八二年、アニマルズは一九八三年、ローリング・ストーンズは一九八九年、そしてフーは二〇〇四年にようやく見ることが出来た。ビートルズの一九六六年から、四十年近くの時間がかかったことになる。

こういう仕事を始めて、インタヴューもすることになった。ポールは一九八二年で、リンゴは一九九二年だった。アニマルズは、エリック・バードンをはじめとしてオリジナル・アニマルズ全員。ローリング・ストーンズはミック・ジャガー、キンクスはレイ・デイヴィスとデイヴ・デイヴィス。そして、フーのロジャー・ダルトリーにインタヴューしたのは、二〇〇八年だった。ロジャーのインタヴューが終わったときには、力が抜けてしまった。ジョージ・マーティン、オノ・ヨーコ、ジュリアン・レノンにもインタヴューした。しかし、ジョン……、しかし、ジョージ……。

ビートルズの次に夢中になったのは、ドアーズだった。ロックを文学的にも演劇的にも出来るというのは、驚異だった。自分もバンドを始めようと思ったのは、ドアーズを聴いてからだった。ビートルズを聴いてそう思わなかったのは、理解してもらえるだろうか。つまり、才能がある人間が四人も集まるのは、難しいのではないかと考

えたのである。自分に才能があるわけでもないのに。

日本のバンドで最初に好きになったのは、寺内タケシとブルー・ジーンズである。いうまでもなく、エレキの神様である。グループ・サウンズの時代では、スパイダースとワイルド・ワンズだった。デビュー・アルバムが全曲オリジナルだったのは、彼等だけだと思う。そのブームが終わって、ジャックスが登場した。イギリスやアメリカのロックの精神を、日本流でやっていた。僕が見たコンサートで一番衝撃的だったのはビートルズで、二番はジャックスだった。それで、バンドを始めた。

バンドを始めた高校生の頃、同人誌も作った。予想していたとおりに、三号で終わってしまった。中学校の三年間で、いちおう日本文学全集をすべて読んだ。これはただ読んだだけであって、上っ面を撫ぜただけだろう。今読み直したら、まったく違うことになると思う。それでも、大きな収穫があった。ほとんどおまけのような「その他の昭和の作家」というような巻で内田百閒を読んだのだ。高校生のときは、内田百閒ばかり読んでいたようにも思う。

ともかく、この頃には、夢があった。一枚のレコードを作ることと、一冊の本を作ることだった。

CamScannerでスキャン

高校に入学して数か月で、間違ったところにきてしまったと感じた。ともかく、管理だけの高校だった。〝髪の毛が肩にかかっている、刈り上げないと赤点にする〟と、保健体育の教師が平気で言うような学校だった。切らないと、殴られた。もはや学校や教師には何の期待も持たず、なんとか三年間をやり過ごそうと決めた。それで、毎日、渋谷に行って、地下鉄で外苑前に行って、青山の神宮球場の前にある高校へ行った。

そんな学校でも、友達は出来る。一番覚えているのは、Nである。やたらとビートルズに詳しくて、イギリス盤とアメリカ盤と日本盤の違いも彼に教えてもらった。帰りに地下鉄には乗らずに、今でいう246の青山通りを歩いて、青山学院の横にあった洋書店で、「ビートルズ・マンスリー」を買ったりした。あの頃のあの通りには、普通に八百屋も肉屋もあった。魚屋の店先で鮟鱇（あんこう）の吊し切りをやっているのを、見たこともあった。

Eというガールフレンドもいた（還暦過ぎて、ガ、ー、ル、フ、レ、ン、ド、だってさ）。人のいないところや暗いところにEを連れて行くのに、僕は熱心だった。屋上へのドアはいつも閉められていて誰も来ないので、校内ではそこへ連れて行くことが多かった。帰りには、絵画館の後ろの茂みに連れて行くこともあったと思う。

NやEといると、楽しかった。しかし、それ以外の学校は、すべてくだらなかった。バンドや同人誌も、面白かった。しかし、それ以外の生活は、すべて暗かった。それでも、いつもビートルズがいっしょにいた。それで、僕は生きてきたんだ。

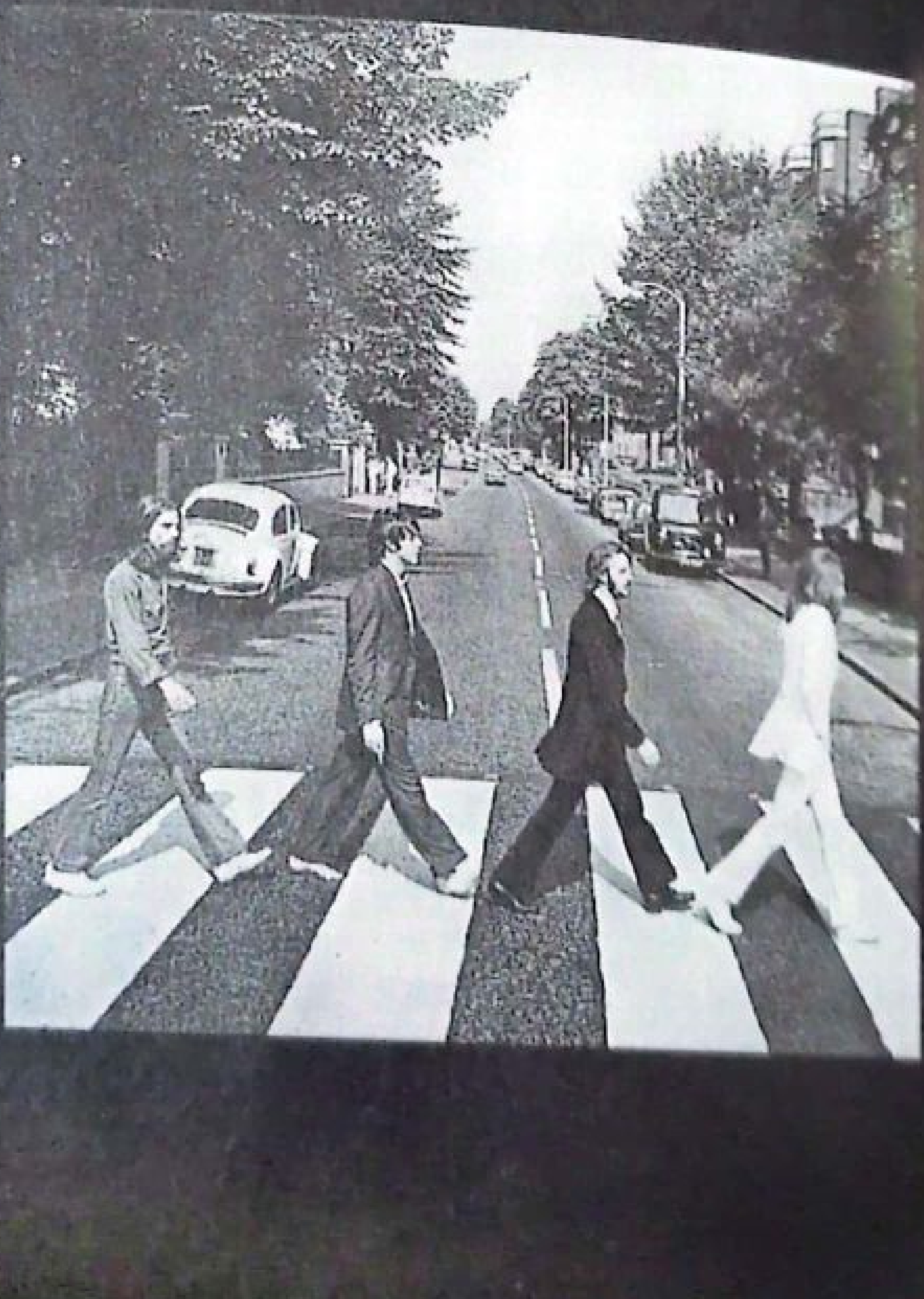
CamScannerでスキャン

13

アビイ・ロード

ABBEY ROAD

1969年9月26日



CamScannerでスキャン

13

アビイ・ロード

ABBEY ROAD

1969年9月26日

① カム・トゥゲザー　Come Together
② サムシング　Something
③ マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー
Maxwell's Silver Hammer
④ オー！ダーリン　Oh! Darling
⑤ オクトパス・ガーデン　Octopus's Garden
⑥ アイ・ウォント・ユー　I Want You (She's So Heavy)
⑦ ヒア・カムズ・ザ・サン　Here Comes The Sun
⑧ ビコーズ　Because
⑨ ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー
You Never Give Me Your Money
⑩ サン・キング　Sun King
⑪ ミーン・ミスター・マスタード　Mean Mr. Mustard
⑫ ポリシーン・パン　Polythene Pam
⑬ シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドゥ
She Came In Through The Bathroom Window
⑭ ゴールデン・スランバーズ　Golden Slumbers
⑮ キャリー・ザット・ウェイト　Carry That Weight
⑯ ジ・エンド　The End
⑰ ハー・マジェスティー　Her Majesty

CamScannerでスキャン

ロックのアルバムのベスト・スリーを選んでもらいたいというようなオファーが、ときどきくる。そういうときには、必ず第一位は『アビイ・ロード』にしていた。しかし、ずっと同じなのもなんだかなあと思って、最近は『ア・ハード・デイズ・ナイト』を第一位にしている。どっちでも、いいんだ。『ア・ハード・デイズ・ナイト』は僕がビートルズに夢中になった、最初のレコードである。『アビイ・ロード』はいうまでもなく、ビートルズのラスト・アルバムである。

発売されたのは『レット・イット・ビー』が最後ということになるのだけど、レコーディングされたのは『アビイ・ロード』が最後だということはファンなら知っているだろう。発表当時はそんなことは知らなくて、また凄いレコードを作ったなと単純に思っていた。そして、次の『レット・イット・ビー』を聴いて、その落差にちょっと戸惑った。『レット・イット・ビー』にはまとまりがなくて、『アビイ・ロード』の

ような緊張感がなかった。

『アビイ・ロード』がラスト・アルバムだということを知ったのは、いつだったのだろう。少なくとも、解散から数年は経っていたのではないだろうか。六〇年代には、今のようにレコーディング・データなど、公表されていなかったのだ。だから、少ない情報を集めて、正しいストーリーを追っていかなければならなかった。四人の仲が悪化していたということは映画『レット・イット・ビー』を見れば分かるのだけど、『アビイ・ロード』の時点ではまったく思ってもいなかった。チーム・ワークは素晴らしくて、ビートルズの魔法がかけられていた。

ジョージ・マーティンにインタヴューしたときに、「『アビイ・ロード』のレコーディングが最後になるということは、全員が分かっていた」と言われて複雑な気分になった。のちに『レット・イット・ビー』になる『ゲット・バック』のレコーディングが破綻して、ビートルズがうやむやのままに終わるのを避けるために、しっかりとしたレコードを一枚作りたいと、ポールは思っていたという。だから、このレコーディングでは、前回のような言い争いはなかったそうだ。しかし、ポールはそうは思っていなかったのではないかと、僕は推測する。このレコードがうまくいけば、ビートルズは続けられると思っていたのではないだろうか。だって、この頃のビートルズとい

ったら、ポール・マッカートニーなんだから。ビートルズを解散させたのは、ポールである。そして、ビートルズの存続を一番願っていたのも、ポールなのだ。

考えてみれば、ビートルズの活動は、いつも過剰だった。一年に、LP二枚とシングル三枚のレコーディングをして、映画を一作は撮って、イギリス・ツアーとアメリカ・ツアーとワールド・ツアーを行なう。それに疲れて、コンサート・ツアーを中止して、LPも一枚にする。しかし、LP二枚分ぐらいのレコーディングをしてしまう。結果的には、『マジカル・ミステリー・ツアー』、『イエロー・サブマリン』、『レット・イット・ビー』と、映画も毎年のように作っている。過剰である。

仕事にも慣れて、才能の使い方も分かって、いくらでも曲が出来るから、レコーディングをする。二十代後半で、元気一杯である。なんてったって、ジョージだけではなくて、ジョンやポールにも、作曲してあるのに録音出来ない曲が出てくる。それらは、のちにソロ・アルバムに収録される。それを思うと、一年に一枚ビートルズのレコードを作って、それぞれがソロ・アルバムを一枚作ることが出来たのではないだろうか。そうすれば、解散は回避出来たのではないだろうか。

『ザ・ビートルズ』が発表されたのが一九六八年十一月で、『イエロー・サブマリ

ン』が一九六九年一月である。そのときには、もう『ゲット・バック』のレコーディングは半ばまで行っていたらしい。それが失敗して、数か月四人はビートルズとしての仕事はしていない。そして、ジョンとポールだけの「ジョンとヨーコのバラード」のレコーディングである。

おそらく、ジョンとポールはおたがいに、ビートルズの今後を探り合っていたのだろう。曲の性格からしてジョンがポールに声をかけて、ポールは待ってましたとスタジオに行ったのだろう。そのとき、ジョージとリンゴはイギリスにいなかったのだけど、待っていられなかったのだろう。ポールは「僕とジョンだけでも、ビートルズのサウンドになっている」と、考えようによってはジョージとリンゴに失礼な発言をしていて、ポールらしいといえばポールらしくて、それだけ嬉しかったのかも知れない。「ジョンとヨーコのバラード」はイギリスでは一九六九年五月三十日発表で、六月二十一日から三週間第一位になっている。アメリカでは六月四日で、七月十二日から三週間第八位が最高位である。

これでジョンとポールにレコーディングの合意が出来て、七月八月の二か月で『アビイ・ロード』の録音が行なわれる。最後のレコーディングだという暗黙の了解があったためか、この作品も過剰である。なんと、全十七曲四十七分二十六秒である。お

そろしいまでの才能である。

レコードはA面がソロ・サイド、B面がビートルズ・サイドといってもいい構成になっている。ポールが気をつかったのだろう、オープニング曲は『ヘルプ!』以来のジョンで「カム・トゥゲザー」である。チャック・ベリーの盗作騒ぎがあったぐらいだから、ロックンロールであり、これを盗作と見るのは、難しい。たとえば、アメリカではトラディショナル・ソングに新しい詞を書いて、オリジナルということがよくある。古い話ではない。数年前のボブ・ディランでもあった。頭の中に残っていたチャイコフスキーやチャック・ベリーのメロディーに詞を書いてアレンジをして、盗作という意識はなかったのだろうと思う。

「サムシング」はジョージの最高傑作といわれていて、この間奏のギター・ソロはミュージシャンの間でも評価が高い。ジョージの日本公演で、イントロに渋いフレーズをつけていたのを思い出す。フランク・シナトラが「『サムシング』はジョンとポールの最高傑作だ」と言ったのは、知られているだろう。この曲はシングル・カットされて、ジョージの曲がA面になったのは初めてだった。イギリスでは一九六九年十月三十一日発売で、十一月二十九日の第四位が最高位である。アメリカでは十月六日発

売で、十一月二十九日に第一位になっている。

ジョン、ジョージときて、ポールの「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」である。ポールらしいといえばポールらしい曲ではあるけれど、どうも調子が削がれる。次がやはりポールの「オー！ダーリン」で、ブルージーなシャウトが聴けるのだから、要らなかったのではないかといったら、ポールは怒るだろうな。A面にジョンも二曲収録されているからというのだったら、自ら没にして『マッカートニー』でやった「ジャンク」のほうが良かったんじゃないかな。

ジョン、ジョージ、ポールときて、リンゴの「オクトパス・ガーデン」である。「イエロー・サブマリン」の弟のような曲で、リンゴのオリジナルである。「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」はこのあとに入れても、印象が変わっただろう。いや、そのほうが良かったな。そして、ジョンの「アイ・ウォント・ユー」で、明かにヨーコを歌った曲である。単純なメロディーを繰り返して、クライマックスに持っていくのは、ラヴェルの「ボレロ」を思い出すのだけど、ジョンは狂気を開放している。それが過剰の七分四十五秒になっている。このシャウトは、たまらない。

このアルバムではシンセサイザーが多用されていて、ロックでは初めてだったのではないだろうか。スティーヴィー・ワンダーは同じぐらいかな。富田勲の『惑星』の、

ちょっとあとぐらいになるんじゃないかな。この奏者がジョージだというのが、面白い。ジョージは五月にシンセサイザーの『電子音楽の世界』を発表しているので、実に効果的に使用している。たしか、「ビートルズ・マンスリー」にこのときの写真が載っていて、シンセサイザーの大きさはほとんど壁一面だった。

A面がビートルズの個人を聴かせるサイドで、B面がビートルズのグループを聴かせるサイドだというのは間違っていないと思う。ジョージの「ヒア・カムズ・ザ・サン」に続いて、ジョンとポールとジョージのコーラスの「ビコーズ」である。一九六三年の「ディス・ボーイ」は、ここまできたのである。〝空が青いから、涙が出てくる〟という詞も、開放されたジョンだからだろう。

「ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー」、「サン・キング」、「ミーン・ミスター・マスタード」、「ポリシーン・パン」、「シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドゥ」が、一番目のメドレーである。そして、「ゴールデン・スランバーズ」、「キャリー・ザット・ウェイト」、「ジ・エンド」が、二番目のメドレーになる。しかし、これは「ヒア・カムズ・ザ・サン」から「ハー・マジェスティー」までのメドレーとして考えたほうがいいだろう。全十一曲である。

一九八九年から始まったポールのワールド・ツアーでは、「ゴールデン・スランバ

ーズ」からの三曲のメドレーが演奏された。これはキーボードのウイックスの提案だったそうで、ポールはそれほど乗り気ではなかったという。とりあえずリハーサルを始めたら、途中から音がおかしくなった。どうしたのだろうと思って見たら、卓についていたサウンド・エンジニアが号泣していたそうだ。

〝かつては、そこには家に帰る道があった／泣かないで、おやすみ／子守唄を歌ってあげよう〟

〝これから、重荷を背負って、生きていかなければならないんだ〟

〝今晩、僕は君の夢を見るだろう／最後には、君が受ける愛は君が与える愛と同じになる〟

見事としかいいようがない。最後のレコードの最後の三曲を、このように歌えるバンドがどこにいるというんだ。自分達の終焉も歌っているんだ。だいたい、最後のレコードの最終曲が、「ジ・エンド」なんだぜ。そして、不完全を特長とするビートルズらしく、「ハー・マジェスティー」がポールによって歌われる。まったく、必要ないのに。

『アビイ・ロード』はイギリスでは一九六九年九月二十六日に発表されて、十月四日

から十九週間第一位になっている。アメリカでは十月一日に発売されて、十一月一日から合計十一週間第一位になっている。

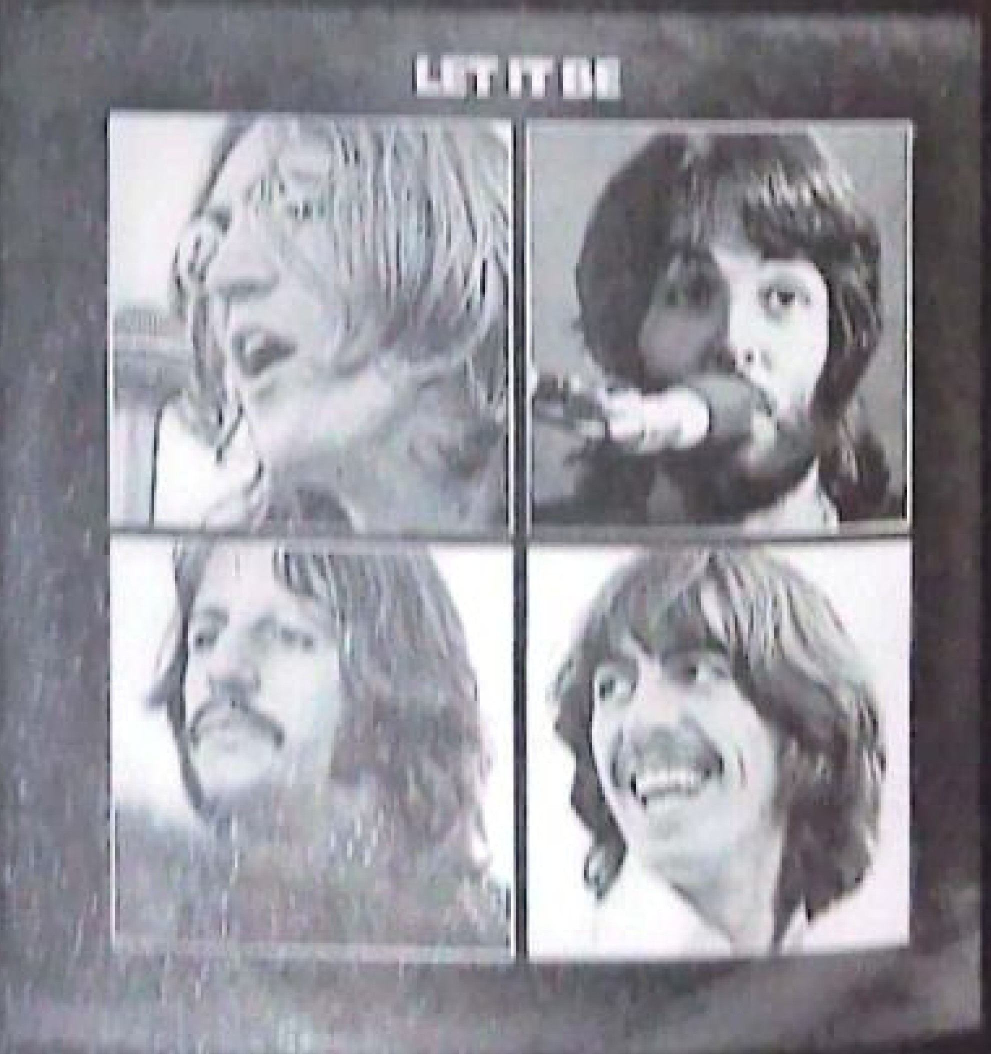
解散を前提としてレコーディングをして、それが四十年以上経っても世界中で聴かれている。こんなとてつもない終焉が出来るバンドが、いるだろうか。ビートルズだけである。そして、ビートルズは北極星になった。

14

レット・イット・ビー

LET IT BE

1970年5月8日



14

レット・イット・ビー
LET IT BE

1970年5月8日

① トゥー・オブ・アス　Two Of Us
② ディグ・ア・ポニー　Dig A Pony
③ アクロス・ザ・ユニヴァース　Across The Universe
④ アイ・ミー・マイン　I Me Mine
⑤ ディグ・イット　Dig It
⑥ レット・イット・ビー　Let It Be
⑦ マギー・メイ　Maggie Mae
⑧ アイヴ・ガット・ア・フィーリング　I've Got A Feeling
⑨ ワン・アフター・909　One After 909
⑩ ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード
The Long And Winding Road
⑪ フォー・ユー・ブルー　For You Blue
⑫ ゲット・バック　Get Back

CamScannerでスキャン

前項でも書いたように『ザ・ビートルズ』は一九六八年十一月に発表されて、『イエロー・サブマリン』は一九六九年一月に発表されている。二か月しか経っていないのである。なおかつ、『イエロー・サブマリン』の映画は一九六八年七月に公開されているから、レコードのリリースは五か月も経ってからということになる。どこかが、おかしくなっている。理由は簡単だ。ブライアン・エプスタインがいなくなったからである。

また、『イエロー・サブマリン』が発表されたときには、のちに『レット・イット・ビー』になる『ゲット・バック』のレコーディングが、もう半ばぐらいまで進んでいた。何をそんなに急いでいたのだろうか。いや、急いでいたのではなくて、思いついたらすぐにやりたいというビートルズの……というかポールの決断だろう。しつこいようだけど、ブライアン・エプスタインがいたら、こんなことにはならなかった

だろう。

『ザ・ビートルズ』でまとまらなくなったビートルズを、かつてのように一体感のあるバンドに戻さなければならないとポールは考えた。タイトルも『ゲット・バック』にして、ストリングスやホーンも使わないシンプルなサウンドで、ライヴ感覚のあるロックンロール・アルバムを作ろうというのは、よく分かる。

しかし、ポールはエスカレートしてしまう。そのレコーディングを撮影して、テレビで放送しようということになる。ひょっとしたら、『マジカル・ミステリー・ツアー』の失敗が、ポールの頭の中にはあったのかも知れない。ああいうやり方では受け入れられないのならば、ビートルズのレコーディングならいいだろうと思ったのではないだろうか。絶賛された「アワー・ワールド」の、「愛こそはすべて」を思っていたのだろうか。構想はもっとふくらんで、テレビは映画になって、一九六六年以後やっていないライヴを、最後の場面にするというところまでいってしまう。

その結果、レコーディング・スタジオにカメラが入るのではなくて、撮影スタジオでレコーディングするということになる。基本的に、ビートルズのレコーディングは、四人とプロデューサーとエンジニアだけしかスタジオには入れなかった。ところが、撮影スタジオには当然たくさんの撮影スタッフがいて、とても集中することが出来な

い。四人はいらいらして、それが言動にもあらわれる。

特に、ポールはリードしようとして、発言も厳しくなって、三人はげっそりとしてしまう。しかし、ここでポールを責めることは出来ない。ブライアン・エプスタインが亡くなった後、まとめ役はポールだったのだから。リーダーだったジョンには、もうそういう気はない。ジョージやリンゴと同じように、ジョンも脱退することを考えていたのだから。

それでも、あまりのひどさに、場所をアップルの地下スタジオに移して、レコーディング・スタジオにカメラが入るという形にする。また、ジョージが旧知のビリー・プレストンを、レコーディングに誘う。四人だけだったときと、スタジオの雰囲気は大きく変わった。最後にあのアップルの屋上でのライヴを行なって、約一か月の『ゲット・バック』のレコーディングと撮影は終わった。

その結果は、「ゲット・バック／ドント・レット・ミー・ダウン」のシングルだけだった。これはイギリスでは一九六九年四月十一日に発表されて、五月三日から四週間第一位になっている。アメリカでは五月五日に発売されて、五月二十四日から五週間第一位になっている。一月にレコーディングして、三か月後に発表するというのはちょっと気になる。いつもだったら、一か月後ぐらいだろう。『ゲット・バック』の

セッションはこれで終わって、またもや一か月後の五月に「ジョンとヨーコのバラード」が発表される。

一九六九年七月号の「ビートルズ・マンスリー」には、『ゲット・バック』というタイトルのLPが八月にリリースされると書いてあった。ジャケットはデビュー・アルバムと同じ形で、つまり青盤の写真である。曲目も記されてあった。次のようなものである。

［A］

1　ワン・アフター・909
（リンク　ラスト・ダンスは私に）
2　ドント・レット・ミー・ダウン
3　ディグ・ア・ポニー
4　アイヴ・ガット・ア・フィーリング
5　ゲット・バック

［B］

CamScannerでスキャン

1　フォー・ユー・ブルー
2　テディー・ボーイ
3　トゥー・オブ・アス・オン・アワー・ウェイ・ホーム
（リンク　マギー・メイ）
4　ディグ・イット
5　レット・イット・ビー
6　ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード

これはエンジニアのグリン・ジョーンズが編集したものだと、いわれている。しかし、翌八月号の「ビートルズ・マンスリー」には、『ゲット・バック』の発売延期と別のLPのレコーディングのことが書かれている。九月号にはその別のLP『アビイ・ロード』が、なんと九月に発表されると書いてある。つまり、『ゲット・バック』はどうやっても一枚のレコードにはならなかったのだろう。

シングルで発表した「ゲット・バック」と「ドント・レット・ミー・ダウン」、そして一九七〇年三月に発表したシングル「レット・イット・ビー」の三曲だけしか合格点ではなかったのだろう。というのは、「レット・イット・ビー」のB面は、『ゲッ

ト・バック』セッションのものではなくて、一九六七年五月にローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズもゲスト参加して録音した「ユー・ノウ・マイ・ネーム」だったからだ。

「レット・イット・ビー」はイギリスでは一九七〇年三月六日に発表されて、三月二十一日から二週間なんと最高位は第三位だった。アメリカでは三月十一日に発売されて、四月十一日から二週間第一位になっている。

「レット・イット・ビー」がイギリスでは第一位にはなっていないというのも驚くけれど録音から一年二か月後に発表されるというのもびっくりする。これで『ゲット・バック』セッションは忘れ去られるのかというと、もちろんそういうことにはならない。

一九七〇年四月十日、ビートルズの存続をもっとも願っていたはずのポールが、ビートルズを脱退することを発表する。これには四月十七日に発表するポールの初めてのソロ・アルバム『マッカートニー』のプロモーションの気配があって、今ではとても本心からのものだったとは思えない。そういう発言をしても、戻ろうとすれば三人は受け入れてくれると思っていたようなところがある。ともかく、脱退を考えていた

ジョンとジョージとリンゴが残り、存続したかったポールが脱退するという、奇妙なことになってしまった。

そして、ポールが脱退したというのに、フィル・スペクターが『ゲット・バック』を再プロデュースした『レット・イット・ビー』が五月に発表された。このことは、ポールもジョージ・マーティンも知らなかったという。これも不思議である。なんといっても、同じアップル・レコードであるし、フィル・スペクターがスタジオでリプロデュースしたのは三月で、まだポールは脱退を発表してはいない。

これまでのいきさつを考えても、三月の時点でポールに隠してジョンとジョージとリンゴだけでこういうことをやるとは思えない。となると、やはり三人のマネージャーになったアラン・クレインだろうか。ポールが怒るのも、分かる。『ゲット・バック』セッションを失敗と認めて、「ジョンとヨーコのバラード」でジョンと存続を確認して、『アビイ・ロード』を作って有終の美を飾ったのに、どうして失敗作をリリースするのだろうか。

『レット・イット・ビー』はイギリスでは一九七〇年五月八日に発表されて、六月六日から八週間第一位になっている。アメリカでは五月十八日に発売されて、六月十三日から四週間第一位になっている。

『レット・イット・ビー』は収録曲を考えても、おかしい。ビートルズのアルバムのオープニング曲は、必ずロックンロールである。グリン・ジョーンズの『ゲット・バック』も、「ワン・アフター・909」だった。ところが、これは「トゥー・オブ・アス」なのである。『ゲット・ボーイ』に収録されていた「ドント・レット・ミー・ダウン」と「テディー・ボーイ」が消えて、『レット・イット・ビー』には「アクロス・ザ・ユニヴァース」と「アイ・ミー・マイン」があらわれた。これはまだいいか。

不思議なのは、一月にポールとジョージとリンゴの三人だけで「アイ・ミー・マイン」のレコーディングをしていることだ。ジョンは個人活動をしていたのだろう。ポールはまだ『ゲット・バック』をまとめることを、考えていたということか。または、シングル「レット・イット・ビー」のB面曲にするつもりだったのか。

収録曲を見ると、「ディグ・ア・ポニー」、「アイヴ・ガット・ア・フィーリング」、「ワン・アフター・909」は、一九六九年一月三十日のアップルの屋上でのライヴが基本になっている。シングルの「ゲット・バック」や「ドント・レット・ミー・ダウン」と比べると、繊細さには欠けるのだけどライヴらしい。

「アクロス・ザ・ユニヴァース」は一九六七年二月にレコーディングして、ジョンが

気に入らなくてWWFのチャリティー・レコードに収録してしまった曲だ。フィル・スペクターはこの曲を解体して、得意のウォール・オブ・サウンドにした。ジョンは大変喜んだという。こういうふうにやりたかったのか。同じように音の壁にされたのが「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」で、シンプルでライヴ感覚にしたかったポールは激怒した。他にも、理由はあった。

「レット・イット・ビー」はシングルとはミックスを変えていて、短い間ではあるけれどシングルを聴きこんでいた人間には気持ちの良いものではなかった。「アイ・ミー・マイン」と「フォー・ユー・ブルー」はこの頃のジョージとしては、それほど素晴らしいとは思えないだろう。

問題は「レット・イット・ビー」、「ゲット・バック」、「トゥー・オブ・アス」、「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」の、ポールの四曲である。ポールがビートルズの人間関係に悩んでいたときに、亡くなった母親のメアリーが夢に出てきて、「レット・イット・ビー」と言ったというのが、「レット・イット・ビー」のいわれであり、ジョンの「ジュリア」も意識しているだろう、おそらく。

「ゲット・バック」を歌うときに、いつもポールが顔をうかがうのでジョンは気分が悪かったそうだ。つまり、ジョンに戻って来いよと言っているのだ。ポールは「トゥ

ー・オブ・アス」は自分とリンダの歌だと言っているのだけど、そんなことはないだろう。

〝君と僕には思い出がある／ずっと続いて行く道よりも長く〟

ポールとリンダのつきあいは、まだ二〜三年のはずだ。そんなに長いつきあいといったら、ひとりしかいない。

「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」に関しては、何も言うことはないだろう。ポールがジョンに、訴えかけていたのだ。そういう素朴なジョンへの曲が豪華絢爛なウォール・オブ・サウンドにされたから、ポールは激怒したのだろう。フィル・スペクターは何も分かっていなかったのだ。

このアルバムは、ポールにとっては子供の頃からの友人のジョンへの手紙だったのだろう。その思い入れを分かっていながら、ジョンは気がつかないふりをしたのだろう。おそらく、このことをポールは否定するだろう。ジョージやリンゴはどう思っていたのだろうか。

「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」はアメリカで一九七〇年五月十一日にシングル・カットされて、六月十三日から二週間第一位になっている。

　二〇〇三年、『レット・イット・ビー…ネイキッド』というCDがリリースされた。これは『レット・イット・ビー』を当初の『ゲット・バック』のように、シンプルでライヴ感のあるようにミックスをやり直した一枚だ。しかし、三十年以上も聴いているものを、こちらが正しいといわれても、困ってしまう。それにしても、「ゲット・バック」と「レット・イット・ビー」の間奏フレーズが酷似（こくじ）しているのは、どうしてなのだろうか。

そしてビートルズは北極星になった

ビートルズが解散したのは、いつだったのだろうか。たとえば、ポールがビートルズとアップルの解散を求めて、裁判所に行った日だろうか。または、その判決が出た日だろうか。そういう法律がらみでは、いくつかの日付が考えられるだろう。しかし、ポールがビートルズを脱退すると発表した、一九七〇年四月十日というのが正しいような気がする。ポールがいないビートルズというのは、もうビートルズではないからだ。もちろん、ジョンがいないビートルズも、ビートルズではない。そして、ジョージがいないビートルズも、ビートルズではない。また、リンゴがいないビートルズも、ビートルズではない。ジョンとポールとジョージとリンゴ、四人がいてビートルズなのである。

ポールがビートルズを脱退したというニュースを聞いたのは、一九七〇年四月十二

日の午前一時過ぎのことだった。ニッポン放送の「オールナイト・ニッポン」で、亀渕昭信さんが伝えてくれたのだ。どうして日付まで覚えているのかというと、四月十二日は僕の誕生日だからだ。つまり、十九歳の誕生日の一時間目に、僕はビートルズ崩壊のニュースを聞いてしまったのである。

考えてみれば、ビートルズの解散の噂なんて、それまでもいくらでもあった。もう一九六四年ぐらいから、毎年のようにあったのではないだろうか。だから、本来ならば、そんなニュースなど気にする必要もなかった。しかし、亀渕さんはそういうゴシップを喜ぶ人ではなくて、本当に音楽ファンでビートルズ・ファンだということが分かっていたから、これは信じないわけにはいかなかった。それを拒否する防衛反応もあって、頭が揺れた。悲しい誕生日の始まりだった。

そういうふうに、世界中のビートルズ・ファンがショックを受けた。ところが、ビートルズ自身は何も変わらなかった。脱退を考えていたジョンもジョージもリンゴも、何の反応もしなかった。それぞれのソロ・アルバムの、レコーディングを行なっていたからだろう。もはやビートルズに実体はないのだから、脱退も解散もなかったのだろう。レット・イット・ビーだったのだろう。

呆気にとられたのは、ポールだろう。脱退すると発表したのに、戻って来てくれと

CamScannerでスキャン

も言ってこないし、解散するとも言ってこないし、動向がまったく分からない。自分がいなくなっても、ビートルズには何の変化も起こらないというのは、もっともビートルズの存続を願っていたポールには、耐えられなかったのだろう。ポールの代わりにクラウス・フォアマンがビートルズに加入するという、まったく根拠のない噂が流れて、ポールはビートルズとアップルの解散を求めて、裁判所に向かった。

それは一九七〇年十二月三十一日のことだったのだから、ポールもぎりぎりまで悩んでいたことが分かる。その結果、解散することが決定したら、「解散しそうだなとは感じていたけど、本当に解散するとは思ってもいなかった」と発言することになる。

イギリスで『アビイ・ロード』が発表された直後の一九六九年十月に、僕は高校を退学になった。文化祭で学校側の挑発に乗せられて、ぶつかってしまったのだ。翌年の七〇年安保に向けて、世の中は騒然としていた。隣の都立高校でも、二十人ぐらいが体育館を占拠していた。僕達が考えていたのはもっとずっと小さいことで、生徒が自主的に行なう文化祭だった。そして、生徒会を作ることだった。

二学期になってからは、毎日そういう相談をしていた。それに気がついたのだろう、運動部員がバットを持って脅しをかけてきたりもした。その後ろには、息の臭い英語

の教師がいることも知った。結局、教師が運動部員を操っていたのだ。それでも、なんとか自主的な文化祭は行なうことが出来た。無事に終わって片づけているときに、ひとりの教師が僕達の荷物に難癖をつけた。そこで、言い合いになった。俺はセクトに所属していると大口を叩いていた奴が、その横を目を合わせないようにして帰って行った。

二十人ぐらいいた中の三人が退学で、そのひとりが僕だった。ともかく高校だけは卒業しなさいという父親の意見にしたがって定時制の高校に入ったのは、後ろめたかったからだろう。その定時制高校に行っても、やはり後ろめたかった。他のクラス・メイトはもちろん昼間は働いているわけで、なかにはすでに結婚していて子供もいて車で学校に通って来る三十代の人などもいた。

翌年の一九七〇年一月に、父親が亡くなった。医者は糖尿病昏睡と言ったと思う。倒れてから一週間も経たないうちに、死んでしまった。数か月前の僕の騒動は直接的な関係はなかっただろうけれど、これも後ろめたかった。定時制高校に入っても、働きもせず勉強もせず、ぼうっとしていたのだけど、そういうわけにはいかなくなった。それまで、この先は漠然と大学入試を受けようとかイギリスへ行こうとか思っていて……いやそれどころではなくなった。

家にそんな経済的な余裕があるわけではないということは、よく分かっていた。少なくとも自分の食い扶持ぐらいは、自分でなんとかしなければならない。すぐに、近所でアルバイトを始めた。春になって定時制高校も卒業して、今度は銀座の広告代理店でアルバイトを始めた。そうやって働いてお金を貯えて、大学へ行こうとかイギリスへ行こうとか考えていたのだ。そんなことは無理だということは、三か月も経たないうちに分かった。本格的にバンドを始めたのは、この頃だった。それしか考えられなかった。

その広告代理店では二年ぐらい働いていて、すぐ近くに日本楽器があった。つまりヤマハであって、当時はヤマハが一番輸入盤がそろっていて一番入荷が早かった。青山の高校に行っていたときも、渋谷のヤマハでレコードを買っていた。だから、昼休みはほとんど毎日ヤマハへ行って、レコードをチェックしていた。そして、ある日、その銀座のヤマハで僕はイギリス盤の『レット・イット・ビー』を発見した。あの写真集付きの、豪華版である。

イギリスでのリリースは一九七〇年五月八日で日本は六月五日だから、五月中のことだろう。高かった。おそらく、五千円ぐらいはしたと思う。給料の半月分である。日本盤が二千円で、アメリカ盤が三千円ぐらいの頃だ。それでも、買った。どう考え

でも、五月二十五日の給料日だろう。しかし、感激はしなくて、『アビイ・ロード』と比べると、素晴らしいとは思えなかった。

映画の『レット・イット・ビー』は、日本では八月に公開された。どういうわけか僕は自宅のある大森から銀座の広告代理店まで自転車で行って、顔見知りの受付のお姉さんに「自転車、置いといていい？」と訊いて、玄関の横に置かせてもらって、有楽町のスバル座まで歩いて行った。今考えると、これは不思議だ。会社がやっていたということは、僕も映画を見になど行けないはずだ。ずる休みをしたのなら、会社には近づかないだろう。よく分からない。

『レット・イット・ビー』は悲しかった。偉そうに仕切りまくるポール、そのポールにねちねち言われて怒るジョージ、それをうんざりした顔で見るリンゴ、それを見ていながらまったく知らん顔のジョン。いいところなんか、ひとつもなかった。また、スバル座から会社まで歩いて行って、受付のお姉さんにお礼を言って、自転車に乗って大森まで帰った。途中、浜松町か田町あたりで、涙が出てきた。ビートルズは終わったんだ。

ランドセルを背負っていた小学校六年生から聴いていたビートルズが、終わってしまったのだ。一九六四年から一九七〇年まで、僕はほとんど毎日ビートルズのレコー

ドを聴いていた。「ツイスト・アンド・シャウト」や「オール・マイ・ラヴィング」から始まった僕の少年時代は、「ドント・レット・ミー・ダウン」や「レット・イット・ビー」で終わったのである。少年時代をビートルズと過ごせたことを、感謝すべきだろう。

ところが、ビートルズは終わらなかったのである。たしかに、解散直後は、過ぎ去ったものというあつかいだった。特に、ロックの世界ではハード・ロック、プログレッシヴ・ロック、グラム・ロックがブームになって、ビートルズは古臭い音楽ということにされた。つまり、ロック・ファンはビートルズを貶すのがかっこいいと、ファッションになったのだ。しかし、それは数年間のことだった。若い新しいファンが、どんどんと増えてきたのである。

ハード・ロックもプログレッシヴ・ロックもグラム・ロックも、消え去った。パンクもレゲエも、ブームは終わった。そして、パワー・ポップやブリット・ポップは、明らかにビートルズを教科書にしていたのだ。解散後もビートルズのアルバムはリリースされ続けて、二〇〇〇年の『ザ・ビートルズ 1』は日本だけで三百万枚という数字になった。「ロックンロール・ミュージック」の八十五万枚の、三倍から四倍と

いうことになる。では、解散後に発売されたビートルズのアルバムを書いておこう。

1『ザ・ビートルズ　1962～1966』
タイトルどおりにビートルズ前期のベスト・アルバムで、二枚組。通称、赤盤。CDあり。一九七三年四月発売。

2『ザ・ビートルズ　1967～1970』
こちらは後期のベスト・アルバムで、二枚組。通称、青盤。CDあり。一九七三年四月発売。

3『ロックンロール・ミュージック』
これもタイトルどおりにロックンロールだけを集めた二枚組で、日本で企画された。レコードのみ。一九七六年六月発売。

4『ザ・ビートルズ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』
一九六四年と一九六五年のハリウッド・ボウルでの、ライヴ・アルバム。レコードのみ。一九七七年五月発売。

5『ラヴ・ソングス』
『ロックンロール・ミュージック』と対の、ラヴ・ソングだけを集めた二枚組。レ

コードのみ。一九七七年十一月発売。

6『ザ・ビートルズ・レアリティーズ』

オリジナルとはヴァージョンが違うものを集めたもので、イギリス編集盤とアメリカ編集盤では内容が異なる。レコードのみ。一九七九年十一月発売。

7『ザ・ビートルズ・バラッズ』

バラードを二十曲集めたもので、ジャケットが素晴らしい。レコードのみ。一九八〇年十月発売。

8『リール・ミュージック』

五作の映画のサウンドトラックから集めたもので、ビートルズちゃんちゃかちゃんもあった。レコードのみ。一九八二年三月発売。

9『20グレイテスト・ヒッツ』

デビュー二〇周年記念の、二十曲収録のベスト・アルバム。レコードのみ。一九八二年十月発売。

10『パスト・マスターズ』

オリジナル・アルバムに収録されていないシングルやEPの曲を集めたもの。かつては「ヴォリューム・ワン」と「ヴォリューム・ツー」があったのだけど、現在の

CDはまとめて二枚組になっている。CDあり。一九八八年三月発売。

11『ザ・ビートルズ・ライヴ・アット・ザ・BBC』

BBCでのライヴ音源を集めた、二枚組。CDあり。一九九四年十一月発売。

12『アンソロジー 1』

ビートルズの歴史をたどる、珍しいヴァージョンを集めた二枚組。CDあり。一九九五年十一月発売。

13『アンソロジー 2』

CDあり。一九九六年三月発売。

14『アンソロジー 3』

CDあり。一九九六年十月発売。

15『イエロー・サブマリン・ソングトラック』

映画『イエロー・サブマリン』で使われた曲を集めたもので、初めてリミックスされた。CDあり。一九九九年九月発売。

16『ザ・ビートルズ 1』

日本だけでも三百万枚のスーパー・ヒットになった、ベスト・アルバム。CDあり。二〇〇〇年十一月発売。

17 『レット・イット・ビー…ネイキッド』
『レット・イット・ビー』を『ゲット・バック』のコンセプトで、シンプルにライヴ感覚にリミックスしたもの。CDあり。二〇〇三年十一月発売。

18 『ラヴ』
シルク・ドゥ・ソレイユのために、曲を解体して再構築したもの。CDあり。二〇〇六年十一月発売。

現在、僕にはビートルズ・ファンの友達が、たくさんいる。そういうわけだから、五十代や四十代は当たり前であって、三十代や二十代の仲間もいる。そういう人達と酒を飲みながらビートルズの話をするというのが、一番の喜びである。良い時代になった。

ビートルズは北極星である。他の星は動いても、北極星はいつでも同じところで輝いている。しかし、約四百光年の彼方にあるというから、今夜僕達が見る光は四百年前の光ということになる。逆にいうと、今消滅したとしても、四百年後まで輝いているということにもなる。だから、僕達が死んだ後も、北極星はずっとずっと光り輝い

ている。五十光年の彼方で光り輝いているビートルズに、感謝したい。

CamScannerでスキャン

おわりに

ビートルズの解散後に、ビートルズを正当に評価するのが難しい時期があった。元メンバーの四人でも、それはそうだったのだろうと思う。少し変わってきたのは一九九〇年前後からで、ポール、ジョージ、リンゴがコンサートで当たり前のようにビートルズの曲を演奏し始めてからだった。そして、一九九五年から始まった『アンソロジー』のリリースで、もう大きな声でビートルズを語っても良いことになったのである。

一九八二年にロンドンでポールにインタヴューしたときには、僕はビートルズのビの字も口にしてはいない。『タッグ・オブ・ウォー』に関する質問だけでも、充分だったということもあった。ポールは三十分の約束の時間を一時間にしてくれて、サインもしてくれた。一九九二年にアトランタでリンゴにインタヴューしたときには、ビ

ートルズの質問をしたら怒られた。三十分の約束を、十五分にされた。あとで廊下ですれちがっても、目を合わせてもくれなかった。

ビートルズの活動期間を「ラヴ・ミー・ドゥー／P・S・アイ・ラヴ・ユー」のレコーディングから『アビイ・ロード』のリリースまでと考えたら、七年弱ということになる。山口百恵の活動期間は、七年半だという。山口百恵もレジェンドではあるけれど、ビートルズのほうが活動期間が短いというのにはびっくりする。七年で、世界を変えてしまったのだから。

ロンドン・オリンピックの開会式で、ポールは「ヘイ・ジュード」を歌った。もしもあのときあそこにもうひとつドラムをセットして、リンゴも加わっていたら世界は狂喜していただろう。それだけで、イギリスに金メダルをひとつあげていただろう。なんだったら、金銀銅の詰め合わせをあげてもいい。

この本を作るにあたって、「ロッキング・オン」や「大人のロック」をはじめ、この十年ぐらいに書いたものをまとめれば、それほど苦労はしないのではないかと思っていた。しかし、甘かった。原稿枚数が少ない……テーマが異なっている……文体が変わっている……。生かせる部分はあったのだけど、ほとんどすべてが書き下ろしと

いうことになった。

そこらへんで迷ってしまったので、編集の刈谷政則さんには大変に御迷惑をかけた。宇野亞喜良さんには、素晴らしい作品を描いていただいた。いっしょにリヴァプールに行ったこともある井上ジェイ君にも、写真で協力してもらった。本当に、刈谷さんがいなかったら、この一冊は存在していない。みなさん、ありがとうございます。そして、一番にそれを言いたいのは、北の夜空で光り輝いているビートルズである。

松村雄策

二〇一二年十月

CamScannerでスキャン

〈はじめに〉で触れているように、これは二〇一二年にビートルズのレコード・デビュー五〇周年で記した一冊である。残念なのは、「ラヴ・ミー・ドゥー／P・S・アイ・ラヴ・ユー」のリリースの十月五日には間にあわなくて、十月二十七日の発売になってしまったことだ。しかし、その原因は原稿の完成が遅れたことで、つまり僕が悪かったのである。これはもうしょうがない。それでも、この執筆時には個人的にいろいろなことがあって、そういうなかで書き上げることが出来たのは、それなりに自信になった。まあ、還暦過ぎて自信をつけても、どうしようもないんだけど。

さて、二〇一二年十月以降もビートルズは生きていて、新しいアルバムがリリースされている。二〇一三年十一月には、『オン・エア〜ライヴ・アット・ザ・BBC ヴォリューム2』が発表された。これは一九九四年十一月の『ライヴ・アット・ザ・

BBC』の続篇である。また、二〇一四年六月には、『ミート・ザ・ビートルズ　ジャパン・ボックス』が発売されて、これは興味深い。
本文でも書いたとおりに、六〇年代中頃までは、各国が好きな選曲で好きなジャケットで好きなタイトルで、レコードを発売することが出来た。そのなかでもアメリカは非常識といってもいいぐらいで、イギリスのオリジナル・アルバムを解体してしまって、『イエスタデイ・アンド・トゥデイ』などは、『ヘルプ!』と『ラバー・ソウル』と『リヴォルヴァー』が混在している。
その後、ビートルズのアルバムはイギリスのオリジナルに則したものでなければならないということになって、現在のCDはすべてそうなっている。ただし、『マジカル・ミステリー・ツアー』だけは、アメリカ編集が許されている。
ところが、二〇〇四年十一月、アメリカで『ザ・ビートルズ・キャピトル・アルバムズ　ヴォリューム1』というボックス・セットが発売になった。これはビートルズのアメリカ・デビュー四〇周年ということで、一九六四年のキャピトル・レコードの『ミート・ザ・ビートルズ』、『ザ・ビートルズ・セカンド・アルバム』、『サムシング・ニュー』、『ビートルズ '65』をペイパー・ジャケットのCDにしたものである。
ビートルズはイギリスのオリジナルというのは、ここで御破算になった。二〇〇六

年には、『ヴォリューム2』として一九六五年の『ジ・アーリー・ビートルズ』、『ビートルズⅥ』、『ラバー・ソウル』、『イエスタデイ・アンド・トゥデイ』も発売されている。他の国のそういうニュースは聞かないから、アメリカだけなのだろう。これらの日本盤も発売されているけれど、これは日本とは関係がないから僕は勘定には入れていない。

そして、『ミート・ザ・ビートルズ　ジャパン・ボックス』である。これは日本でのレコード・デビュー五〇周年で、日本で選曲した『ザ・ビートルズ!』、『ビートルズ・ナンバー2』、『ビートルズ・ナンバー5』と、ジャケットが異なる『ア・ハード・デイズ・ナイト』、『ヘルプ!』を、ペイパー・ジャケットのCDにしたものである。

アメリカには文句のひとつも言いたかったのだけど、日本のものが出たのでもういいことにしよう。僕が最初に買ったLPは『ア・ハード・デイズ・ナイト』で次は『ヘルプ!』だったから、これは嬉しい。六月というのは、一九六六年の来日を想起したのだろう。めでたしめでたし、あっぱれあっぱれ。

あと、CDにしてもらいたいのは『ザ・ビートルズ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』である。一九六四年と一九六五年のライヴで、当時のビートルズのコンサート

会場は混乱していて、レコードに出来るものは十三曲しかなかったというのは、分かっている。それでも、現在の技術でなんとかならないのだろうか。もうヴォーカルやギターがオフになっていてもかまわないから、二十曲ぐらいで一枚にしてもらいたい。

二〇一二年のときと同じように、これも刈谷政則さんに作っていただいた。ありがとうございます。解説は佐藤剛さんに書いていただいた。そのうち、飲みに行きましょうね。

二〇一四年十二月四日（四日後は、ジョン・レノンの三十四回目の命日だ）

松村雄策

ビートルズのことを書いたり語ったりする松村雄策さんの言葉や文章は、わかりやすくて面白いだけでなく、どこかに優しいところがある。しかも、ご自分の体験にしっかりと裏付けられているから、ごまかしがなくて毅然としている。

ぼくは一九五二年生まれ、松村さんよりひとつ年下なのだが、早生まれだったので学年は一緒だった。だから読んでいるとすぐに少年時代にタイムスリップして、自分と比較して驚いたり、なるほどと頷いたりしてしまう。

本書を読んでまず最初に思い出したのは、トランジスタ・ラジオから聞こえてくる外国の音楽に目覚めた、一九六四年の自分だった。

当時は毎晩必ずどこかのラジオ局で洋楽のヒット・パレード番組が放送されて

いた。基本的にはアメリカン・ポップスで、そこにフランスのシャンソンやイタリアのカンツォーネも入ってきていた。

（本書36ページ）

宮城県仙台市に住んでいた十二歳の春、父が中学の入学祝いにとトランジスタ・ラジオを買ってくれた。中波と短波を切り替えて聴くことが出来るソニーのＮＴＲ８１９Ｘの価格は一万二千二百円、当時の大卒の初任給と大差ないほど高価だった。短波では海外の放送も聴けたので、ぼくは夕方になると海外の放送局からの電波を受信することに熱中した。時には太平洋を越えて遠くアメリカや、ヨーロッパの放送局の電波が聞こえた。

各都道府県ごとに電波を出していたＮＨＫが放送終了する夜十一時以降になると、中波でも東京や大阪、名古屋、福岡など民放局の番組が受信できた。当時は洋楽の最新情報を伝えてくれるのがニッポン放送、文化放送、ＴＢＳ、それにラジオ関東だったので、懸命にチューニングを合わせて、雑音の中から音楽をキャッチしていた。

ぼくと同じ一九五二年生まれの忌野清志郎が、当時の少年たちがトランジスタ・ラジオに抱いていた気持ちを、見事に歌に残してくれている。

ベイ・エリアから リバプールから
このアンテナが キャッチしたナンバー
彼女 教科書 ひろげてるとき
ホットなメッセージ 空にとけてった
（RCサクセション「トランジスタ・ラジオ」）

年頭からアメリカ上陸で騒がれていたビートルズを筆頭に、デイブ・クラーク・ファイブやローリング・ストーンズ、アニマルズ、キンクスなどのレコードが、ラジオで次々に紹介されていた。アメリカからはエレキギターを手にしたボブ・ディランや、ごきげんなビートのシュープリームスが届いた。

フランスからはシルヴィー・ヴァルタン、イタリアからはジリオラ・チンクェッティが登場して胸がときめいた。心のアンテナ感度さえ高めていれば、素晴らしい音楽に次々と出会える。今になって思えば、一九六四年は最高の年だった。

しかし、地方に住んでいるとそうした音楽の情報は、なかなか伝わってこなかった。雑音の中から聞こえてくる東京のラジオ局に耳をそばだてていても、いつもいいところで電波が弱まって聞こえなくなるのだ。運良くサビなんかが聞けたとしても、こん

どはＤＪの曲紹介が雑音に消されて、誰のなんという曲かがわからない。そんなことが続くと、ラジオから存分に音楽を聞ける人が、心底うらやましいと思った。だから絶対に東京の大学へ入ろうと決めた。

一九六三年、イギリスのトップに立ったビートルズは、一九六四年、アメリカのトップに立つことになる。つまり、それは世界のトップに立つということである。ついに、世界を動かすマジカル・ミステリー・ツアーが始まったのである。

（31ページ）

当時は洋楽のシングル盤が三百三十円、邦楽は三百円だった。中学生になって小遣いが五百円になったが、少年サンデーと少年マガジンだけで五〇円×八冊で四〇〇円かかった。残りを貯めたとしても、三か月に一枚のシングル盤がせいぜいということになる。

レコードを購入するには、それなりの決心が必要だった。四月に発売されたビートルズのＬＰ『ビートルズ！』の価格は千五百円、当時のぼくにはとても手が出せない高嶺の花だった。

CamScannerでスキャン

本書でも触れられているが、日本で最初に出たビートルズのレコードは、二月五日の「抱きしめたい」だった。それから六月五日の「プリーズ・ミスター・ポストマン」まで、矢継ぎ早に四か月の間に九枚ものシングル盤が出された。

どれにしたらいいものかと決めあぐねていたぼくが、臨時収入を手にしてレコードを買いに行ったのは、夏休みも後半に入ってからのことだ。連日続いていた剣道部の夏季集中練習が終わったその日、午後から繁華街に出かけたぼくは、意気揚々とした気分で家に帰ってきた。

ずっとほしかった「抱きしめたい」と「ツイスト・アンド・シャウト」のほかに、「プリーズ・プリーズ・ミー」と「シー・ラヴズ・ユー」という、シングル盤のＡ面曲が四曲も入っていて、しかも価格が五百円というレコードを見つけたからだった。

通常の四五回転シングル盤（モノラル）ではなく、三三回転コンパクトＥＰ（ステレオ）というものがあることを、ぼくはそこで初めて知った。それ以来、ぼくはビートルズをコンパクトＥＰで揃えていくことになる。

スピーカーの音が割れる寸前まで音量を上げて聴くと、下半身から頭までゾクゾクした。それまで聴いていた音楽にはないエネルギーの塊のようなものが、身体の芯から頭まで何かを訴えてくるのがわかった。

遅ればせながら仙台の中学一年生として、ぼくも世界を動かすマジカル・ミステリー・ツアーの隅っこの方に参加したのである。

ボストン・プレイスの一本の道を走って来るビートルズを見て、僕と同じように人生が決定した人は世界中に数え切れないぐらいいるだろう。百万人だろうか、二百万人だろうか。三百万人だろうか、四百万人だろうか。だって、ロンドンから遠く離れた東京の、大森の中学一年生でもそうなったのだから。（59ページ）

その頃の仲間やクラブの先輩の中で、ビートルズに関心のある人をぼくは誰も知らなかった。御三家なんかに詳しい親戚の姉さんたちも、ビートルズの理解者ではなかった。本書で松村さんが「誰もビートルズを知らなかった」と書いた通りだった。ビートルズを知っているのは〝一クラスに二、三人といったところだった〟と松村さんは書いているが、それは東京という大都会の話であって、地方都市の仙台ではもっと比率が低かったように思う。

ビートルズが一般にまで伝わったのは映画『ビートルズがやって来る ヤァ！ヤァ！ヤァ！』の公開がきっかけだった。そこからアイドル的な人気が出て、女の子た

ちのファンが増えたように思う。

どうしてぼくが映画を観に行けなかったのか、今ではもう思いだせない。行こうとかったのに行けないまま、すぐに上映が終わったような気がする。だから次の映画『ヘルプ！４人はアイドル』は、見逃さないように封切りの日に仙台東宝劇場に行った。『ヘルプ！４人はアイドル』は映画としても面白かったので、その後も二度ほど映画館に足を運んだ。

『ラバー・ソウル』以後のビートルズのほとんどのレコードは、ロックンロールの五十年の歴史の中で、名作に認定されているということである。レコード・デビュー三年目で、歴史上の名作を作ったのである、ビートルズは。（83ページ）

一九六六年になって来日の話が話題になり始めると、それにつれて世間的な風当たりや反発が強まっていった。音楽にはまったく関係ないところで、話題だけが取り上げられていく。単に不良少年や婦女子がかぶれる珍奇な風俗として、長髪やエレキギターなどがセットになって、憂うべき社会現象と見なされたのである。

そんな時期にぼくは初めて、ビートルズのLPを買った。三月に『ラバー・ソウ

ル』が発売された時は、いつものように五月まで待って、SIDE1が「ミッシェル／ガール」、SIDE2が「ひとりぼっちのあいつ／消えた恋」という、四曲入りコンパクトEPを手に入れて我慢していた。にもかかわらず、意を決してアルバムを購入することにしたのは、ラジオで聞いた「ノルウェーの森」や「恋をするなら」をどうしても聴きたくなったからだ。

そこには武道館で来日公演があるのに東京までは行けないという、地方に住む悔しさを晴らす意味合いもあった。

だがそれは、大正解だった。ぼくは歴史上の名作と出会うことになったのである。

> ともかく、ビートルズの日本武道館のコンサートには、敵が多かった。警察、教育委員会、PTA、大学応援団、新聞、雑誌……。しかし、僕達は負けなかったのだ。ジョンとポールとジョージとリンゴが演奏しているのを見たのだから。一九六六年七月一日日本武道館、十五歳の僕はビートルズを見たのである。それが僕の人生を決定し、僕は今ここにいるのである。
>
> （130ページ）

来日公演をテレビで観てから、ひと月ぐらい経ったある日のことだった。ふと「ノ

ルウェーの森」や「ミッシェル」は、二、三十年もすれば音楽の教科書に載るんじゃないかと、そんな考えが頭に浮かんだ。

五十年後か百年後かはわからないが、きっとベートーヴェンの「月光」や「運命」、チャイコフスキーの「白鳥の湖」のようにクラシックとして扱われる。そんな当たり前のことに、どうしてみんなは気が付かないのかと不思議な感覚にとらわれた。

十四歳の夏だった。なぜか仙台市荒町にある真宗満福寺の境内、毘沙門天さんの前でそう思ったのである。

おそらくその時、ぼくの人生は決定したのだろう。

次に紹介するのは、「上を向いて歩こう」の生みの親である作曲家の中村八大が、来日公演の後で語った貴重な発言である。

あまり気がすすまないままに公演にでかけた。でも公演をきいて感動した。本当のものが確かにある。それでいまビートルズの音楽を分析しているところですが、作品は相当すごい。歌も常識とかなり違っている。音楽も、ポピュラーとはいえ、教会音楽、それに長いヨーロッパ音楽の伝統が生かされ、非常に高度だと感じた。

CamScannerでスキャン

とくに最近の音楽は、誰にでもやれるというものではない。あの音楽は、楽しく陽気なのとはまったく逆のもの。深刻で本質的なものをもっている。

当時のビートルズとその音楽に対する認識や状況については、本書の「ビートルズを見た――一九六六年七月一日・日本武道館」が伝える通りだった。保守的で新しい文化に対する理解が欠如している老人ばかりでなく、若手の作家や文化人までもが、ビートルズに熱狂する少年少女を一種の精神病であるかのように見なしていた。

しかしビートルズは中村八大の心をしっかりとらえていた。武道館に足を運んでビートルズ公演を聴いて、素直に「感動した」と語った数少ない、もしかするとたったひとりの音楽家が中村八大だった。

ビートルズの音楽に対して評価が定まっていなかった一九六六年の時点で、これだけ真摯な言葉を公にした音楽家を、ぼくは他に知らない。

「本当のものが確かにある」と気付いたというコメントが、いかに的を射たものであったのか、現在では誰もが知っていることである。

この発言を読み返すたびに、ぼくは音楽の持つ真の力というものと、音楽の神様の存在について考えさせられる。

三年間毎日レコードを聴いていたビートルズが、実際に演奏をしている。今となっては、それは神を見たということになる。
この日本公演のビートルズの演奏は、とても素晴らしいとはいえないものだった。そんなことは、どうでもいいのだ。
（129ページ）

ここは松村さんの真骨頂だと、ぼくが激しく同意したところだ。そして、それは中村八大にとっても同じだったのである。

ビートルズの音楽に自分と共通する何かを感じた中村八大は、あらためてビートルズのレコードを真剣に聴いて、〝作品は相当すごい〟という答えにたどりついた。そして〝歌も常識とかなり違っている〟と、音楽家の耳で正しく分析している。

これは本書で松村さんが〝複雑なんてもんじゃない〟と指摘した、「ひとりぼっちのあいつ」のコーラス・アレンジや、「デイ・トリッパー」でのリード・ヴォーカルの入れ替わりなどを指しているに違いない。

自分が音楽で表現したいものと共通する〝本当のもの〟を、ビートルズが持っていることに気付いた中村八大は、もしかするとジョンの心のひきこもりさえも、音楽か

ら感じたのかもしれない。
〝誰にでもやれるというものではない。あの音楽は、楽しく陽気なのとはまったく逆のもの〟という言葉に続けて、〝深刻で本質的なもの〟と言っているのである。中村八大にはビートルズの楽曲だけではなく、創作者たちの心の奥にある魂までも伝わったのではないか。

ビートルズの活動期間を「ラヴ・ミー・ドゥ／P・S・アイ・ラヴ・ユー」のレコーディングから『アビイ・ロード』のリリースまでと考えたら、七年弱ということになる。山口百恵の活動期間は、七年半だという。山口百恵もレジェンドではあるけれど、ビートルズのほうが活動期間が短いというのにはびっくりする。七年で、世界を変えてしまったのだから。

（229ページ）

初めてビートルズを聴いてから十年、ぼくは「日本の歌謡曲の過去・現在・未来～山口百恵論」という卒業論文を書いて、東京の大学を出て社会人になった。そして音楽に関わる仕事に就いてから、もう四十年以上が過ぎて現在に至っている。
ビートルズのように世界に通じるバンドを出したいという思いを抱いて、長らくマ

ネージメントやプロデュースにたずさわってきた。

近年はそれと並行して日本でただ一曲、世界に通用してスタンダードになった「上を向いて歩こう」を生み出した音楽家、中村八大の生涯と全仕事の研究にもライフワークとして取り組んでいる。

いみじくも本書には松村さんが初めて買ったレコードが、坂本九の「上を向いて歩こう」だったと記されている。ぼくの場合は梓みちよの「こんにちは赤ちゃん」だった。いずれも中村八大の代表作であり、そこも共通していることがわかってうれしかった。

ところでビートルズと中村八大の作品にも、実は共通する特徴があることをご存知だろうか。両者の代表曲を思いつくまま、古い順に並べるだけでそれがよくわかる。

「ラヴ・ミー・ドゥ」
「シー・ラヴズ・ユー」
「キャント・バイ・ミー・ラヴ」
「ヘルプ！」

「イエスタデイ」
「ミッシェル」
「ペイパーバック・ライター」
「ペニー・レイン」
「レディ・マドンナ」
「ヘイ・ジュード」
「オー！ ダーリン」
「ドント・レット・ミー・ダウン」
「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」

「黒い花びら」（歌：水原弘）
「夢であいましょう」（歌：坂本スミ子）
「じんじろげ」（歌：森山加代子）
「上を向いて歩こう」（歌：坂本九）
「おさななじみ」（歌：デューク・エイセス）
「こんにちは赤ちゃん」（歌：梓みちよ）

CamScannerでスキャン

「いつもの小道で」（歌：田辺靖雄、梓みちよ）
「明日があるさ」（歌：坂本九）
「涙にしてみれば」（歌：松尾和子）
「帰ろかな」（歌：北島三郎）

いずれも曲のタイトルと歌い出しの歌詞が一致している。タイトルからすぐに歌詞とメロディが口をついて出てくる。そんなヒット曲の比率がきわめて高いことが、両者に共通する特徴なのである。

覚えやすくてすぐに口ずさめるということは、後世にまで歌い継がれてスタンダードになる作品が多いということにも密接に関係しているはずだ。両者ともに最初のつかみが上手いのは、ソングライティング上の技巧ではなく、素直な心の訴えが歌になっているからなのだろうと、今のぼくは理解している。

そんなことに気づいたのも、松村さんが語るビートルズや、ビートルズの音楽についての新しい発見、面白いエピソードの数々のおかげだった。

ぼくにとっての松村さんは、今なお増え続ける数多のビートルズに関する言説のなかで、いつも同じ場所からずっと光り輝いている北極星のようなものだということが、

本書によってあらためて確認できた。

これからもビートルズの素晴らしさを、多くの人たちに広めてほしいと願ってペンを置きたい。

二〇一四年十二月三日

（注）中村八大の発言は、『ビートルズレポート――東京を狂乱させた5日間（話の特集完全復刻版）』（WAVE出版）の48ページからの引用です。

（さとう　ごう／プロデューサー・作家）

CamScannerでスキャン